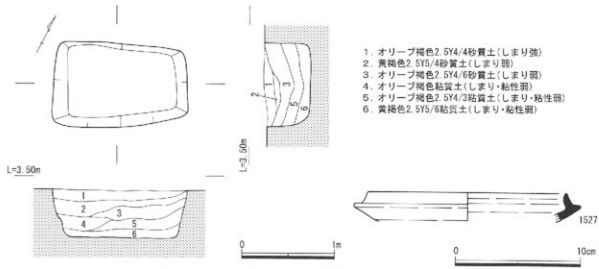
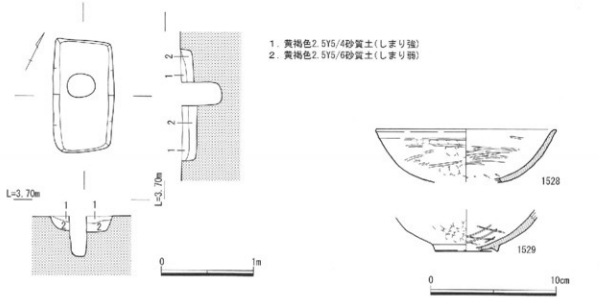
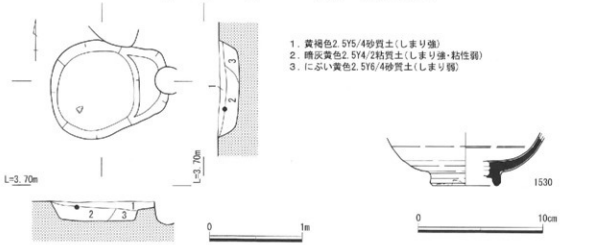


第549図　Ⅱ地区 SK1211遺構・遺物実測図



第550図　Ⅱ地区 SK1212遺構・遺物実測図



第551図　Ⅱ地区 SK1213遺構・遺物実測図

土坑213号（Ⅱ地区　SK1213）（第551図）

Ⅱ－７区西部北側，m13グリッドに位置する，長軸124cm 短軸104cm 深度20cm を測る不整形土坑。断面は逆台形状で，東に段を有する。埋土は３層に分層できる。遺物は弥生土器片，土師質土器片，青磁碗が出土。1530は２層上面から出土した青磁碗の底部。釉は透明度高く貫入を伴い，高台外側まで施釉する。釉の一部は畳付に達する。胎土に微細な黒斑を含む。上田分類Ｄ－１類に相当し，14～15世紀代の年代が与えられる。

土坑215号（Ⅱ地区　SK1215）（第552図）

Ⅱ－７区中央部南側，ｉ11･12グリッドに位置する，南北長92cm 東西残存長66cm 深度42cm を測る不整形土坑で，西はSK1210に切られる。断面は逆台形状で，埋土は６層に分層できる。出土遺物は１点のみで，1531は砂岩製砥石。２面を砥面として使用する。遺構の年代は不明。

土坑216号（Ⅱ地区　SK1216）（第553図）

Ⅱ－７区中央部，ｌ12グリッドに位置する，長軸236cm 短軸144cm 深度36cm を測る不整形土坑。断面は不整な逆台形状で，埋土は６層に分層できる。

遺物は遺構西半部の底部付近に多く，弥生土器片・甕，須恵器杯，土師質土器片・杯（回転ヘラ切り）・皿・鍋，黒色土器椀（Ａ類），瓦器椀，須恵質土器貯蔵具（平行タタキ），備前陶器擂鉢，青磁皿・碗，染付碗，鉄釘，鉄滓，サヌカイト片，被熱砂岩礫が出土。

1532は回転台成形の土師質土器皿。口縁端部を方形に作る。1533は回転台成形の土師質土器杯で，底部外面は切り離し痕をナデ消す。

1534は青磁の稜花皿。内面はヘラ片彫によって施文する。釉に粗い貫入を伴う。15世紀初頭～16世紀中葉とみられる。1535は青磁碗の上半部。体部外面はヘラ片彫によって鎬を省略した蓮弁を，体部内面には雲形または花文を施文する。上田分類Ｂ－Ⅲ類に相当し，15世紀代の年代が与えられる。1536は青磁碗の下半部。体部外面にヘラ先による細蓮弁文を施文する。釉は白濁のため透明度なく，ごく粗い貫入を伴う。全面施釉のち，底部外面の釉を輪状に掻き取る。底部外面の露胎部分は赤色に発色し，輪積痕の痕跡を残す。上田分類Ｂ－Ⅳ－ｂ類に相当し，15世紀後半～16世紀代の年代が与えられる。1537は青磁碗の下半部。底部内面に十字花文がやや崩れた印花文スタンプを施す。釉は高台外面の途中まで施釉する。破面のエッジに磨耗部分があり，スクレイパー的な二次的使用の痕跡と考えられる。上田分類Ｅ類に相当し，15世紀後半～16世紀代の年代が与えられる。

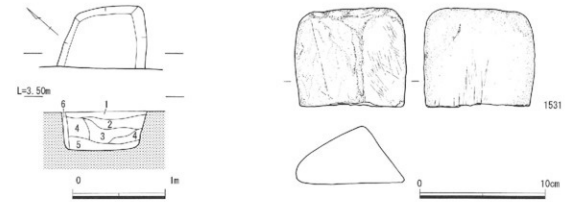
1538は染付碗。体部外面に牡丹唐草文を描く。釉に粗い貫入を伴う。小野分類の染付碗Ｂ群Ⅶ類に相当し，14世紀末～15世紀中葉の年代が与えられる。

1539は備前焼の陶器擂鉢。口縁は上方に拡張するが，下方への拡張はみられない。内面は使用により磨耗する。重根編年ⅣＢ－２期に相当し，15世紀末～16世紀初頭の年代が与えられる。

土坑256号（Ⅱ地区　SK1256）（第554図）

Ⅱ－９区南西隅，ｊ15グリッドに位置する，長軸132cm 短軸128cm 深度22cm を測る隅丸方形土坑。断面は逆台形状で，埋土は４層に分層できる。

遺物は土師器鍋，土師質土器片，黒色土器椀（Ａ類），瓦器椀・皿，須恵質土器貯蔵具，不明鉄製品が

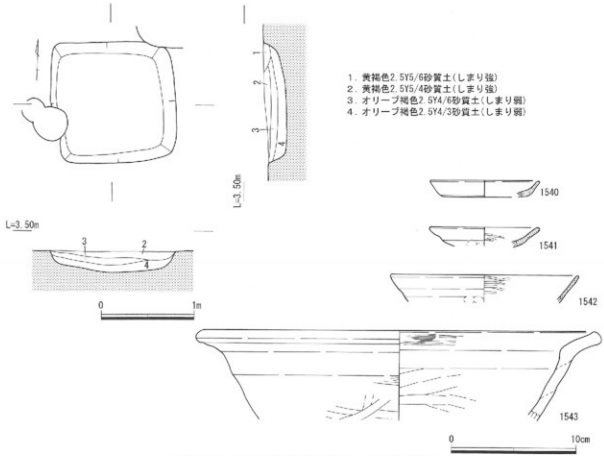


1．黄褐色2.5Y5/4砂質土(しまり強)
2．オリーブ褐色2.5Y4/4砂質土(しまり強)
3．オリーブ褐色粘質土(しまり・粘性弱)
4．オリーブ褐色2.5Y4/3粘質土(しまり・粘性弱)
5．黄褐色2.5Y5/4粘質土(しまり弱・粘性強)
6．暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性弱)

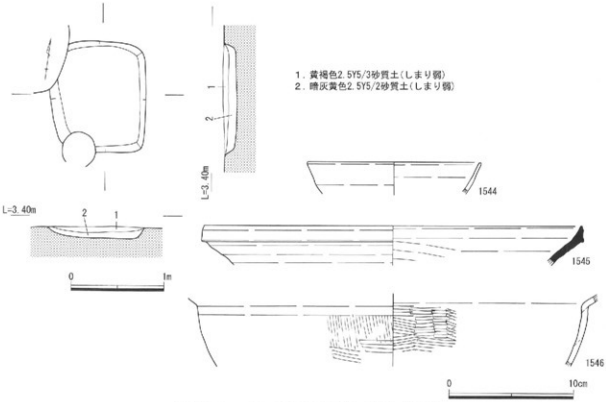
第552図　Ⅱ地区 SK1215遺構・遺物実測図

1．オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり強)
2．暗灰黄色2.5Y4/2砂質土(しまり強)
3．オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり弱)
4．黒褐色2.5Y3/1粘質土(しまり・粘性弱)
5．暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質土(しまり・粘性強)
6．黒褐色2.5Y3/2粘質土(しまり・粘性弱)

第553図　Ⅱ地区 SK1216遺構・遺物実測図



第554図　Ⅱ地区 SK1256遺構・遺物実測図



第555図　Ⅱ地区 SK1262遺構・遺物実測図

出土。1540・1541は瓦器皿。1540はヘラミガキが確認できない。1541は体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着ややや不良。和泉型瓦器Ⅲ－3～Ⅳ期併行か。1542は瓦器椀。口径14.9cm を測るが，小片のため復元径は不正確。体部内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着はやや不良。和泉型瓦器椀Ⅲ－3期，13世紀前葉とみられる。1543は土師質土器鍋。厚い器壁をもつ。口縁内面にヨコハケ，体部内外面は板ナデにより調整する。胎土に金雲母を含む。瀬戸内沿岸～大阪湾岸からの搬入品。古代末に遡る可能性がある。遺構の年代は，出土遺物に時期幅があるが概ね13世紀代と考えられる。

土坑262号（Ⅱ地区　SK1262）（第555図）

Ⅱ－9区南端部西側，j・k15グリッドに位置する，長軸118cm 短軸102cm 深度14cm を測る不整な隅丸方形土坑。断面は浅い皿状で，埋土は2層に分層できる。

遺物は土師質土器杯・鍋，瓦器椀，須恵質土器捏鉢が出土。1544は土師質土器の杯とみられ，非回転台成形の可能性がある。口縁端部内側を強いヨコナデによってわずかに凹線状に作る。1545は東播系の須恵質土器捏鉢。口縁端部を上下に拡張。森田編年第Ⅱ期第2段階～第Ⅲ期第1段階とみられ，12世紀末～13世紀後半の年代が与えられる。1546は土師質土器鍋。体部内外面はハケによって調整する。浅黄橙色を呈する。技法・色調から吉備系の可能性あり。遺構の年代は，出土遺物から概ね13世紀代と考えられる。

土坑267号（Ⅱ地区　SK1267）（第556図）

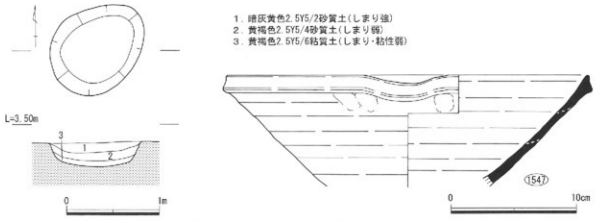
Ⅱ－9区南端部中央，k16グリッドに位置する，長軸110cm 短軸88cm 深度24cm を測る不整円形土坑。断面は逆台形状で，埋土は3層に分層。遺物は土師質土器片，鎌，黒色土器椀（B類），瓦器椀，須恵質土器捏鉢・貯蔵具，鉄滓が出土。1547は東播系の須恵質土器捏鉢。口縁端部を上下に拡張。体部内面下位は使用により磨耗。森田編年の第Ⅱ期第2段階に相当し，12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。遺構の年代は，出土遺物に時期幅があるが12世紀末～13世紀前半と考えられる。

土坑271号（Ⅱ地区　SK1271）（第557図）

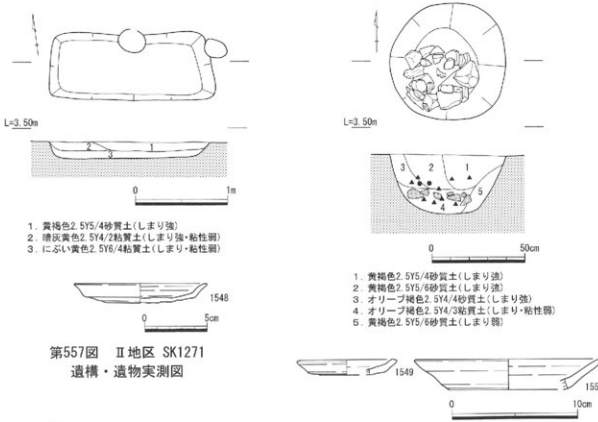
Ⅱ－9区南部中央，k・l15・16グリッドに位置する，長軸176cm 短軸72cm 深度18cm を測る不整な長方形土坑。断面は逆台形状で，埋土は3層に分層できる。遺物は土師質土器皿・鍋が出土。1548は土師質土器皿。回転台成形で，底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。胎土に結晶片岩と絹雲母を含む。遺構の年代は，出土遺物から概ね古代末～中世初頭と考えられる。

土坑277号（Ⅱ地区　SK1277）（第558図）

Ⅱ－9区南部東側，l17グリッドに位置する，長軸62cm 短軸61cm 深度32cm を測る円形土坑。断面は椀形で，埋土は5層に分層できる。遺物は須恵器杯，土師質土器椀・杯・皿・鍋，黒色土器椀（B類）が出土。1～3層の下位および4層上位で礫が多く出土している。1549は土師質土器皿。回転台成形で，底部外面は切り離し痕をナデ消す。胎土に結晶片岩とみられる粒子を含む。1550は回転台成形の土師質土器杯か皿。遺構の年代は，出土遺物に時期幅があるが概ね古代末～中世初頭と考えられる。

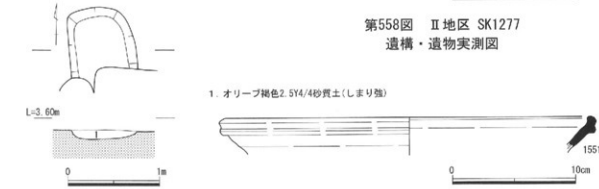


第556図　Ⅱ地区 SK1267遺構・遺物実測図



第557図　Ⅱ地区 SK1271
遺構・遺物実測図

第558図　Ⅱ地区 SK1277
遺構・遺物実測図



第559図　Ⅱ地区 SK1290遺構・遺物実測図

土坑290号（Ⅱ地区　SK1290）（第559図）

Ⅱ－９区北部西側，ｎ・ｏ15グリッドに位置する，長軸残存長90cm 短軸72cm 深度10cm を測る不整な楕円形土坑。断面は浅い皿状で，埋土は１層である。遺物は土師質土器片・鍋，須恵質土器捏鉢が出土。1551は東播系の須恵質土器捏鉢。口縁は上下に拡張する。焼成やや不良で，酸化炎焼成気味である。森田編年の第Ⅱ期第１段階とみられ，12世紀中葉～後半の年代が与えられる。

土坑315号（Ⅱ地区　SK1315）（第560図）

Ⅱ－９区中央部西側，ｍ14・15グリッドに位置する，長軸156cm 短軸68cm 深度22cm を測る不整な長方形土坑。断面は逆台形状で，埋土は１層である。遺物は須恵器杯，土師質土器片が出土。1552は須恵器杯。遺構の年代は，出土遺物から古墳時代後期の可能性がある。

土坑335号（Ⅱ地区　SK1335）（第561図）

Ⅱ－11区東部南側，ｍ１・２グリッドに位置する，長軸114cm 短軸100cm 深度32cm を測る不整円形土坑。断面は緩い逆台形状で，北から東にかけて幅の狭い段を有する。埋土は２層に分層できる。

遺物は土師質土器椀・杯（回転ヘラ切り）・鍋・土錘，黒色土器椀（Ａ類・Ｂ類），瓦器椀・皿，須恵質土器貯蔵具（長格子タタキ・格子タタキ），鉄釘が出土。1553～1555は瓦器椀。1553は口径15.8cm を測るが，小片のため復元径は不正確。体部内面に密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好。1554は口径14.1cm を測る。体部内面に横位のヘラミガキ，底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は良好。1553・1554ともに和泉型瓦器椀Ⅲ－３期に相当し，13世紀前葉の年代が与えられる。1555は口径13.8cm を測る。磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着はみられず，酸化炎焼成する。二次被熱も疑われる。非和泉型の可能性があるが，形状と法量から和泉型瓦器Ⅳ－１期前後に併行すると考えられる。遺構の年代は，出土遺物から13世紀代と考えられる。

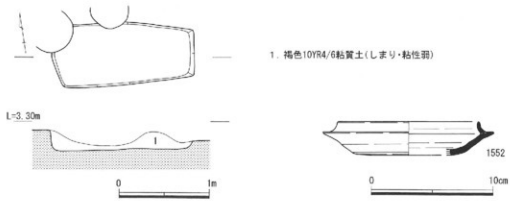
土坑338号（Ⅱ地区　SK1338）（第562図）

Ⅱ－11区西端部南側，ｍ18グリッドに位置する，長軸150cm 短軸110cm 深度16cm を測る不整形土坑。断面は浅い逆台形状で，埋土は１層である。

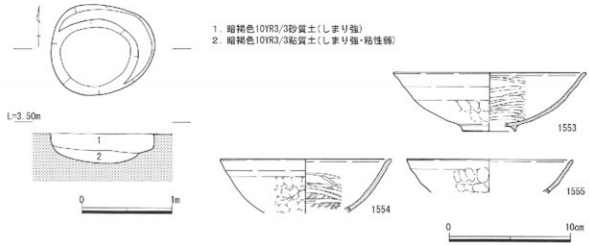
遺物は弥生土器片，土師器片・杯（回転ヘラ切り）・皿・脚付皿，須恵器杯，土師質土錘，黒色土器椀（Ａ類・Ｂ類）が出土。1556は非回転台成形の土師器皿。円盤状で，体部の立ち上がりはほとんどない。1557は土師器高脚高台付皿。底部外面に垂直に延びる高台を貼り付ける。胎土に結晶片岩と絹雲母を含む。1558は土師器皿か杯。回転台成形か。1559は土師器高杯の脚部とみられる。1560は黒色土器Ａ類椀。体部内外面に横位のヘラミガキを施す。内面の炭素吸着はやや不良。1561は黒色土器Ｂ類椀。体部外面に横位のち斜位のヘラミガキ，体部内面に縦位のち横位のヘラミガキを施す。遺構の年代は，出土遺物から概ね11世紀前後と考えられる。

溝１号（Ⅱ地区　SD1001）（第563図）

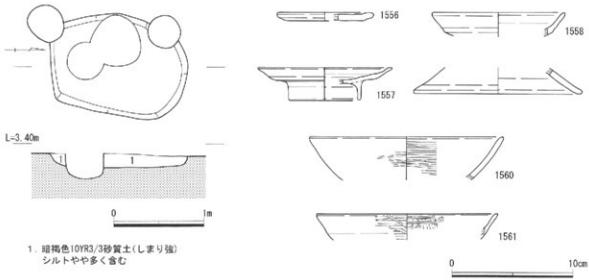
Ⅱ－２・４区，ｄ～ｇ12～７グリッドに位置する。検出長76.5m幅200cm 深度34cm を測り，主軸はN80°Eを向く。東西とも調査区外に延び，西側はⅠ地区SD1060へつながると考えられる。断面は浅いレンズ状または逆台形状を呈し，埋土は４層に分層できる。底面は鉄分の固着がみられることから，滞



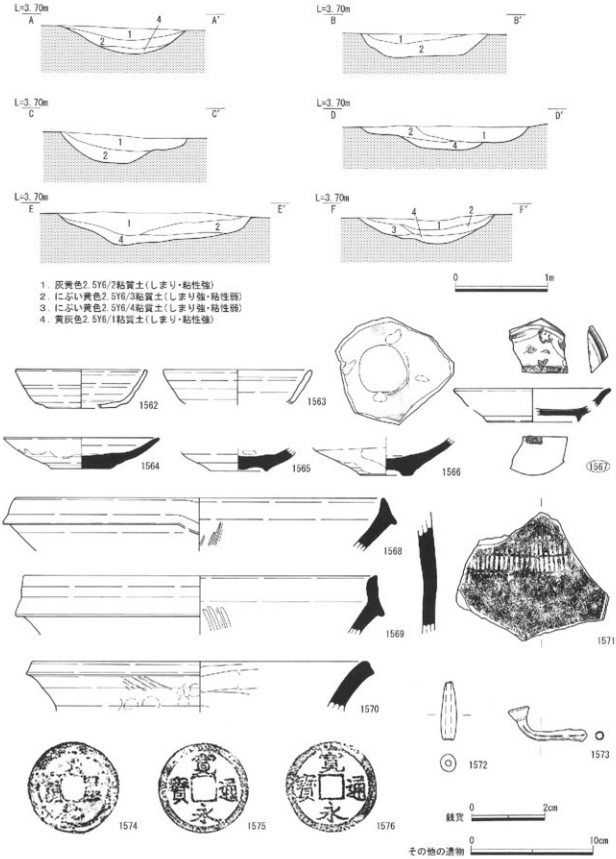
第560図　Ⅱ地区 SK1315遺構・遺物実測図



第561図　Ⅱ地区 SK1335遺構・遺物実測図



第562図　Ⅱ地区 SK1338遺構・遺物実測図



第563図　Ⅱ地区 SD1001遺構・遺物実測図

水状況が想定できる。底面の高さはⅠ地区SD1060と比較するとやや下がるが，Ⅱ地区ではアゼCで若干下がるものの，高低差はあまりみられない。

遺物は弥生土器片，土師質土器椀・杯・鍋・羽釜・貯蔵具（平行タタキ）・土錘，黒色土器椀，瓦器椀，瓦質土器（格子タタキ），瓦片・丸瓦・平瓦，須恵質土器貯蔵具（格子タタキ・平行タタキ）・甕，常滑焼陶器甕，備前陶器片・擂鉢，青磁片，白磁片・碗（玉縁），近世陶磁器（肥前系皿・染付皿・擂鉢），銭貨（寛永通寶・北宋銭），青銅製煙管，鉄滓，砂岩製砥石，骨片，木片，被熱砂岩礫，炭化物が出土。

1562・1563は回転台成形の土師質土器杯で，1562は底部外面の切り離し痕をナデ消す。1564～1566は肥前系の陶器皿。1564は底部外面に回転糸切り痕を残す。1565は底部内面に胎土目１ヶ所残存する。1566は体部内面に胎土目を４ヶ所残す。肥前系鉄絵皿Ⅰ－２期に相当し，16世紀末～17世紀初頭の年代が与えられる。1567は染付皿。内面に呉須絵付け，底部外面に「福」字を描く。畳付部は露胎である。小野分類染付皿Ｂ群，15世紀後半～16世紀代の年代が与えられる。

1568・1569は備前焼の陶器擂鉢。1568は重根編年ⅣＡ－２期に相当し，14世紀後半～15世紀初頭の年代が与えられる。1569は重根編年ⅣＢ－３期に相当し，15世紀末の年代が与えられる。1570は須恵質土器甕。口縁端部は方形に作り，頸部外面に平行タタキの痕跡を残す。東播系とみられ，11世紀末～12世紀代の年代が与えられる。1571は常滑焼の陶器甕。外面に長格子の押印文を施す。12～13世紀代か。

1572は土師質管状土錘。1573は青銅製の煙管雁首。皿部に炭化物を残す。1574～1576は銅銭。1574は北宋銭の天聖元寶（真書体）で，1023年の初鋳。縁青により銭文不鮮明。1575・1576は寛永通寶の古寛永。1575は岡山銭とみられ，1637年初鋳。1576は鋳銭地不明で，初鋳年は1636～1656年の間である。

遺構の年代は出土遺物に時期幅があるが，染付碗や備前焼から開始期は15世紀代に遡る可能性がある。下限は出土銭に新寛永を含まないこと，時代が下る陶磁器が含まれていないことから17世紀中葉と考えられる。

溝２号（Ⅱ地区　SD1002）・整地状遺構（Ⅱ地区　SX1002）（第564～566図）

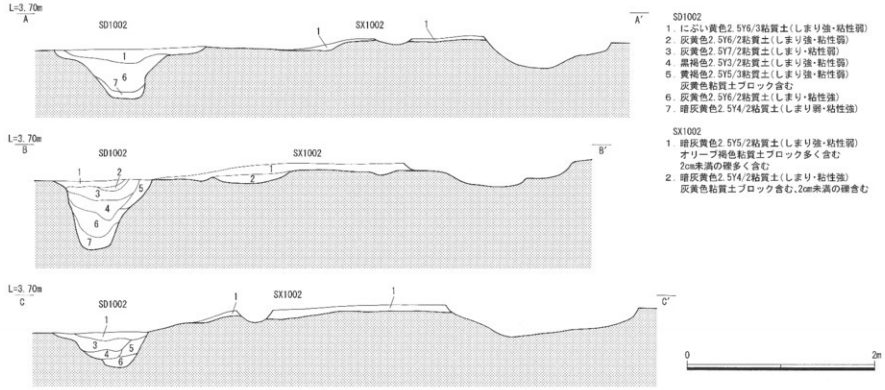
SD1002はⅡ－１・４区で検出した東西溝。SX1002はⅡ－４区部分でSD1002の北側に沿って検出した整地状遺構。SD1002とSX1002は不可分のものと考え，合わせて記述する。

SD1002はⅡ－１・４区，ｃ～ｅ12～５グリッドに位置する。検出長64.0m幅163㎝深度72㎝を測り，主軸はN83°Eを向く。東西とも調査区外に延び，西はⅠ地区SD1056につながると考えられる。断面は逆台形状で部分的に段を有する。埋土は７層に分層できる。

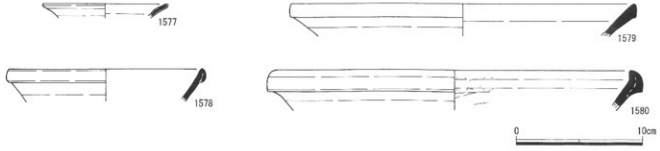
SX1002はⅡ－４区，ｅ・ｆ20～６グリッドに位置する，東西27.5m最大幅318㎝厚み20㎝を測る整地状遺構。SD1002とSD1001との間で不整形な平面形をもつ。断面は薄く広がるレンズ状を呈する。埋土は２層に分層でき，ともに硬く締まって小礫や土器片を多く含む。

Ⅱ－４区はSD1002を境に南側は30㎝ほど地盤が下がる。SD1002北側の地山も徐々に南に向けて下がっているが，整地状遺構SX1002はSD1002の直近まで平坦を確保するための盛土と考えられる。SD1002は遺物の出土量が少なく，断面観察で少なくとも１回の掘り直しが認められることから，再掘削によって生じた廃土が北側に盛り上げられ，整地のために用いられたと考えられる。

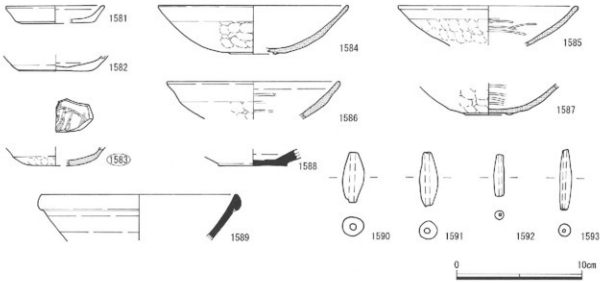
SD1002の遺物は，弥生土器甕，須恵器片，土師質土器杯・皿（回転糸切り）・鍋・羽釜・土錘，黒色



第564図　Ⅱ地区 SD1002・SX1002遺構断面図



第565図　Ⅱ地区 SD1002遺物実測図



第566図　Ⅱ地区 SX1002遺物実測図

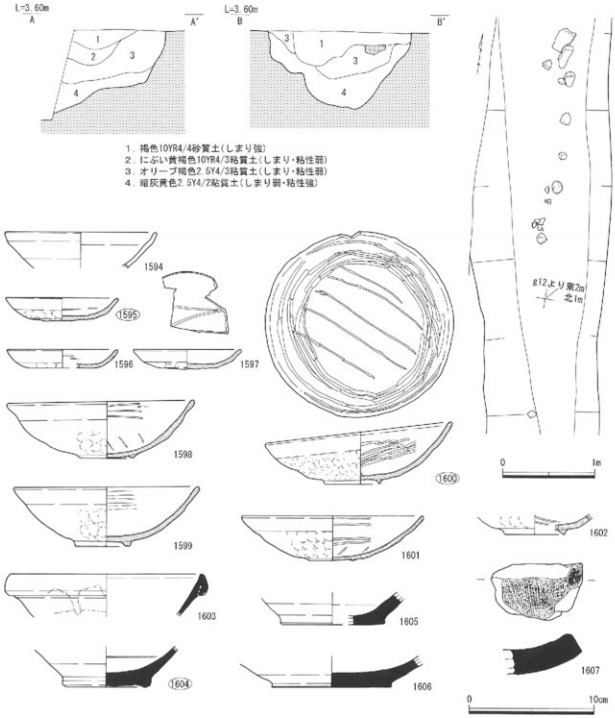
土器椀（A類），瓦器椀，瓦質土器片（格子タタキ），平瓦，須恵質土器片・捏鉢・甕（平行タタキ），常滑焼陶器片，青磁皿，白磁碗（玉縁），鉄釘，鉄滓が出土。1577は青磁皿。釉の透明度高く，貫入を伴う。胎土に微細な黒斑を含む。産地は特定できない。12世紀代か。1578は白磁碗。口縁を玉縁状に作る。内外面に釉とびがみられる。胎土に微細な黒斑を含む。大宰府分類白磁碗Ⅳ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。1579・1580は東播系の須恵質土器捏鉢。1579は口縁に重焼により炭素付着し，森田編年第Ⅱ期第1段階，12世紀中葉～後半。1580は森田編年第Ⅲ期第1段階，13世紀前半～後半。遺構の年代の下限は，出土遺物から13世紀後半頃と考えられる。

SX1002の遺物は質・量ともにSD1002を凌駕する。遺物は須恵器杯，土師質土器椀・杯・皿（回転ヘラ切り・回転糸切り）・鍋（鍔付きほか）・羽釜・土鍾，黒色土器椀（A類・B類），瓦器椀・皿，須恵質土器椀・捏鉢・貯蔵具（格子タタキ・平行タタキ），陶器片（備前・常滑），青磁碗（同安窯系・龍泉窯系），白磁碗，鉄釘，鉄製品片，鉄滓，サヌカイト片が出土。

1581・1582は土師質土器皿。同転台成形で底部外面に同転糸切り痕を残す。1583は瓦器皿。底部内面にジグザグ状のヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器Ⅲ期併行か。1584～1587は瓦器椀。口径は13.8～14.8cm を測る。1585～1587は体部内面に横位のヘラミガキ，1587は底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は1584は不良，1585はやや不良，1586は内面不良・外面良好，1587は良好である。いずれも和泉型瓦器椀で，1584・1587はⅢ－3期，1585・1586はⅢ－3～Ⅳ－1期に相当する。1588は東播系の須恵質土器椀で，底部外面に回転糸切り痕を残す。森田編年の第Ⅰ期に相当し，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。

1589は白磁碗。口縁を玉縁状に作る。外面にわずかに釉とびがみられる。胎土に微細な黒斑を含む。大宰府分類の白磁碗Ⅳ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。1590～1593は土師質管状土錘。遺構の年代は，出土遺物から概ね12～13世紀前半と考えられる。

以上から，溝SD1002の開始期は古く見積もって12世紀前後とみられ，13世紀前半には整地状遺構SX1002が形成され，SD1002は13世紀後半にかけて徐々に埋没したものと考えられる。



第567図　Ⅱ地区 SD1004遺構・遺物実測図

溝４号（Ⅱ地区　SD1004）(第567図)

SD1004～1009は南北方向の溝６条が幅約11mの範囲に並行して走る。本溝群の東15mには，SD1012～1015・1033～1036の南北方向の溝８条が，幅約12mの範囲で並行して走る。

SD1004はⅡ－２・３区西端部，ｄ～ｉ12・13グリッドに位置する。南北は調査区外に延び，南側はⅡ－１区で延長部分を検出していない。検出長29.1m幅162cm 深度82cm を測り，主軸はN10°Wを向く。断面は不整な逆台形状で，部分的に段を有する。埋土は４層に分層できる。３層下面と１層下面で２回の

再掘削が認められる。底面は顕著な高低差はみられない。

遺物は須恵器杯・甕，土師質土器片・杯・鍋・羽釜，瓦器椀・皿，須恵質平瓦，須恵質土器貯蔵具（格子タタキほか）・捏鉢，備前陶器擂鉢，陶器片（格子タタキ），青磁片，白磁碗が出土。

1594は土師質土器杯。非回転台成形の可能性がある。1595～1597は瓦器皿。1595・1596は体部内面に横位のヘラミガキ，1597は底部内面にジグザク状とみられるヘラミガキ暗文を施す。いずれも炭素吸着は良好で，和泉型瓦器のⅢ－３期前後に併行するとみられる。1598～1602は瓦器椀。口径14.6～15.0cmを測り，体部内面に粗い横位のヘラミガキ，1598・1600～1602は底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は，1598はやや不良，1599～1602は良好で，1600・1601は重焼痕を残す。1598～1601は和泉型瓦器椀のⅢ－３期に相当し，13世紀前葉の年代が与えられる。

1603は白磁碗。口縁を玉縁状に作る。釉に貫入を伴い，内面～体部外面上位まで施釉する。大宰府分類の白磁碗Ⅳ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。1604は白磁碗の下半部。内面の底部～体部境に沈線状の段を有する。高台内側の削り出しは浅い。釉に貫入を伴い，残存部外面は露胎。大宰府分類の白磁碗Ⅱ－２ａ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。

1605・1606は東播系須恵質土器捏鉢の底部で，底部外面に回転糸切り痕を残す。内面は使用により摩耗。1607は須恵質の平瓦。凹面に布目圧痕を残し，凸面に板ナデを施す。凹面にのみわずかに炭素が付着する。遺構の年代は，出土遺物から概ね13世紀代と考えられる。

溝５号（Ⅱ地区　SD1005）（第568図）

Ⅱ－１・２・３区西部，ｄ～ｊ12・13グリッドに位置する。南北は調査区外に延びる。検出長58.2m幅132cm深度42cmを測り，主軸はＮ６°Ｗを向く。断面はＵ字状または逆台形状で，埋土は５層に分層できる。底面はアゼＣ付近で上がるなど高低差があるが，一定した傾斜は確認できず流水方向は不明。

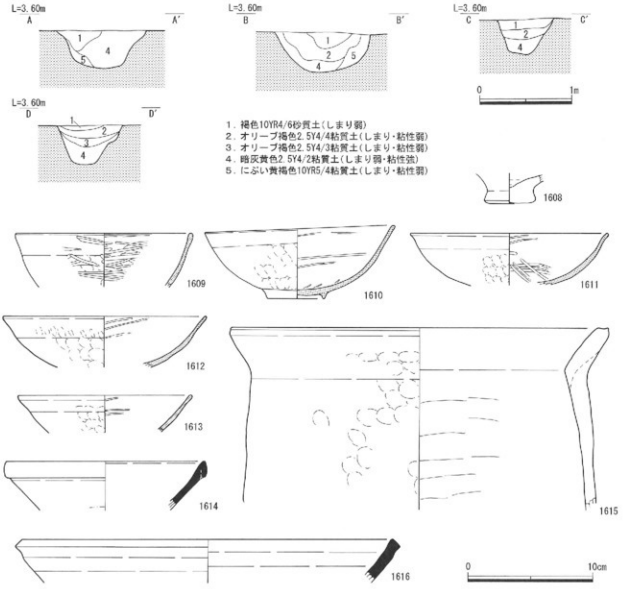
遺物は須恵器椀，土師質土器椀・皿（柱状高台）・鍋・甕・擂鉢・土錘，瓦器椀，瓦片，須恵質土器捏鉢・貯蔵具・壺，備前陶器擂鉢，白磁碗，青磁片，砂岩製砥石，被熱砂岩礫が出土。

1608は土師質土器柱状高台付皿。回転台成形で，底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土は精良で，焼成はやや不良。1609～1613は瓦器椀。1609は口径14.0cmを測る。体部内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－１～２期，12世紀後葉～13世紀初頭の年代が与えられる。1610～1612は口径15.2～16.2cmを測る。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施し，1610・1611は底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。1610は重焼により体部外面～口縁のみ炭素吸着良好で，酸化炎焼成気味。1611は炭素吸着良好，1612は不良で酸化炎焼成気味である。いずれも和泉型瓦器椀Ⅲ－３期に相当し，13世紀前葉の年代が与えられる。1613はやや小型で，口径13.8cm。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－３～Ⅳ－１期，13世紀前葉～中葉の年代が与えられる。

1614は白磁碗。口縁を玉縁に作る。外面に釉とびを伴う。大宰府分類の白磁碗Ⅳ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。

1615は土師質土器甕。器壁は厚く，口縁端部を強いヨコナデによって凹ませる。胎土は粗く金雲母を含む。瀬戸内沿岸～大阪湾岸からの搬入品で，古代末に遡る可能性あり。1616は東播系の須恵質土器捏鉢。口縁端部は拡張せず，方形に作る。口縁外面は重焼により炭素付着。森田編年の第Ⅰ期第２段階に相当し，11世紀末～12世紀前半の年代が与えられる。

遺構の年代は，出土遺物から概ね12～13世紀代を中心とすると考えられる。



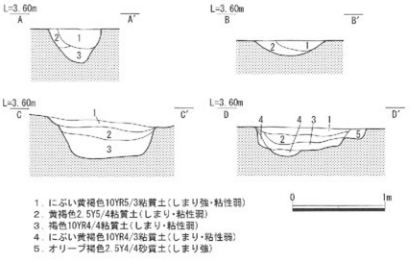
第568図　Ⅱ地区 SD1005遺構・遺物実測図

溝6・7号（Ⅱ地区　SD1006・1007）（第569～572図）

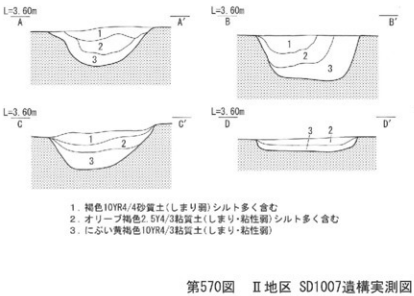
本遺構は近接して並行する２条の溝で，埋土上位を共有するために当初１条の溝として検出した。掘削途中の断面観察によって２条の溝であることが確認されたため，結果的に出土遺物の大半が混じることとなった。

SD1006は，Ⅱ－１・２・３区西部，ｄ～ｉ12・13グリッドに位置する。南は調査区外に延びる。検出長54.6m幅154cm 深度42cm を測り，主軸はN７°Wを向く。断面はレンズ状または不整な逆台形状で，埋土は５層に分層できる。底面は北から南へ向けてわずかに下がる。遺物は須恵器杯，土師質土器片・鍋，黒色土器椀，瓦器椀，須恵質土器貯蔵具が出土。

SD1007は，Ⅱ－１・２・３区西部，ｄ～ｊ13・14グリッドに位置する。南北は調査区外に延びる。検出長56.4m幅137cm 深度48cm を測り，主軸はN10°Wを向く。断面は逆台形状で，埋土は３層に分層で



第569図　Ⅱ地区 SD1006遺構断面図

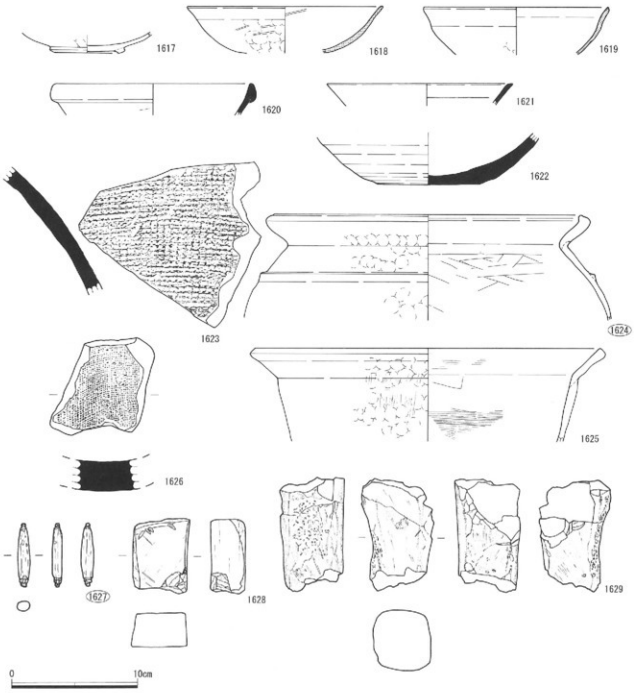


第570図　Ⅱ地区 SD1007遺構実測図

きる。底面はアゼE付近がもっとも深く，水流方向は確定できない。遺物は須恵器杯・甕，土師質土器片・皿・鍋・羽釜，瓦器椀・皿，瓦片，須恵質土器壺・貯蔵具，鉄滓，炭化物片が出土。遺物量はSD1007が圧倒的に多い。

SD1006・1007あわせて遺物は土師質土器椀・皿（回転糸切り）・鍋（鍔付きほか）・羽釜・甕・貯蔵具（平行タタキ）・土錘，瓦器椀・皿，須恵質土器甕・捏鉢，青磁片，白磁碗，瓦片・須恵質平瓦，鉄滓，結晶片岩製用途不明石製品，砂岩製砥石，被熱礫（砂岩ほか）が出土。

1617～1629はSD1006・1007の出土遺物。1617は土師質土器椀で，底部外面に低い高台が付く。体部外面に指頭圧痕を残す。形状・技法から瓦器椀の可能性があるが，酸化炎焼成で炭素吸着はみられない。1618・1619は瓦器椀。1618は口径15.6㎝を測り，体部内外面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は内面良好，外面やや不良。和泉型瓦器椀Ⅲ－２期に相当し，12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。1619は口径14.8㎝ を測る。摩耗によりヘラミガキは確認できない。焼成やや不良。非和

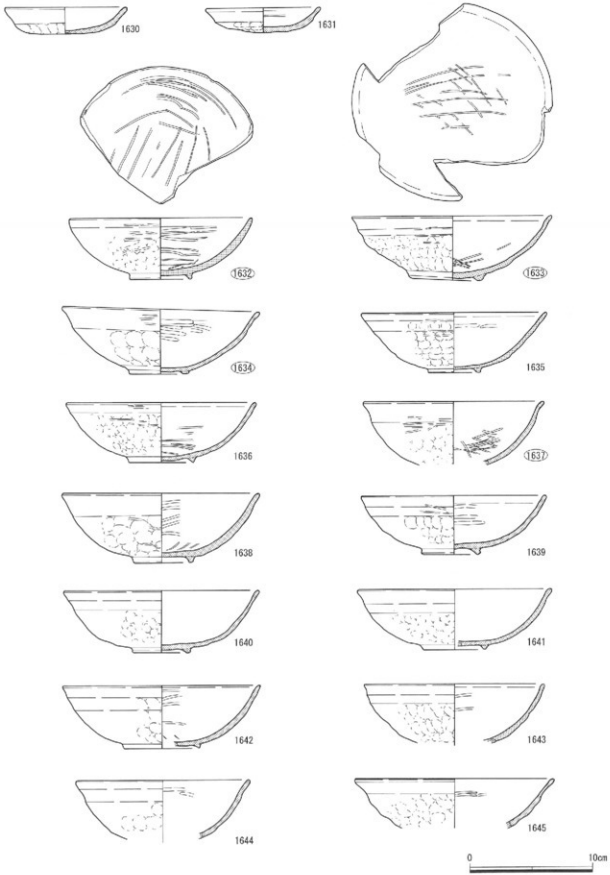


第571図　Ⅱ地区 SD1006・1007遺物実測図

泉型の可能性あり。和泉型瓦器Ⅲ－３期併行か。

1620は玉縁状口縁をもつ白磁碗。内面～体部外面上位まで施釉し，体部外面中位以下は露胎。胎土に微細な黒斑を含む。大宰府分類の白磁碗Ⅳ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。1621も白磁碗で，口縁端部をわずかに外反させる。内面の口体部境に１条の沈線を引く。大宰府分類の白磁碗Ⅷ類に相当し，12世紀中葉～13世紀前半の年代が与えられる。

1622は東播系須恵質土器捏鉢の底部。回転台成形で底部外面に回転糸切り痕を残す。内面は使用による摩耗と剥離が著しい。1623は須恵質土器甕の体部上位片。外面に格子タタキを施し，内面に無文の当



第572図　Ⅱ地区 SD1007遺物実測図

具痕を残す。焼成不良で，瓦質焼成気味。産地・時期ともに不明。

1624は紀伊型の鍔付き鍋。口縁端部は内側に拡張し，体部外面上位に断面三角形状の低い鍔部を貼り付け。胎土は粗く，結晶片岩を含む。13世紀後半～14世紀前半の年代が与えられる。1625は土師質土器鍋。外面の頸部～体部にかけてタテハケ，内面はヨコハケを施す。胎土に金雲母と角閃石を含む。吉備系の可能性があり，13世紀代前後と考えられる。1626は須恵質の平瓦。凹面に布目圧痕を残す。

1627は用途不明の棒状石製品。全長5.2㎝ 幅1.0㎝ の結晶片岩製で，紡錘状に研削整形のち，両端部に縄掛け状の溝を作る。石錘としての用途が考えられる。1628・1629は砂岩製の砥石。ともに３面を使用する。1629は敲打痕を伴う。

1630～1645はSD1007の出土遺物。1630・1631は瓦器皿。1630は摩耗によりヘラミガキが確認できない。炭素吸着はやや不良。1631は体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は外面良好，内面不良。ともに和泉型瓦器Ⅲ－３期併行か。1632～1645は瓦器椀。1632～1639は体部内外面に横位のヘラミガキを施す。底部内面は1633は斜格子状ヘラミガキ暗文，1632・1636・1638・1639は平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は，1632・1633が良好，1637・1639が不良で，ほかは内外面の一方が不良。いずれも和泉型瓦器椀Ⅲ－１～３期とみられ，12世紀後葉～13世紀初頭の年代が与えられる。

1640・1641は摩耗によりヘラミガキは確認できない。口径15.5㎝ 前後と大きく，和泉型瓦器椀Ⅲ期に収まるとみられる。1642～1645は体部内面にのみ横位のヘラミガキを施す。1642は底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。和泉型瓦器椀Ⅲ－３期に相当し，13世紀前葉の年代が与えられる。

遺構の年代は，出土遺物から12世紀後半～13世紀前半を中心にすると考えられる。

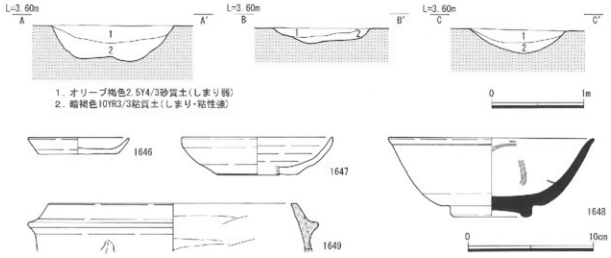
溝９号（Ⅱ地区　SD1009）（第573図）

Ⅱ－１・２・３区西部，ｅ～ｊ13・14グリッドに位置し，北は調査区外に延びる。検出長49.8m幅130㎝ 深度38㎝ を測り，主軸はＮ９°Ｗを向く。断面は不整なレンズ状または逆台形状で，埋土は２層に分層。底面は中央部が最も高く，両端に向けて下がる。

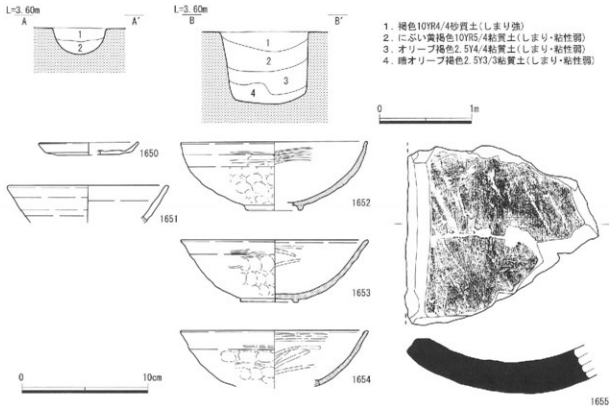
遺物は須恵器杯，土師質土器杯（回転糸切りほか）・皿・鍋，瓦器椀，瓦質土器羽釜，須恵質土器貯蔵具，青磁碗，白磁片が出土。1646は土師質土器皿，1647は土師質土器杯で，底部外面に回転糸切り痕を残す。1647は胎土にチャートを含む。1648は青磁碗。体部内面に飛雲文，底部内面にキノコ状文様を施文する。釉の透明度低いため文様は不鮮明で，粗い貫入を伴う。釉は高台内側に達し，畳付部の釉は掻き取る。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－４ａ類に相当し，12世紀中頃～後半の年代が与えられる。1649は瓦質土器の羽釜。口縁端部は方形に作るが，鍔部は三角形状で，端部は丸みを帯びる。鍔部直下に脚部が付くが，鍔と接しない。炭素吸着は良好。畿内山城地域からの搬入品と考えられ，13世紀代の年代が与えられる。遺構の年代は，出土遺物から概ね13世紀代と考えられる。

溝12号（Ⅱ地区　SD1012）（第574図）

SD1012～1015・1033～1036の南北方向に走る８条の溝群を幅約12mの範囲で検出。本溝群の西約15mには，SD1004～1009の南北方向に走る６条の溝群を幅約11mの範囲で検出。SD1012はⅡ－３区東部，ｇ～ｊ17グリッドに位置し，南北とも調査区外に延びる。検出長19.9m幅155㎝ 深度76㎝ を測り，主軸はＮ７°Ｗを向く。断面は浅いＵ字状で，埋土は４層に分層。底面は南へ向けて下がる。



第573図　Ⅱ地区 SD1009遺構・遺物実測図



第574図　Ⅱ地区 SD1012遺構・遺物実測図

遺物は弥生土器片，須恵器杯・甕，土師質土器杯・皿・鍋・羽釜，瓦器椀，青磁碗（鎬蓮弁文），白磁片，須恵質平瓦が出土。1650は土師質土器皿で，底部外面に回転糸切り痕を残す。1651は回転台成形の土師質土器杯。1652～1654は瓦器椀。口径14.8～15.0cmを測り，体部内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は，1652が吸着なし，1653・1654は良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－1～2期に相当し，12世紀後葉～13世紀初頭の年代が与えられる。1655は須恵質の平瓦。凹面・端面に板ナデを施し，凸面に離れ砂を残す。炭素吸着はやや不良で，酸化炎焼成気味。遺構の年代は，出土遺物から12世紀後葉～

13世紀代と考えられる。

溝13号（Ⅱ地区　SD1013）（第575図）

Ⅱ－3区東部，g～k17グリッドに位置する。南北とも調査区外に延びる。検出長19.6m幅112cm深度60cmを測り，主軸はN10°Wを向く。断面はU字状で，埋土は4層に分層できる。底面は南へ向けて下がる。遺物は弥生土器壺，須恵器杯，土師質土器片・皿，瓦器椀，須恵質土器貯蔵具（格子タタキ），鉄滓が出土。1656は土師質土器皿で，底部外面に回転糸切り痕を残す。遺構の年代は，出土遺物から概ね13世紀頃と考えられる。

溝14号（Ⅱ地区　SD1014）（第576図）

Ⅱ－3区東部，g～k17グリッドに位置し，南北とも調査区外に延びる。検出長19.4m幅98cm深度42cmを測り，主軸はN7°Wを向く。断面は不整なU字状で，埋土は3層。底面は南へ向けて下がる。

遺物は弥生土器片，須恵器杯，土師質土器杯・鍋，瓦器椀，須恵質土器皿か・捏鉢・貯蔵具（格子タタキ・平行タタキ），青磁碗，鉄滓，砂岩製叩石が出土。

1657は瓦器椀の上半部。体部内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着やや不良で，酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅲ－2期，12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。1658は瓦器椀の下半部。磨耗・剥離によりヘラミガキは確認できない。外面の一部にのみ炭素収着し，全体的に酸化炎焼成。和泉型瓦器椀のⅢ－3期前後，13世紀前葉頃とみられる。1659は青磁碗の底部。体部内面にヘラ片彫による草花文を施文。内面から高台外側にかけて施釉し，一部畳付を越えて高台内側に達する。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－2類とみられ，12世紀中頃～後半の年代が与えられる。1660は東播系の須恵質土器捏鉢。森田編年第Ⅱ期第2段階前後，12世紀末～13世紀初頭とみられる。1661は砂岩製の叩石。敲打痕は疎らである。遺構の年代は，出土遺物に時期幅があるが概ね13世紀前半と考えられる。

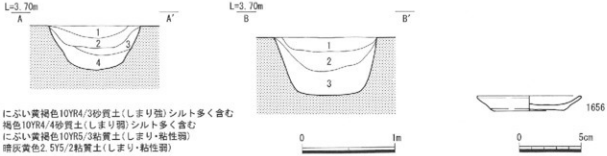
溝15号（Ⅱ地区　SD1015）（第577図）

Ⅱ－3・4区，e～j17・18グリッドに位置する。北側は調査区外に延び，南は溝SD1001に切られ以南には延びない。検出長27.2m幅101cm深度42cmを測り，主軸はN9°Wを向く。断面はU字状またはレンズ状を呈し，埋土は3層に分層できる。底面は顕著な高低差がみられない。遺物は須恵器杯，土師質土器片・鍋，瓦器椀が出土。遺構の年代は，出土遺物から概ね13世紀頃と考えられる。

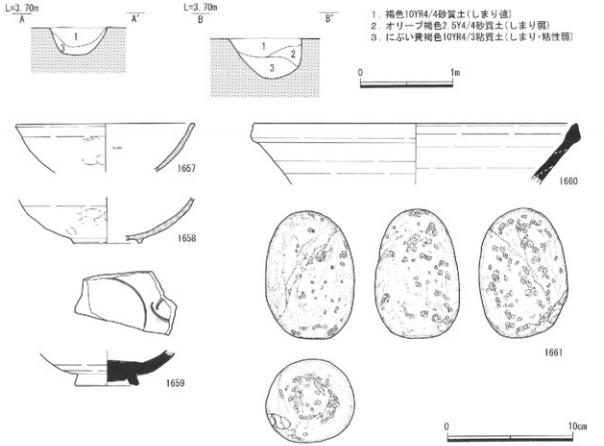
溝21号（Ⅱ地区　SD1021）（第578図）

Ⅱ－4区東部南端，f6グリッドに位置する。南は調査区外に延び，北は溝SD1001に切られ以北には延びない。検出長1.3m幅65cm深度10cmを測り，主軸はN10°Wを向く。断面は浅いレンズ状で，埋土は1層のみである。底面はからへ向けて下がる。SD1020・1022・1023，SK1135も同様の規模と形状をもつ南北主軸の溝で，東西に約1～2mの間隔をおいて連続して並ぶ。整地状遺構SX1002と同様に溝SD1002の北側に沿って位置することから，これらの遺構との関連が窺われる。

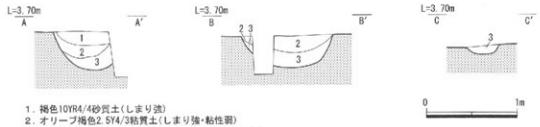
遺物は土師質土器片・皿・鍋，瓦器椀が出土。1662は土師質土器皿で，底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。遺構の年代は，出土遺物から概ね12～13世紀代と考えられる。



第575図　Ⅱ地区 SD1013遺構・遺物実測図



第576図　Ⅱ地区 SD1014遺構・遺物実測図



第577図　Ⅱ地区 SD1015遺構断面図

溝24号（Ⅱ地区　SD1024）（第579図）

Ⅱ－4区北部，f・g18～7グリッドに位置する。東西両側は調査区外に延び，西側延長上にあるⅡ－3区では検出していない。検出長46.6m幅115cm 深度26cmを測り，主軸はN86°Eを向く。断面は逆台形状で，部分的に段を有する。埋土は3層に分層。底面はアゼB付近で上がり両端へ向けて若干下がる。

遺物は須恵器片・杯，上師器片・羽釜，土師質土器椀・杯・皿（回転糸切り）・鍋・羽釜・上錘，黒色上器椀（A類・B類），瓦器椀・皿，瓦質土器甕（格子タタキ）・上錘，須恵質土器捏鉢・貯蔵具（平行タタキ），白磁片，近世陶磁器（肥前系），鉄滓，砂岩製叩石が出土。

1663は土師質土器皿で，底部外面に回転糸切り痕を残す。1664は瓦器皿。磨耗によりヘラミガキは確認できない。炭素吸着は良好。和泉型瓦器のⅢ－3～Ⅳ期併行とみられる。1665・1666は瓦器椀。口径13.8～14.0cmを測る。1665は体部内面に粗い斜位のヘラミガキを施す。1666は体部内面に粗い横位のヘラミガキ，底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。ともに炭素吸着良好で，1666は酸化炎焼成気味。和泉型瓦器椀Ⅲ－3～Ⅳ－1期に相当し，13世紀前葉～中葉の年代が与えられる。

1667は東播系の須恵質土器捏鉢。口縁は未発達で，重焼により炭素付着。森山編年Ⅰ期に相当し，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。1668は摂津C型の土師器羽釜。胎土に含雲母を含む。10～11世紀代とみられる。1669は亀山系の瓦質土器甕。体部外面に格子タタキを施す。炭素吸着はやや不良である。草戸編年のⅠ～Ⅱ期前半に相当し，13世紀後半～14世紀前半の年代が与えられる。1670～1672は瓦質有溝上錘。偏球形または紡錘形を呈し，1条の溝を巡らせる。胎土は良好で，炭素吸着はやや不良である。1673は細身の土師質管状土錘。遺構の開始期は12世紀前後に遡る可能性があり，概ね13世紀代まで継続すると考えられる。

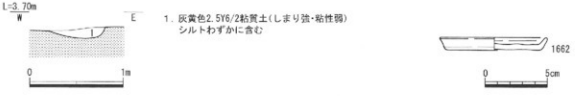
溝30号（Ⅱ地区　SD1030）（第580図）

Ⅱ－4区東部中央，g4・5グリッドに位置する。東端は土坑に切られ以東には延びない。南はSD1024に切られる。残存長8.4m残存最大幅110cm 深度6cmを測り，主軸はN82°Eを向く。断面は浅いレンズ状で，埋土は1層。底面はほぼ平坦。遺物は須恵器片，土師質土器椀・皿・鍋，黒色土器椀（B類），瓦器椀，白磁片が出土。1674は土師質土器皿で，底部外面に回転糸切り痕を残す。体底部の境に接合痕がみえる。遺構の年代は，出土遺物から12世紀後葉～13世紀代と考えられる。

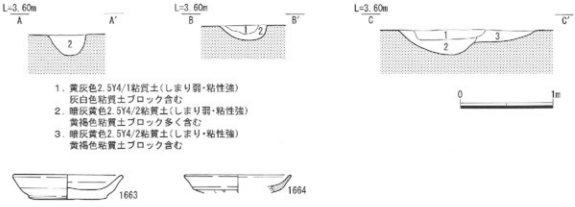
溝31号（Ⅱ地区　SD1031）（第581図）

Ⅱ－4区中央部，d～h2・3グリッドに位置する。全長20.2m幅58cm 深度10cmを測り，主軸はN8°Wを向く。断面は浅い逆台形状で，埋土は1層である。底面は南に向けて下がる。

遺物は土師質土器杯・鍋（鍔付きほか），黒色土器椀（B類），瓦器椀，須恵質土器貯蔵具，白磁碗が出土。1675は非回転台成形の土師質土器杯。底部外面に指頭圧痕を残す。胎土に在地産の花崗岩やチャートを含む。京都系土師器皿Dタイプの模倣品で，13世紀代の年代が与えられる。1676は白磁碗の下半部。内面～体部外面下位まで施釉し，以下は露胎である。底部内面に蛇ノ目釉剥ぎを施し，その周縁に離れ砂が付着。大宰府分類の白磁碗Ⅷ類に相当し，12世紀中葉～13世紀前半の年代が与えられる。1677は土師質土器鍔付鍋。口縁端部を内側に拡張し，頭部外面を強いヨコナデによって凹線状に作る。胎土に結晶片岩を含む。形状・技法・胎土から紀伊型鍔付鍋とみられ，概ね13世紀代と考えられる。



第578図　Ⅱ地区 SD1021遺構・遺物実測図



第579図　Ⅱ地区 SD1024遺構・遺物実測図

遺構の年代は，出土遺物の時期および13世紀後半の建物SA1008に切られていることから，13世紀前半を中心とし末葉までは下らないものと考えられる。

溝33・34号（Ⅱ地区　SD1033・1034）(第582～584図)

本遺構は近接して並行する２条の溝で，埋土Ⅱ位を共有するために当初１条の溝として検出した。掘削途中で断面観察によって２条の溝であり，SD1033が1034を切ることが確認された。結果的に第１層の遺物を共有することとなった。内訳は弥生土器片，土師質土器皿・鍋・羽釜，瓦器椀，須恵質土器捏鉢，白磁片，鉄釘，鉄滓，結板岩製不明石製品，結晶片岩製石庖丁である。

SD1033はⅡ－４・５区西部，ｃ～ｇ19・20グリッドに位置し，南北は調査区外に延びる。検出長43.0m幅172㎝ 深度56㎝ を測り，主軸はN８°Wを向く。断面は不整な逆台形状で，埋土は２層に分層できる。底面は南に向けて下がる。遺物は弥生土器片，土師器甑把手，須恵器片，土師質土器片・杯・皿（回転ヘラ切り・柱状高台）・鍋・茶釜・羽釜，黒色土器椀（Ｂ類），瓦器椀・皿，瓦質土器壺，須恵質土器壺・貯蔵具，常滑焼陶器片，被熱砂岩礫が出土。

SD1034はⅡ－４・５区西部，ｂ～ｇ19・20グリッドに位置し，南北は調査区外に延びる。検出長42.8m幅170㎝ 深度60㎝ を測り，主軸はN７°Wを向く。断面は逆台形状もしくはV字状で，埋土は３層に分層できる。底面は南へ向けて下がる。遺物は縄文土器片，弥生土器片，須恵器杯，土師質土器片・椀・皿・鍋・土錘，瓦器椀・皿，須恵質土器捏鉢・貯蔵具（格子タタキほか），白磁碗・鉄製品が出土。

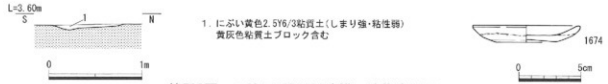
1678～1680は第１層の出土遺物。1678は瓦器椀。小片のため復元径は過小である。内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好。和泉型瓦器椀のⅢ－２期，12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。1679は東播系の須恵質土器捏鉢。口縁端部は未発達で，重焼により炭素付着。森田編年第Ⅱ期第１段階，12世紀中葉～後半とみられる。1680は用途不明の粘板岩製石製品。上面を丁寧に研磨し，中心部に回転によって半円形の凹みを穿つ。側面と下面の一部にわずかな研磨痕を残す。

1681～1688は２・３層から出土したSD1033の出土遺物。1681は回転台成形の土師質土器皿で，底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。胎土は粗く，石灰岩とみられる軟質の白色粒子を含む。1682は土師質土器の柱状高台付皿で，底部外面に回転糸切りの痕跡を残す。高台側面に指頭圧痕を残す。胎土は精良で，焼成は不良。1683は瓦器皿。体部内面に横位のヘラミガキ，底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は良好。和泉型瓦器のⅢ－３期併行とみられる。1684・1685は瓦器椀。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は1684がやや不良，1685が良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－３～Ⅳ－１期に相当し，13世紀前葉～中葉の年代が与えられる。

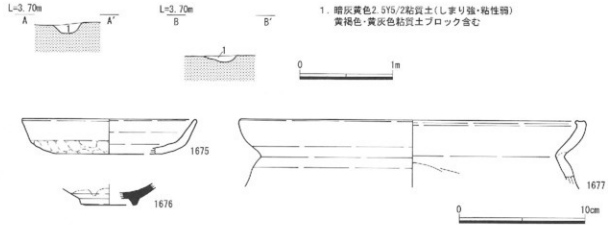
1686は須恵質土器壺。体部外面に格子タタキの痕跡を残す。頸部内面はヨコナデのち部分的に縦位のナデを施す。十瓶山系とみられるが，技法などから十瓶山産とはいえない。佐藤編年Ⅳ－２～３期に近似しており，12世紀代に位置づけられる。

1687は土師質土器羽釜。短く外反する口縁と，水平に延びる鍔部をもつ。奥井分類の河内型羽釜Ⅰ型に相当し，12世紀後半の年代が与えられる。1688は土師質土器鍋。厚い器壁をもつ。胎土は粗く，金雲母と花崗岩を含む。瀬戸内沿岸部～大阪湾岸からの搬入品と考えられる。時期不明。

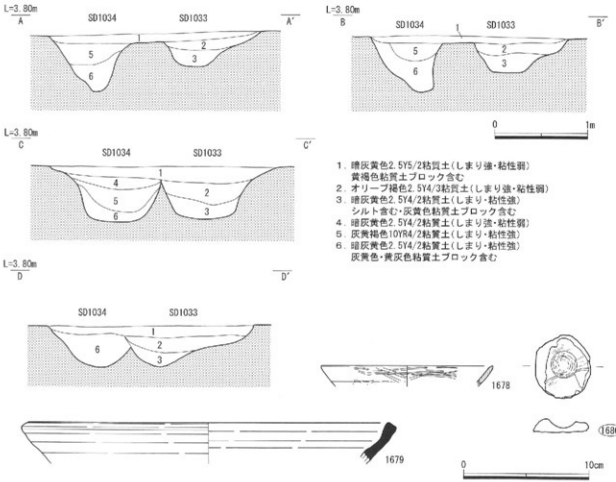
1689～1698は４～６層から出土したSD1034の遺物。1689は高台付の須恵器杯，８世紀後半～９世紀前半。1690は土師質土器皿で，底部外面に回転糸切り痕を残す。1691・1692は瓦器皿。1691は体部内面に横位のヘラミガキ，1692は底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は1691がやや不



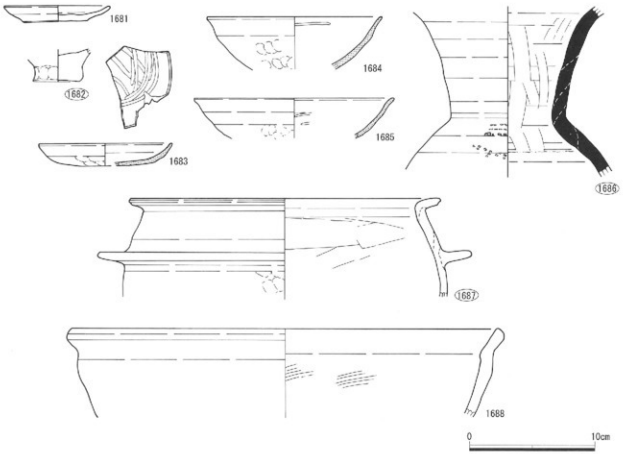
第580図　Ⅱ地区 SD1030遺構・遺物実測図



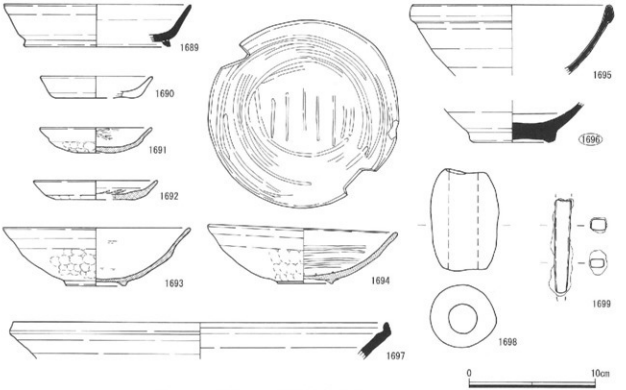
第581図　Ⅱ地区 SD1031遺構・遺物実測図



第582図　Ⅱ地区 SD1033・1034遺構・遺物実測図



第583図　Ⅱ地区 SD1033遺物実測図



第584図　Ⅱ地区 SD1034遺物実測図

良，1692が良好。和泉型瓦器のⅢ－3～Ⅳ期併行とみられる。1693・1694は瓦器椀。口径14.8cm 前後を測る。体部内面に横位のヘラミガキを施し，1694は底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は1693はやや不良，1694は不良で酸化炎焼成。ともに和泉型瓦器椀Ⅲ－3期，13世紀前葉の年代が与えられる。

1695は白磁碗の上半部。口縁を玉縁に作る。胎土に微細な黒斑を含む。大宰府分類の白磁碗Ⅳ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。1696は白磁碗の下半部で，残存部外面は露胎。高台は二次使用によって著しく摩耗し，丸みを帯びる。大宰府分類の白磁碗Ⅳ類とみられ，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。

1697は東播系の須恵質土器捏鉢。口縁端部を内側に折り曲げ，口縁内面に凹線を作る。森田編年の第Ⅱ期第1段階に相当し，12世紀中葉～後半の年代が与えられる。1698は土師質管状土錘。径5.4cm 重量168ｇの大型品である。1699は棒状の鉄製品で，鑿の可能性がある。

SD1033・1034の年代は，出土遺物に時期幅があるが概ね12～13世紀代と考えられる。

溝35号（Ⅱ地区　SD1035）（第585図）

Ⅱ－4・5区西部，ｂ～ｇ18・19グリッドに位置する。南北は調査区外に延びる。検出長44.4m幅58cm 深度46cm を測り，主軸はＮ2°Ｗを向く。断面はU字状または方形で，壁面の傾斜角度は垂直に近い。埋土は2層に分層できる。底面は北半が深く南半が若干浅い傾向がある。

遺物は弥生土器片，土師質土器片・杯・鍋，瓦器椀，瓦片，須恵質土器捏鉢・貯蔵具（平行タタキ），備前陶器片・擂鉢，瀬戸美濃系陶器片・加工円盤（天目茶碗転用），白磁碗，鉄滓が出土。

1700は土師質土器皿。回転台成形で，底部外面の切り離し痕はナデ消す。1701は瓦器椀。口径13.8cm を測るが，小片のため復元径は不正確。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－3～Ⅳ－1期に相当し，13世紀前葉～中葉の年代が与えられる。1702は白磁碗の口縁部で，玉縁状口縁をもつ。外面の釉は厚く，口縁から体部にかけて垂下する。胎土に微細な黒斑を含む。大宰府分類の白磁碗Ⅳ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半も年代が与えられる。1703は陶器の加工円盤。鉄釉をかけた瀬戸美濃系の天目茶碗を転用し，破面を研削して円形に作る。

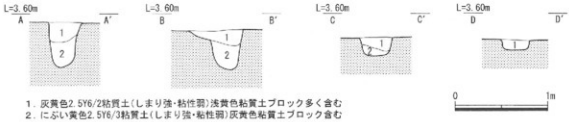
遺構の年代は，出土遺物に時期幅があるものの，備前焼や瀬戸美濃系陶器が出土していること，17世紀中葉に下る溝SD1001に切られ他の溝を切っていることから，中世末期～近世初頭と考えられる。

溝36号（Ⅱ地区　SD1036）（第586・587図）

Ⅱ－4・5区西端部，ｄ～ｊ18・19グリッドに位置する。北は調査区外に延び，南はSD1002に切られて以南には延びない。検出長29.8m幅150cm 深度80cm を測り，主軸はＮ7°Ｗを向く。断面はU字状で，部分的に緩い段を有する。埋土は6層に分層できる。底面は北から南へ向けて下がる。

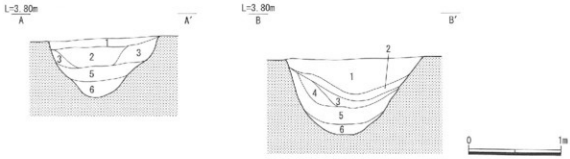
遺物は弥生土器片，須恵器杯・甕，土師質土器片・椀・杯（手捏ね）・鍋・上錘，黒色土器椀（A類・B類），瓦器椀・皿，瓦片，瓦質土器捏鉢・羽釜，瓦質平瓦・須恵質丸瓦，須恵質土器片・椀・捏鉢・貯蔵具（平行タタキほか），瓦製紡状加工品，備前陶器か，白磁皿・碗，近世陶磁片（瀬戸美濃系），鉄滓，木片が出土。

1704・1705は瓦器皿。体部内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は，1704がやや不良，1705が良好。和泉型瓦器のⅢ－3～Ⅳ－1期併行と考えられる。1706～1709は瓦器椀。1706は体部内外面

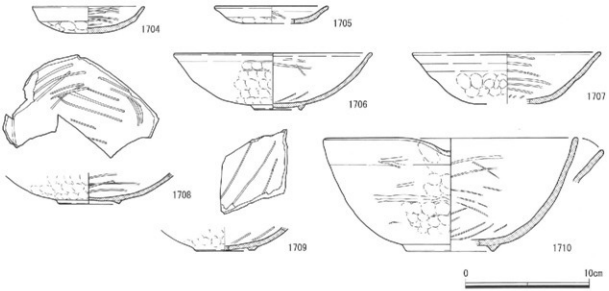


1．灰黄色2.5Y6/2粘質土(しまり強・粘性弱)淡黄色粘質土ブロック多く含む
2．にぶい黄色2.5Y6/3粘質土(しまり強・粘性弱)灰黄色粘質土ブロック含む

第585図　Ⅱ地区 SD1035遺構・遺物実測図



1．暗灰黄色2.5Y5/2粘質土(しまり・粘性強)
2．暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり強・粘性弱)
　黄褐色粘質土ブロック含む
3．オリーブ褐色2.5Y4/3砂質土(しまり・粘性弱)
4．灰黄褐色10YR4/2粘質土(しまり強・粘性弱)
5．暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質土(しまり・粘性弱)
　シルト含む
6．黒褐色2.5Y3/2粘質土(しまり・粘性弱)
　シルト多く含む



第586図　Ⅱ地区 SD1036遺構・遺物実測図（1）

に横位のヘラミガキ，底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－２期，12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。1707は体部内面に横位のヘラミガキ，底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－３期，13世紀前葉の年代が与えられる。1708・1709は瓦器椀下半部。1708は体部内面に横位のヘラミガキを施し，ともに底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－３期前後，13世紀前半とみられる。

1710は瓦質土器片口鉢。体部内外面に粗い横位のヘラミガキ，底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。口縁は方形気味に作り，片口をもつ。底部外面に断面三角形状の高台を貼り付け。炭素吸着はやや不良で，体部外面に重焼痕を残す。技法から和泉型瓦器Ⅲ－２期併行期と考えられ，12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。

1711は白磁皿。口縁は端反り気味。釉に粗い貫入を伴い，内面～体部外面中位まで施釉し，以下露胎。底部内面に蛇ノ目釉剥ぎを施す。大宰府分類の白磁皿Ⅲ類に相当し，12世紀中葉～13世紀前半の年代が与えられる。1712は白磁碗の上半部。口縁を玉縁に作る。焼成不良で胎土は黄味を帯びる。釉に粗い貫入を伴う。胎土に微細な黒斑を含む。大宰府分類の白磁碗Ⅳ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。1713は白磁碗の下半部。内面の底部～体部境に段を有する。器面全体に化粧土を塗布する。釉は黄味を帯びてわずかに白濁し，内面～体部外面下位まで施釉し，以下露胎である。底部内面に蛇ノ目釉剥ぎを施し，離れ砂付着。施釉部と露胎部との境は赤く発色。胎土に微細な黒斑を含む。大宰府分類の白磁碗Ⅷ－２類に相当し，12世紀中葉～13世紀前半の年代が与えられる。

1714は東播系の須恵質土器捏鉢。口縁はわずかに内側に拡張。体部内面下位は使用により摩耗する。森山編年の第Ⅱ期第１段階に相当し，12世紀中葉～後半の年代が与えられる。1715は瓦質土器羽釜。直線的な体部をもつ，無脚の羽釜と考えられる。口縁端部は方形で，鍔部は貼り付けである。炭素吸着はやや不良で，酸化炎焼成気味。畿内山城地域周辺からの搬入品で，13世紀代と考えられる。

1716は須恵質の丸瓦。凹面に布目圧痕を残し，凸面に板ナデを施す。胎土に砂岩を含む。1717は土師質管状土錘で，径約５㎝の大型品。1718は細身の管状土錘。1719は瓦を転用した球状加工品。瓦質瓦片を球状に研削整形する。遺構の年代は，出土遺物から13世紀代と考えられる。

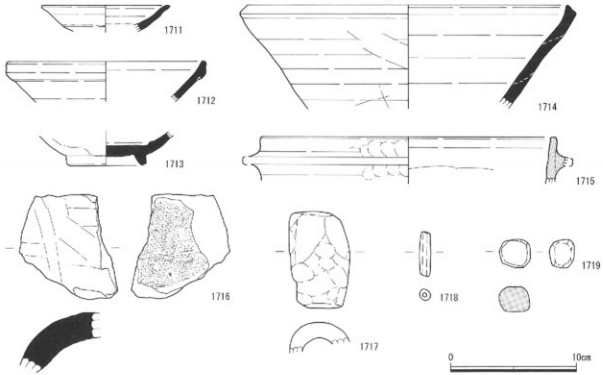
溝41号（Ⅱ地区　SD1041）（第588図）

Ⅱ－４・５区西部，ｄ～ｈ１グリッドに位置し，南は調査区外に延び，北は中途で途切れる。検出長22.7ｍ幅115㎝深度22㎝を測り，主軸はN10°Wを向く。断面は逆台形状で，埋土は２層に分層できる。底面は南に向けて下がる。

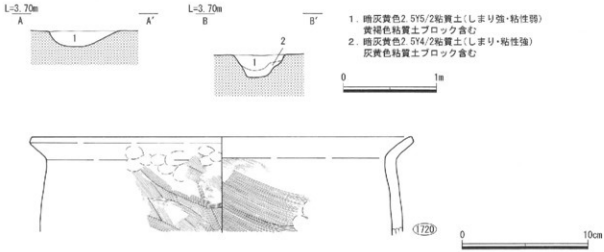
遺物は須恵器杯，土師質土器杯・甕，瓦器椀，須恵質土器貯蔵具（格子タタキ），不明土製品が出土。1720は土師質土器甕。口縁端部を方形に作り，体部内外面に細かい斜位のハケをを施す。胎土は精良・微細で滑らかな感触をもち，結晶片岩・金雲母・泥岩・チャートを含むとみられる。とくに泥岩の角礫を多く含むなど特異な胎土をもつ。県南域の産かと考えたが，金雲母を含有することから紀伊など他地域に産地が求められるのではないか。遺構の年代は，出土遺物に和泉型Ⅲ～Ⅳ期の瓦器椀を伴うことから概ね12～13世紀頃と考えられる。

溝46号（Ⅱ地区　SD1046）（第589図）

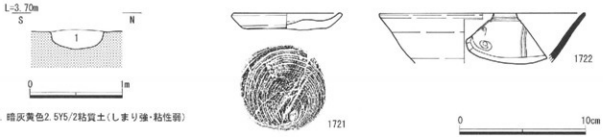
Ⅱ－４区東部南側，ｅ・ｆ４グリッドに位置する。西は土坑SK1137に切られ，以西には延びない。残



第587図　Ⅱ地区 SD1036遺物実測図（２）



第588図　Ⅱ地区 SD1041遺構・遺物実測図



第589図　Ⅱ地区 SD1046遺構・遺物実測図

存長3.5m幅54cm 深度20cm を測り，主軸はN80°Eを向く。断面は浅いU字状で，埋土は1層。底面に顕著な高低差はみられない。本遺構は13世紀前半に形成された整地状遺構SX1002の下面で検出。

遺物は土師質土器片・皿，瓦器椀，青磁碗が出土。1721は土師質土器皿で，底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。胎土に砂岩とチャートを含む。1722は青磁碗。体部内面にヘラ描きの飛雲文を施文する。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－4類に相当し12世紀中頃～後半の年代が与えられる。遺構の年代は，SX1002との切り合い関係および出土遺物から12～13世紀前半と考えられる。

溝53号（Ⅱ地区　SD1053）(第590図)

Ⅱ－7区西部，h～n 8・9グリッドに位置する。北側は調査区外に延びるが，Ⅱ－8区で延長部分を検出していない。検出長29.4m幅70cm 深度8cm を測り，主軸はN8°Wを向く。断面は浅いレンズ状で，埋土は1層のみ。底面は南に向けて下がる。

遺物は弥生土器片，須恵器杯，土師質土器椀・杯・皿（回転ヘラ切り）・鍋・羽釜・土錘，黒色土器椀（B類），瓦器椀，須恵質土器椀（山茶椀か）・貯蔵具（格子タタキ），常滑焼陶器片，近世陶磁器（瀬戸美濃系），白磁碗，鉄製品片・鍋か・釘，鉄滓，砂岩製砥石，被熱砂岩礫が出土。

1723～1726は土師質土器皿で，底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。1725はとくに器壁が厚く雑な作りで，底部～体部内面に部分的に指頭圧痕を残し，体部外面に強い回転ナデによる多段状の稜を作る。1726は胎土が粗く，チャートを含む。1727は土師質土器杯。非回転台成形の可能性あり，底部外面に粘土紐の巻き上げ痕のち板目痕を残す。1728・1729は瓦器椀。1728は体部内面に横位のヘラミガキ，底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。体部外面に粘土接合痕を残す。炭素吸着良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－3期に相当。1729は体部内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は外面に部分的で，酸化炎焼成する。被熱によるカーボン消失か。和泉型瓦器椀Ⅲ－2期，12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。

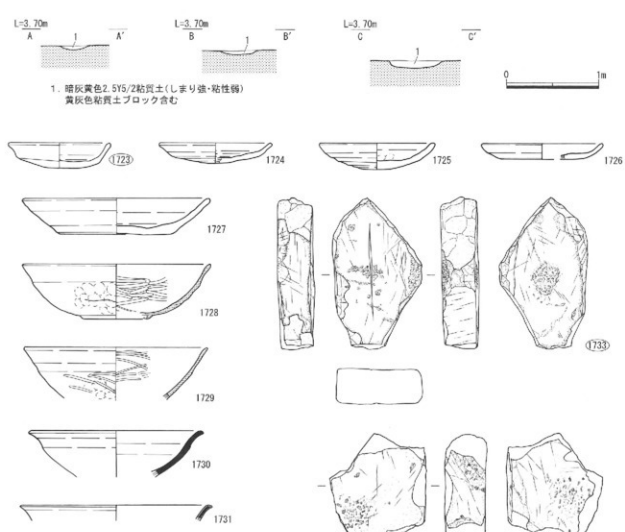
1730は須恵質焼成の椀。内外に釉が付着するが，埦布した痕跡が認められないため灰釉陶器ではなく，本来は無釉の山茶椀の可能性がある。12世紀代か。1731は白磁碗口縁部で，端部が短く外反。外面に釉とびがみられ，胎土に微細な黒斑を含む。大宰府分類の白磁碗Ⅷ類に相当し，12世紀中葉～13世紀前半の年代が与えられる。1732は鋳鍋の口縁と考えられる破片。端部は短く外反。表面に亀甲状の亀裂がみられることから鋳造品の可能性が高い。1733・1734は砂岩製の砥石で，1733は4面，1734は3面を砥面として使用。一部に敲打痕が集中する。遺構の年代は，出土遺物から概ね12～13世紀前半と考えられる。

溝59号（Ⅱ地区　SD1059）(第591図)

Ⅱ－7・8・9区，i～q 13・14グリッドに位置する。南北は調査区外に延びる。検出長39.7m幅121cm 深度38cm を測る。主軸はN7°Wを向くが北端部は東寄りに向きを変える。断面は逆台形状で，埋土は3層に分層できる。底面は北から南に向けて下がる。

遺物は弥生土器片，須恵器杯・高杯か，土師質土器片・Ⅲ・杯（回転ヘラ切り）・鍋・羽釜・土錘，黒色土器椀（B類），瓦器椀・皿，須恵質土器貯蔵具（平行タタキ・格子タタキほか）・壺・捏鉢，白磁碗，鉄製品片・釘，鞴羽口，溶解炉壁，サヌカイト片，被熱砂岩礫が出土。

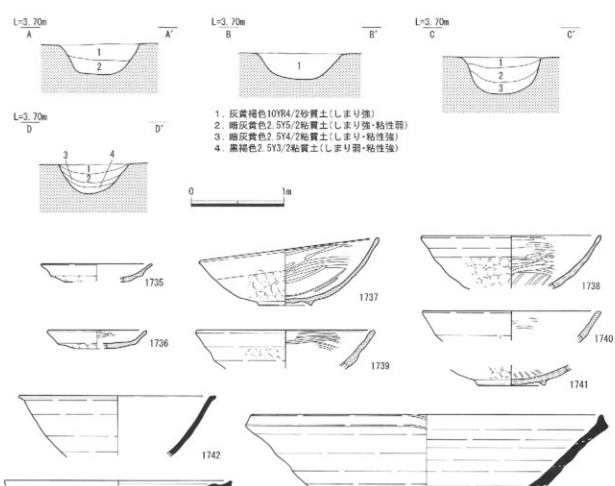
1735・1736は瓦器皿。1735はヘラミガキが確認できず，炭素も吸着しない。胎土が粗く，在地産の可能性あり。1736は体部内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着やや不良。ともに和泉型瓦器Ⅲ－3



第590図　Ⅱ地区 SD1053遺構・遺物実測図

～Ⅳ期併行と考えられる。1737～1741は瓦器椀。口径13.9～14.4cmを測る。1737～1740は体部内面に横位のヘラミガキを施し，1737・1738・1741は底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。1737～1740は和泉型瓦器椀Ⅲ－3期，1741は和泉型瓦器椀Ⅲ－2～3期と考えられる。1742は白磁碗。口縁端部が短く外反。胎土に微細な黒斑を含む。大宰府分類の白磁碗Ⅴ類またはⅧ類に相当し，12世紀中葉～13世紀前半の年代が与えられる。

1743は須恵質土器壺の口縁部。口縁内側は強いヨコナデによって凹線状に作り，口縁端部はシャープに仕上げる。十瓶山窯系の壺Ｂ－Ⅱ類とみられるが，同地の産かは不明。佐藤編年Ⅳ－1期に相当し，11世紀中葉前後と考えられる。1744は東播系の須恵質土器捏鉢。口縁端部を内側に拡張する。重焼により口縁外面～体部内面上位に炭素付着。体部内面下半は使用により摩耗。森田編年の第Ⅱ期第1段階



第591図　Ⅱ地区 SD1059遺構・遺物実測図

第592図　Ⅱ地区 SD1060遺構断面図

とみられ，12世紀中葉～後半の年代が与えられる。

遺構の開始期は11世紀後半に遡る可能性があり，13世紀代まで継続すると考えられる。

溝60号（Ⅱ地区　SD1060）（第592図）

Ⅱ－７区東部，ｉ～Ｉ13･14グリッドに位置する。南は調査区外に延び，北は溝SD1063に切られ，以北には延びない。検出長15.2m幅73㎝深度20㎝を測り，主軸はＮ８°Ｗを向く。SD1059と並行する。断面は逆台形状で，埋土は２層に分層できる。底面は北から南に向けて下がる。遺物は弥生土器片，須

恵器杯，土師質土器椀・杯（回転ヘラ切り）・鍋，黒色土器椀（B類），瓦器椀，須恵質土器貯蔵具（格子タタキ）が出土。遺構の年代は，出土遺物から概ね12～13世紀前半と考えられる。

溝62号（Ⅱ地区　SD1062）（第593図）

Ⅱ－7・9区，i～n13・14グリッドに位置する。南北は調査区外に延びるが，北側はⅡ－8区で検出していない。検出長24.0m幅70cm深度16cmを測り，主軸はN9°Wを向く。断面は逆台形状で，埋土は2層。底面は南に向けて下がる。遺物は弥生土器片，土師質土器片，須恵質土器貯蔵具，備前陶器甕，近世陶磁器（肥前系），瓦片，被熱砂岩礫が出土。1745は備前焼の陶器甕底部。断面観察によって接合痕が明瞭である。時期不明。遺構の年代は，出土遺物に時期幅があり，近世に下る可能性もある。

溝63号（Ⅱ地区　SD1063）（第594図）

Ⅱ－7・9区北部，l・m8～14グリッドに位置する。西は調査区外に延びる。検出長30.2m幅142cm深度34cmを測り，主軸はN88°Wを向くが，やや蛇行。断面は逆台形状で，埋土は4層に分層できる。底面は西から東に向けて下がる。

遺物は弥生土器片，土師器甑，須恵器杯・蓋，土師質土器片・皿・杯（回転ヘラ切り・円盤状高台）・鍋・羽釜・上錘，黒色土器椀（A類），瓦器椀，瓦質土器片，平瓦・軒丸瓦・瓦片，須恵質土器椀（山茶椀）・擂鉢・貯蔵具（平行タタキほか），備前陶器皿・擂鉢・甕，青磁片，灰釉陶器碗，近世陶磁器（肥前系・京焼系・瀬戸美濃系），土製鳴笛，銭貨，漆器椀，被熱砂岩礫が出土。

1746は須恵器杯蓋，1747は須恵器杯。ともに古墳時代後期とみられる。1748は灰釉陶器碗とみられ，現存部は無釉。体部内面に縦位の沈線がみられ，ヘラ描き記号か工具の擦痕かは不明。底部内面に輪状の剥離痕を残し，重焼痕の可能性あり。H72窯式後半期の碗Bまたは深碗か。11世紀初頃前後。

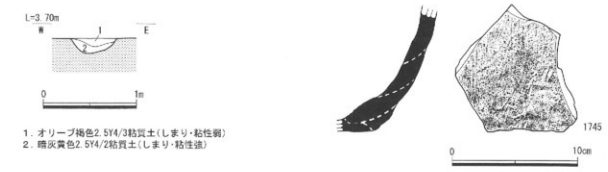
1749は脚付きの土師質土器杯か皿。1750は土師質土器皿。回転台成形で，底部外面は切り離し痕をナデ消す。焼成堅緻。1751は近世の備前焼とみられる陶器皿で，底部外面は回転糸切り痕を残す。口縁の一部にわずかに炭化物が付着し，灯明皿としての使用が考えられる。

1752は肥前系の陶器皿。釉は透明に近いが胎土色を反映して黄味がかり，貫入を伴う。全面施釉のち，畳付部の釉を掻き取る。底部内面と高台に4ヶ所の砂目痕を残す。16世紀末～17世紀初頭と考えられる。破面のエッジに摩耗がみられる。スクレイパー的な使用によるものであろう。1753は赤筒底をもつ染付皿。外面に芭蕉葉文，内面に捻花文を絵付け。畳付部は露胎。小野分類染付皿C群Ⅰ類に相当し，15世紀後葉～16世紀前半の年代が与えられる。1754は瀬戸美濃系陶器の天目茶碗。内外面に鉄釉を施す。

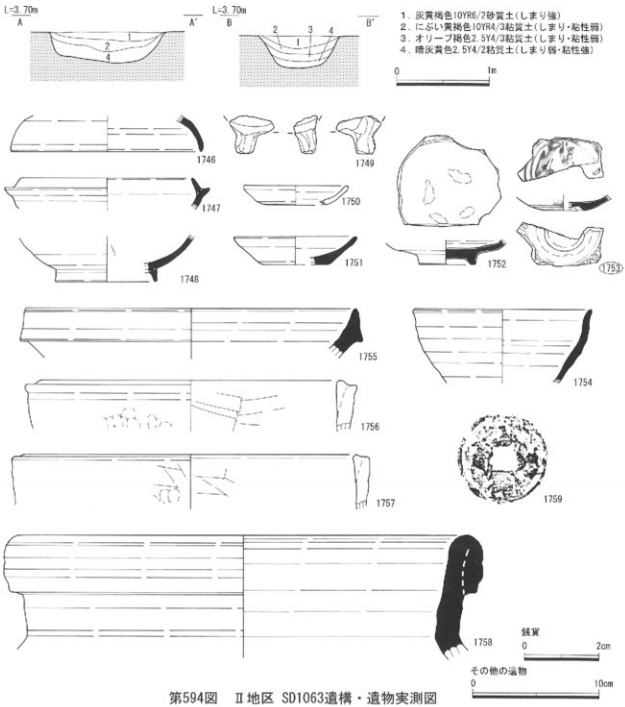
1755は備前焼の擂鉢。口縁の形状から重根編年ⅣA－2期に相当し，14世紀末～15世紀初頭の年代が与えられる。1756・1757は土師質土器羽釜。いずれも口縁と鍔部が近接し，ほぼ一体化する。胎土に金雲母を含むため，瀬戸内沿岸～大阪湾岸からの搬入品と考えられる。1758は備前焼の陶器甕。頸部内面～体部外面に自然釉付着。口縁の形状から重根編年ⅤB期に相当し，16世紀後半の年代が与えられる。

1759は銅銭の大観通寶。北宋銭で，1107年初鋳。劣化が激しく，銭文や輪・郭の一部が剥離。

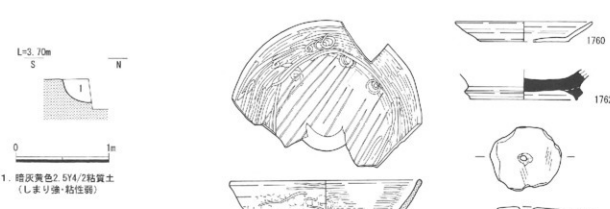
遺構の年代は，出土遺物に時期幅があるが概ね中世末～17世紀初頭と考えられる。



第593図　Ⅱ地区 SD1062遺構・遺物実測図



第594図　Ⅱ地区 SD1063遺構・遺物実測図



第595図　Ⅱ地区 SD1066遺構・遺物実測図

溝66号（Ⅱ地区　SD1066）（第595図）

Ⅱ－7区北端，ｉ～ｎ13･14グリッドに位置する。東西および南半部は調査区外に延び，延長上のⅡ－6・8・9区では検出していない。検出長19.6m残存部最大幅40cm深度24cmを測り，主軸はN85°Eを向く。断面はU字状で，埋土は1層。底面は西へ向けてわずかに下がる。

遺物は弥生土器片，須恵器杯・壺，土師質土器片・杯（回転ヘラ切り）・皿，瓦器椀，須恵質土器貯蔵具（格子タタキ），備前焼陶器片，土製紡錘車，被熱砂岩礫が出土。

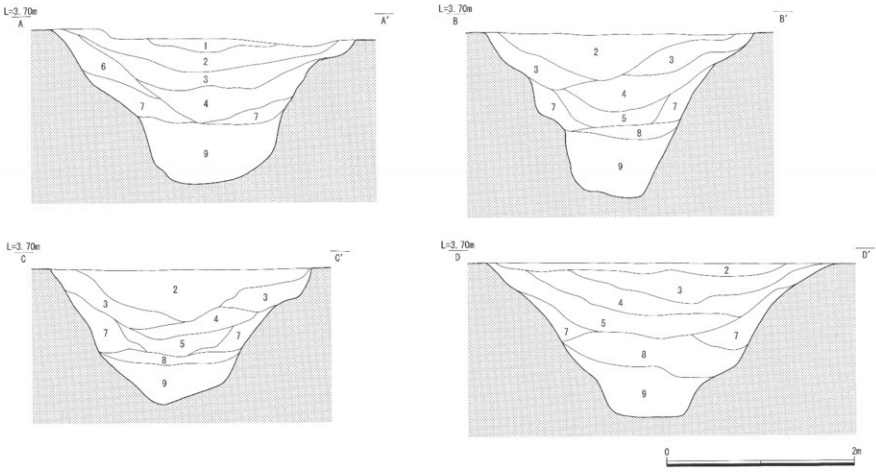
1760は土師質土器皿。回転台成形で，底部外面は静止糸切りとみられるが，ナデにより不明瞭。1761は瓦器椀。口径14.9cmを測る。体部外面に粗い横位のヘラミガキ，体部内面に横位および連結輪状のヘラミガキを施す。底部内面には平行ヘラミガキ暗文を施す。体部外面には粘土接合痕を残す。炭素吸着は重焼により内面～口縁外面が良好で，以下はみられない。紀伊型瓦器椀の可能性があり，和泉型瓦器Ⅲ－1～2期併行とみられ，12世紀後葉～13世紀初頭の年代が与えられる。1762は須恵器壺の底部。高台外面と底部内面に自然釉付着。8世紀後半頃か。1763は土製紡錘車。土師器甕の体部片を転用し，側面を打ち欠き研削整形のち中央部に両面から穿孔。胎土にチャートを含む。

遺構の年代は，概ね中世ではあるが出土遺物に時期幅があって詳細時期は不明。

溝67号（Ⅱ地区　SD1067）（第596～602図）

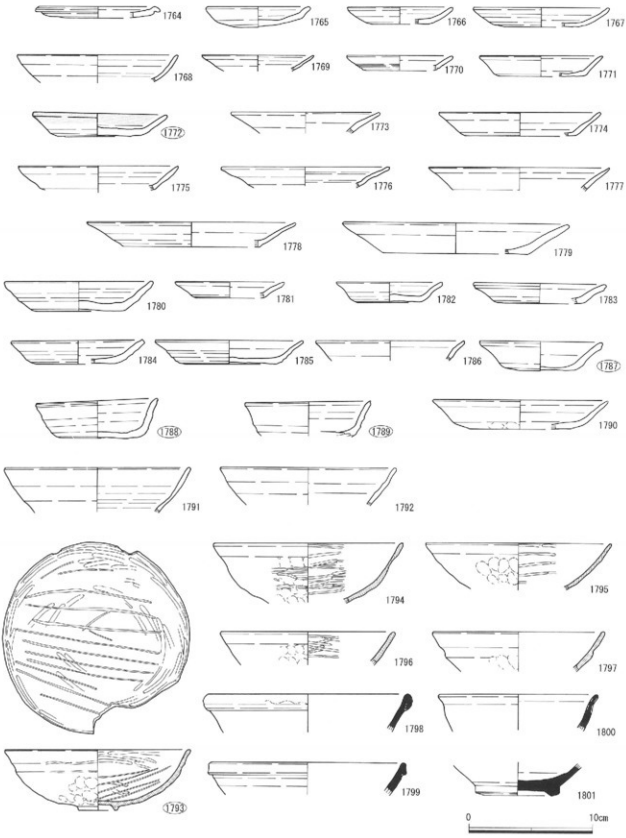
Ⅱ－8・9・10区，ｏ～ｒ8～15グリッドに位置する。西と北は調査区外に延び，西の延長はⅡ－6区で検出していない。検出長47.1m（東西約34m南北約15m）幅383cm深度172cmを測る。主軸はN88°Eを向き，Ⅱ－9区でL字に屈曲して北側へ延びる。断面は逆台形状で，中途に段を有する。埋土は9層に分層でき，4層または5層の下面で少なくとも1回の再掘削が認められる。底面はわずかに高低差があるものの概して平坦である。また埋土は粘土やシルト質をベースとしており，有機物を多く含むことから，滞水状態であったことが窺える。

本遺構は幅3.8m深度1.7mと大規模であること，L字に屈曲し流水の痕跡はないことから，屋敷地の区画溝と考えられる。屋敷地規模は一辺50m以上と推定でき，泉八幡神社の丘陵を西限と考えると一辺70m規模の方形区画が想定できる。屋敷地は泉八幡神社が鎮座する丘陵を除いて本遺跡では最高所を占

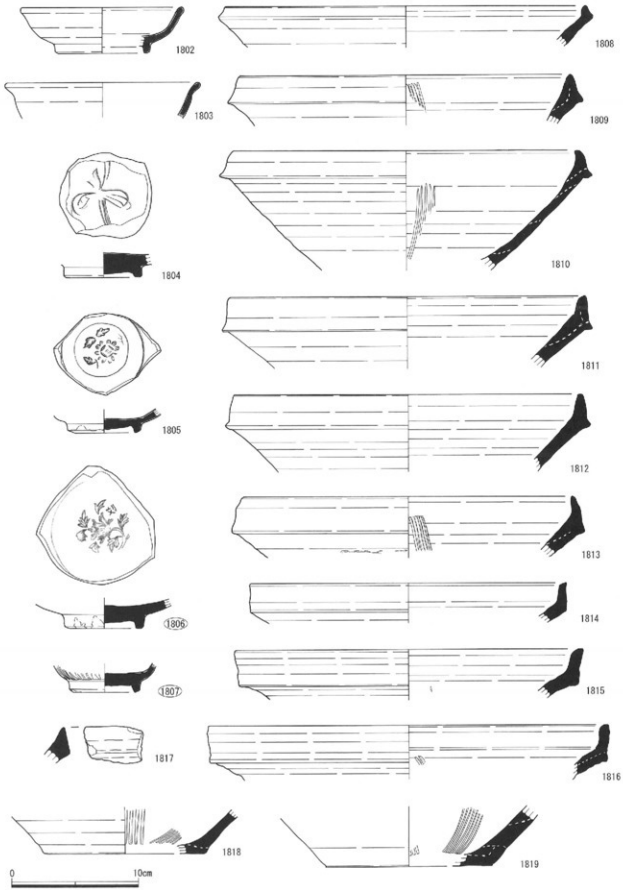


1. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質土(しまり・粘性弱)
2. 暗オリーブ褐色2.5Y3/3粘質土(しまり・粘性強)
   オリーブ褐色粘質土ブロック含む
3. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり弱・粘性強)
   シルトわずかに含む
   オリーブ褐色粘質土ブロックわずかに含む
4. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性強)シルト含む
5. 褐色10YR4/4粘質土(しまり・粘性弱)鉄分含む
6. 黒褐色2.5Y3/2粘質土(しまり・粘性強)
7. オリーブ褐色粘質土(しまり・粘性弱)
   暗灰黄色粘質土ブロック含む
8. 暗灰黄色2.5Y4/2粘質土(しまり・粘性弱)
   黒褐色粘質土ブロック含む
9. オリーブ黒色5Y3/2粘質土(しまり弱・粘性強)

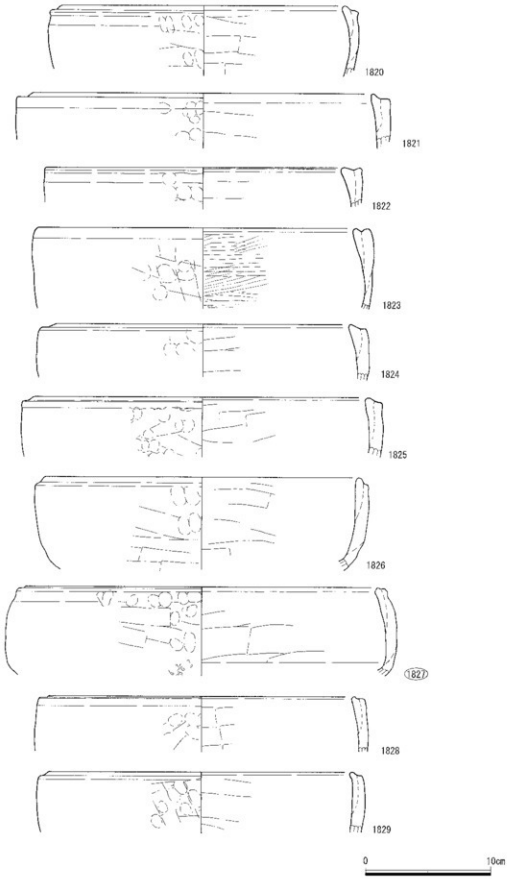
第596図　Ⅱ地区 SD1067遺構断面図



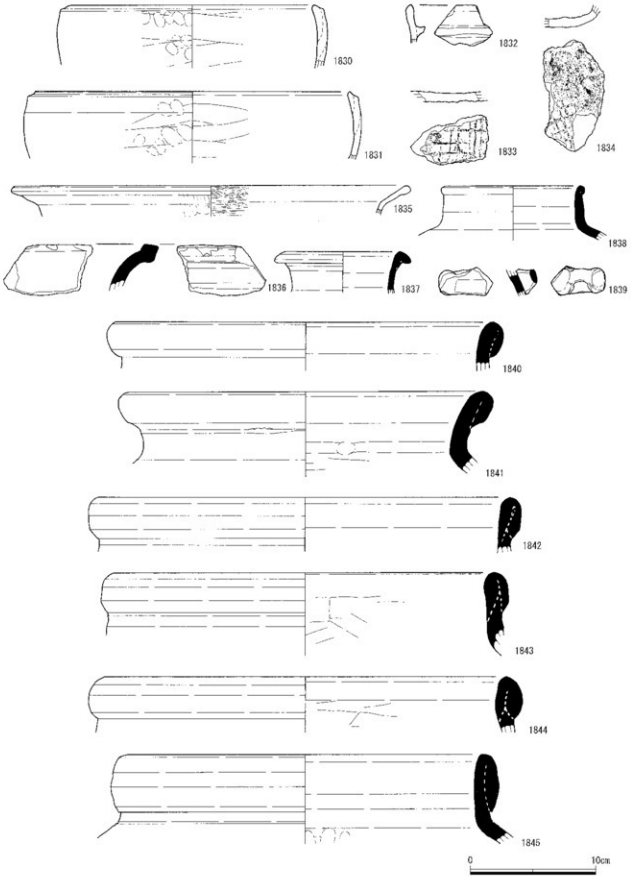
第597図　Ⅱ地区 SD1067遺物実測図（1）



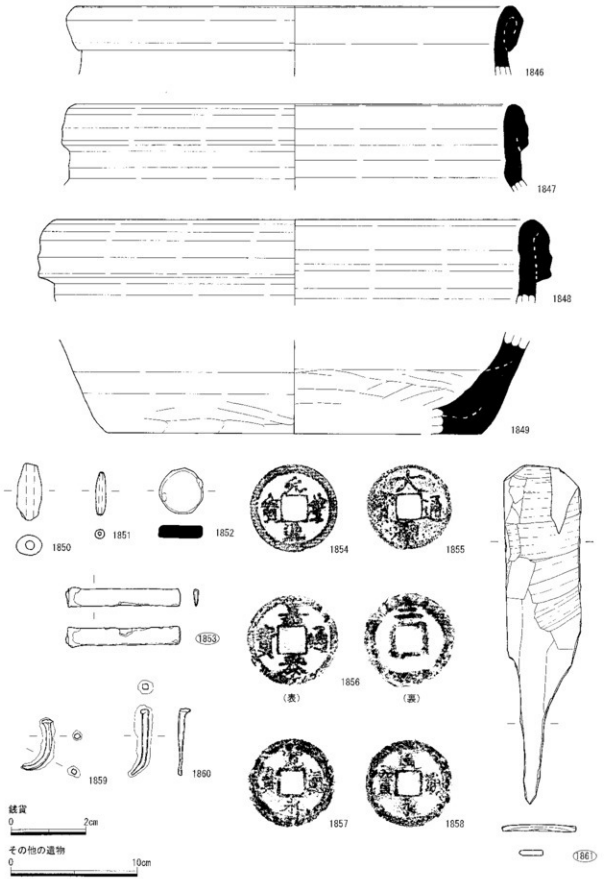
第598図　Ⅱ地区 SD1067遺物実測図（２）



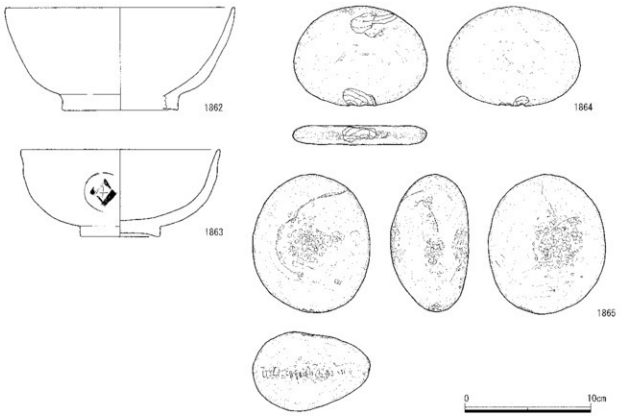
第599図　Ⅱ地区 SD1067遺物実測図（３）



第600図　Ⅱ地区 SD1067遺物実測図（４）



第601図　Ⅱ地区 SD1067遺物実測図（５）



第602図　Ⅱ地区 SD1067遺物実測図（6）

める。溝の規模や立地から当該期における集落の最有力者の屋敷地であると考えられる。

遺物は縄文土器片，弥生土器壺・甕，須恵器杯・壺，上師質土器杯・皿（回転糸切り・回転ヘラ切り）・蓋・鍋・貯蔵具（平行タタキ）・羽釜・土錘，黒色土器椀（A類），瓦器椀，瓦片・軒丸瓦・平瓦，須恵質加工円盤，瓦質土器焙烙，須恵質土器捏鉢・壺・貯蔵具（平行タタキ・格子タタキ），備前陶器播鉢・壺・甕，常滑焼陶器甕，青磁碗（蓮弁）・皿・壺か，白磁碗（玉縁・口禿ほか）・壺，近世陶磁（肥前系・京焼系・瀬戸美濃系・大谷焼），銭貨（北宋銭・南宋銭・寛永通寶），青銅製小柄，鉄製品片・釘，鉄滓，溶解炉壁，砥石（砂岩・粘板岩），叩石（砂岩・結晶片岩），凝灰岩片，サヌカイト片，被熱礫，羽子板状用途不明木製品，漆器椀，骨片，梅種子，炭化物片が出土。

1764～1789は回転台成形の上師質土器皿。1764は口縁端部を外面下方に折り曲げる。1765～1768は体部が若干内彎するタイプ，1769～1780は直線的な体部をもつタイプ，1781～1789は体部が外反するタイプで口縁端部は強いヨコナデによって凹線状に作るものがある。1788・1789は杯形であるが，時代性を考慮して皿に分類した。内彎する体部をもつタイプのうち，1764～1767は底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。1764・1765は胎土にチャートを含む。直線的な体部をもつタイプのうち，1772は回転ヘラ切り痕のち板目痕を残し，胎土に金雲母を含む。灯明皿として使用され，内面～口縁外面に炭化物が付着する。1780も底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。1771・1774・1775・1778・1779は底部外面の切り離し痕をナデ消す。外反する体部をもつタイプのうち1782・1784・1785・1787・1788は底部外面に回転ヘラ切り痕を残すが，1787はナデ消しを試みた形跡がある。1788は板ナデ痕もしくは

板目痕を伴う。1787・1788は胎土に微細な金雲母を含む。1781・1783は底部外面の切り離し痕をナデ消す。1783は内面～口縁外面にわずかに煤が付着していることから灯明皿としての使用が考えられる。

1790は非回転台成形の土師質土器杯で，底部外面に指頭圧痕を残す。1791・1792は回転台成形の土師質土器杯か椀。

1793～1797は瓦器椀。1793・1794は体部内外面に横位のヘラミガキを施し，1793は底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。ともに炭素吸着良好であるが，1793は重焼痕を残す。和泉型瓦器椀Ⅲ－1～2期，12世紀後葉～13世紀初頃の年代が与えられる。1795・1796は体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は1795がやや不良，1796が良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－3～Ⅳ－1期に相当。1797はヘラミガキが確認できない。炭素吸着は不良で，酸化炎焼成。和泉型瓦器椀Ⅳ－1期前後とみられる。

1798・1799は玉縁状口縁をもつ白磁碗。ともに釉とびがみられ，貫入を伴う。胎土に微細な黒斑を含む。大宰府分類の白磁碗Ⅳ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。1800は外反する口縁をもつ白磁碗。釉は透明度高く，ごく粗い貫入を伴う。形式不明であるが，中世後半期の可能性がある。1801は白磁碗の底部。内面の底体部の境に段を有する。釉に貫入を伴う。残存部外面は露胎である。大宰府分類の白磁碗Ⅱ－2類とみられ，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。

1802は青磁皿。内面～畳付まで施釉し，釉に貫入を伴う。14～15世紀代であろう。1803～1807は青磁碗。1803は端反り気味の口縁をもつ。釉に微細な白斑があり，釉とびを伴う。上田分類D－Ⅱ類，14世紀後半～15世紀前半の年代が与えられる。1804は底部内面にヘラ片彫による草花文を施す。高台外側まで施釉し，一部高台内側に達する。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－2類，12世紀中頃～後半の年代が与えられる。1805・1806は底部内面に印花文を施し，1806は「?」字がみえる。1805は釉の透明度高く粗い貫入を伴う。高台外側まで施釉し，畳付部の釉は掻き取る。上田分類のD類とみられ14世紀代に位置付けられる。1806は高台外側まで施釉し，一部畳付を越えて高台内側に達する。上田分類C－Ⅱ－2類とみられ，14世紀後半～15世紀前葉の年代が与えられる。1807は体部外面に細蓮弁文を施文する。高台外側の途中まで施釉し，底部内面に円形の釉剥ぎを施す。釉はきわめて粗い貫入を伴う。露胎部は赤く発色する。底部内面および高台内側に鉄分付着。15～16世紀代とみられる。

1808は東播系の須恵質土器捏鉢。口縁端部を内側に拡張する。重焼により口縁外面に炭素付着する。森田編年の第Ⅱ期第1段階，12世紀中葉～後半の年代が与えられる。1809～1819は備前焼の陶器擂鉢。口縁の形状から，重根編年ⅣA2期（14世紀末～15世紀初頭）に属するものは1817，ⅣA－2～ⅣB－1期（14世紀末～15世紀前葉）は1809，ⅣB－1期（15世紀前葉）は1810，ⅣB－2期（15世紀中葉）は1811・1812，ⅣB－2～3期（15世紀中葉～後葉）は1813，ⅣB－3期（15世紀後葉）は1814～1816。1818・1819は詳細時期不詳であるが，擂目が密でないことからⅣ～Ⅴ期であろう。いずれも内面の体部下半～底部が残存している個体は，使用により摩耗。

1820～1831は土師質土器羽釜。口縁と鍔は近接し，ほぼ一体化してわずかな段を有する。いずれも鍔部折り曲げ技法の名残であるのか，口縁部を継ぎ足して作る。多くは体部内外面を板ナデによって調整するが，1823は体部内面に粗いヨコハケを施す。1827は底部外面に格子タタキを施すほか，底部の残存する個体がみられず調整不明である。1820・1821・1823・1826～1828・1830は胎土に金雲母を含む。1832は播磨型の土師質土器羽釜。体部外面に平行タタキを施す。長谷川編年のⅣ期とみられ，14世紀後半の年代が与えられる。1833・1834は羽釜とみられる土師質土器煮炊具の底部。外面に目の大きな格子タタキを施す。ともに粗い胎土をもち，1834は金雲母と花崗岩を含む。1835は土師質土器

鋤。外面に粗いタテハケ，内面に細かいヨコハケを施す。器壁は薄い。胎土に角閃石とみられる黒色粒子を含む。吉備系と考えられる。

1836は須恵器甕とみられる口縁部。外面に自然釉が付着する。平安京Ⅲ期に同様の口縁端部をもつ甕の類例あり（古代の土器研究会1993）。1837は白磁壺。口縁は外下方に折り曲げる。13世紀代と考えられる。1838は備前焼の陶器壺。口縁端部を小さな玉縁に作る。口縁内面に自然釉が付着。重根編年Ⅳ期，14～15世紀代とみられる。1839は陶器壺の耳部。釉は不透明な灰黄色を呈し，釉厚は不均一で眞入を伴う。胎土は精良。時期産地とも不明である。

1840～1849は備前焼の甕。口縁の形状から，重根編年ⅣA期（14世紀中葉～15世紀初頃）に属するものは1840・1841，ⅣB期（15世紀前葉～後葉）は1842～1845，ⅣB～ⅤA期（15世紀前葉～16世紀前半）は1846，Ⅴ期（16世紀代）・ⅤB期（16世紀後半）は1847・1848である。1848は内外面にハゼ痕を残す。

1850・1851は土師質管状土錘で，1851は還元炎焼成気味である。1852は加工円盤。須恵器または須恵質土器の転用であると考えられるが，瓦質土器の可能性もある。胎土は粗く，チャートを含む。ナデの痕跡を残すが，元の器種は不明である。

1853は銅製小柄で，内部に鉄製の茎部分を残す。表面に漆皮膜状の黒化部がみられたが，蛍光X線分析の結果，金属の錆であることがわかった。1854～1858は銅銭。1854は元豊通寶の真書体。北宋銭で，初鋳年は1078年である。1855は大観通寶。北宋銭で，初鋳年は1107年である。1856は南宋銭の嘉泰通寶で，初鋳年は1201年。背上「二」。1857は寛永通寶。細字で新寛永とみられる。鋳造地は不明で，1668年以降の初鋳と考えられる。1858も細字の新寛永銭で，無背であることから1700年以降の初鋳とみられる。1859・1860はほぼ完形の鉄釘。頂部を平頭に作る。

1861は用途不明の木製品。杉の板材の上部を楕円形，下半を両側から左右非対称に細く削り，下端部を三角形状に尖らせる。全体を羽子板状もしくは杓文字状の形状に作り，全長27.1㎝幅6.3㎝厚み0.6㎝を測る。表面は長軸に平行に削るが，木目等によって引っ掛かったためか削り方向と直交する洗濯板状の浅い凹凸が観察できる。1862・1863は漆器椀。1862はケヤキを素材とし，内外面黒漆塗りである。1863はクリを素材として用い，内面黒漆のち赤漆塗り，外面黒漆塗りで，体部に菱形十字文を丸囲みした文様を赤漆で描く。器形は大きく歪むため，実測図および観察表数値は推定復元による。1864・1865は砂岩製の叩石。1864は扁平な円礫で，側面を使用する。1865はやや厚みがあり，側面および平面中央部に敲打痕を残す。

本遺構は近世の撹乱に切られていることから，近世遺物は混入である。本遺構の年代は，備前焼や青磁碗の時期から開始期を14世紀後半頃と考え，15～16世紀代にかけて徐々に埋没していったと考えられる。

溝68号（Ⅱ地区　SD1068）（第603図）

Ⅱ－9区西部，j～n14・15グリッドに位置する。南は調査区外に延びる。検出長23.4m幅130㎝深度40㎝を測り，主軸はN0°WEを向く。断面は逆台形状で，埋土は1層のみである。底面は北から南に向けて下がる。

遺物は弥生土器片，須恵器片・蓋・椀（山茶椀か）・杯，土師質土器皿・椀・杯（回転糸切り・回転ヘラ切り）・鍋・羽釜・貯蔵具（平行タタキ）・土錘，黒色土器椀（A類・B類），瓦器椀・皿，瓦質土器

片・鉢，須恵質土器捏鉢・壺・甕（平行タタキ・格子タタキ），備前焼陶器擂鉢，白磁碗，近世陶磁器（肥前系・瀬戸美濃系），不明土製品，鉄製品片・釘，鉄滓，砂岩製砥石，凹石，被熱砂岩礫が出土。

1866は瓦器皿。体部内外面に粗い横位のヘラミガキ，底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着良好。和泉型瓦器Ⅲ－１～２期併行と考えられる。1867は瓦器椀。口径13.9cm を測り，体部内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は不良。和泉型瓦器椀Ⅲ－３～Ⅳ－１期に相当し，13世紀前葉～中葉の年代が与えられる。1868は瓦質土器の鉢とみられる。口径19.0cm を測るが，小片のため復元径は不正確。器壁は厚い。体部内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好。和泉型瓦器のⅢ－３期前後に併行するとみられる。1869は白磁碗。口縁を小さな玉縁状に作る。大宰府分類の白磁碗Ⅱ類かⅣ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。1870は須恵器蓋。1871は土師質土器鍋。厚い器壁をもつ。体部外面にタテハケ，体部内面に横位の板ナデを施す。胎土は粗く，金雲母と花崗岩を含む。瀬戸内沿岸～大阪湾岸からの搬入品。中世初頭とみられるが，古代末に遡る可能性もある。

遺構の年代は，出土遺物に時期幅があるが概ね12～13世紀代と考えられる。

溝69号（Ⅱ地区　SD1069）（第604図）

Ⅱ－９・11区，ｋ～ｐ17・18グリッドに位置する。南は調査区外に延びる。検出長25.5m幅96cm 深度40cm を測り，主軸はＮ４°Ｅを向く。断面はレンズ状または不整な逆台形状で，埋土は４層に分層できる。底面は北から南に向けて下がる。

遺物は弥生土器甕，土師器皿，須恵器杯蓋・杯・甕，土師質土器片・椀・杯・皿（回転糸切り）・鍋・土錘，瓦器椀，須恵質土器捏鉢・貯蔵具，陶器片，青磁片，鉄滓が出土。

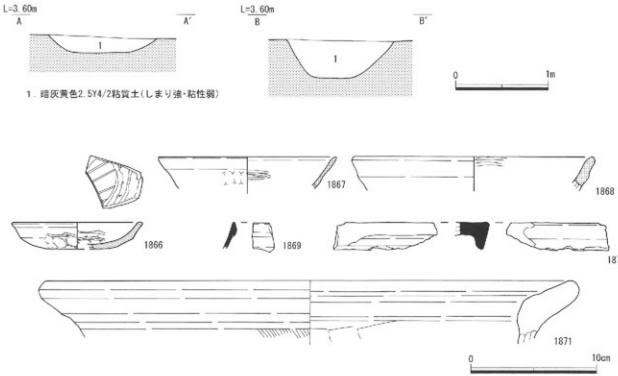
1872は土師器とみられる皿で，非回転台成形。10～11世紀代か。1873は土師質土器皿で，底部外面に回転糸切り痕を残す。1874は瓦器椀。体部内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－３期，13世紀前葉とみられる。1875～1878は土師質管状土錘。1875は外面に炭素付着し，瓦質焼成気味である。1878は胎土に結晶片岩と褐雲母を含む。遺構の年代は，出土遺物に時期幅があるが概ね13世紀頃と考えられる。

溝75号（Ⅱ地区　SD1075）（第605図）

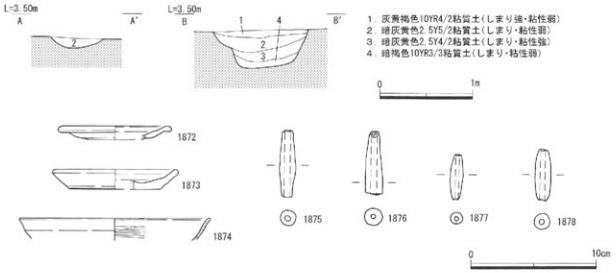
Ⅱ－11区西部南端，ｋ・l18グリッドに位置する。南は調査区外に延びる。検出長33.6m幅75cm 深度22cm を測り，主軸はＮ17°Ｗを向く。断面はレンズ状で，埋土は１層。底面は南に向けて下がる。遺物は弥生土器片，土師質土器片，須恵質土器貯蔵具（平行タタキ），緑釉陶器片が出土。1879は緑釉陶器で，皿とみられる底部。外面に回転糸切り痕を残す。釉は剥離が激しく，底部外面は露胎。焼成やや不良で，酸化炎焼成気味。９世紀代とみられる。遺構の年代は，出土遺物から古代の可能性がある。

溝77号（Ⅱ地区　SD1077）（第606図）

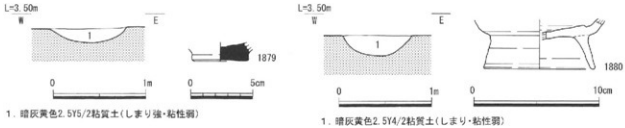
Ⅱ－11区北東隅，ｑ２グリッドに位置する。北西と南東は調査区外に延びる。検出長2.0m幅76cm 深度14cm を測り，主軸はＮ33°Ｗを向く。断面はレンズ状で，埋土は１層のみである。底面に顕著な高低差はみられない。遺物は土師質土器杯（回転ヘラ切り）・脚付皿・鍋・羽釜，須恵質土器貯蔵具が出土。1880は高脚高台付の土師質土器杯か皿。回転台成形とみられる。遺構の年代は，出土遺物から13世紀前後と考えられる。



第603図　Ⅱ地区 SD1068遺構・遺物実測図



第604図　Ⅱ地区 SD1069遺構・遺物実測図



第605図　Ⅱ地区 SD1075遺構・遺物実測図

第606図　Ⅱ地区 SD1077遺構・遺物実測図

不明遺構１号（Ⅱ地区　SX1001）（第607図）

Ⅱ－１区中央部南端，ｔ16グリッドに位置する．東西172cm 南北残存長114cm 深度14cm を測る不整形の浅い土坑状遺構．断面は逆台形状で，埋土は１層である．出土遺物は１点のみで，1881は滑石製紡錘車．遺構東側の底部から出土．直径約3.3cm 厚み1.3cm 重量21.4ｇ，断面逆台形状で，中央に径0.7cm の穿孔を施す．上面・下面には調整に伴う擦痕がみられ，側面には円形に作るための研削痕を残す．遺構の年代は不明．

不明遺構４号（Ⅱ地区　SX1004）（第608図）

Ⅱ－５区東部中央，ｊ・ｋ４グリッドに位置する，長軸186cm 短軸182cm 深度50cm を測る不整形土坑．断面は楕形で，埋土は１層である．遺物は弥生土器片，土師質土器・杯・皿・鍋・擂鉢，瓦器椀，近世磁器片（肥前系），瀬戸焼陶器片，銅製煙管が出土．1882は青銅製の煙管雁首．皿部に炭化物を残す．遺構の年代は，出土遺物から近世と考えられる．

不明遺構５号（Ⅱ地区　SX1005）（第609図）

Ⅱ－５区中央部，ｊ２グリッドに位置する，長軸128cm 短軸124cm 深度34cm を測る円形の土坑状遺構．断面は逆台形状で，埋土は４層に分層できる．

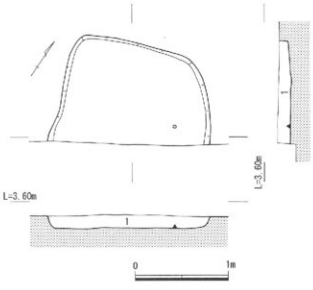
遺物は須恵器杯，土師質土器杯・皿（回転糸切り）・鍋，黒色土器椀（Ｂ類），瓦器椀・皿，須恵質土器椀，焼土ブロックが出土．1883は土師質土器皿で，底部外面に回転糸切り痕を残す．体部外面下端に２条の沈線を残すが，糸切りの失敗によるものと考えられる．1884は瓦器皿．体部内面に横位のヘラミガキを施す．炭素吸着は良好．和泉型瓦器Ⅲ－３～Ⅳ期併行とみられる．1885・1886は瓦器椀．ともに体部内面に粗い横位のヘラミガキを施し，1885は底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す．炭素吸着は1885がやや不良で重焼痕を残し，1886が不良．和泉型瓦器椀Ⅲ－３期に相当し，13世紀前葉の年代が与えられる．1887は東播系とみられる須恵質土器椀．回転台成形で，底部外面に回転糸切り痕を残す．森山編年第Ⅰ期第１段階に相当し，11世紀後半の年代が与えられる．

遺構の年代は，出土遺物に時期幅があり，11世紀後半～13世紀前半頃と考えられる．

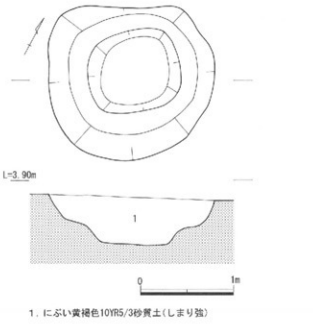
不明遺構８号（Ⅱ地区　SX1008）（第610図）

Ⅱ－10区東端部南側，ｑ・ｒ18・19グリッドに位置する，南北長324cm 東西残存長206cm 深度20cm を測る不整形の土坑状遺構で，東側は調査区外に延びる．断面は浅い皿状で，遺構底部に浅い小穴３基を伴う．埋土は２層に分層できる．

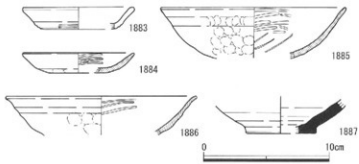
遺物は弥生土器甕，土師質土器片・杯・皿・鍋・羽釜・土錘，瓦器椀，白磁椀，須恵質土器貯蔵具（格子タタキ），備前陶器片，銭貨（北宋銭），焼土ブロックが出土．1888～1890は土師質土器皿．回転台成形で，1889・1890は底部外面の切り離し痕をナデ消す．1891は土師質土器羽釜．口縁と鍔部が近接し，鍔部の退化が著しい．胎土に金雲母を含む．概ね15世紀後半～16世紀代と考えられる．1892は播磨型の土師質土器羽釜．体部外面に平行タタキを施す．長谷川編年のⅥ期，15世紀後半の年代が与えられる．1893は銅銭で，熙寧元寶の篆書体．北宋銭で，1068年初鋳．彫り浅く銭文は不鮮明で，背に穴ズレがみられる．左下半部を欠く．遺構の年代は，出土遺物から15世紀後半～16世紀代と考えられる．



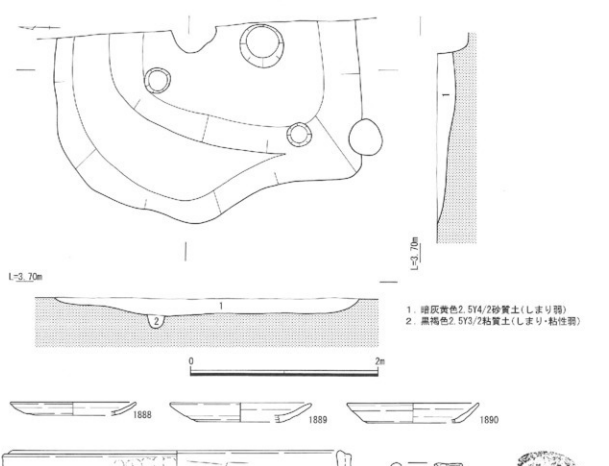
第607図　Ⅱ地区 SX1001遺構・遺物実測図



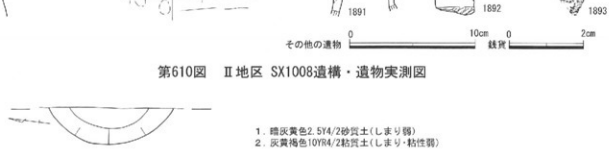
第608図　Ⅱ地区 SX1004
遺構・遺物実測図



第609図　Ⅱ地区 SX1005遺構・遺物実測図



第610図　Ⅱ地区 SX1008遺構・遺物実測図



第611図　Ⅱ地区 SX1010遺構・遺物実測図

不明遺構10号（Ⅱ地区　SX1010）（第611図）

Ⅱ－10区東端部北側，ｓ18･19グリッドに位置する，南北残存長132cm 東西残存長38cm 深度32cm を測る円形の土坑状遺構。断面は皿形で，底面はやや起伏がみられる。埋土は２層に分層できる。

遺物は須恵器杯，土師質土器片・杯・羽釜・土錘，須恵質土器貯蔵具（平行タタキ），瀬戸美濃系陶器

皿が出土。1894は回転台成形の土師質土器杯。1895は瀬戸美濃系の折縁皿。体部内面は縦位のソギを施す。釉に貫入を伴い，底部内面の釉を掻き取る。瀬戸焼の大窯後期とみられ，16世紀後半の年代が与えられる。遺構の年代は，出土遺物に時期幅があって特定は難しいが，中世末期の可能性がある。

小穴27号（Ⅱ地区　SP10027）（第612図）

Ⅱ－1区西端部中央，a12グリッドに位置する，径58cm深度53cmを測る方形の小穴で，西半を側溝に切られる。遺物は土師質土器椀・鍋，瓦器椀，須恵質土器貯蔵具（平行タタキ）が出土。1896は瓦器椀。口径13.3cmを測る。体部内面に粗い横位のヘラミガキ，底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着はみられない。和泉型瓦器椀Ⅳ－1期に相当し，13世紀中葉の年代が与えられる。

小穴33号（Ⅱ地区　SP10033）（第613図）

Ⅱ－1区西端部北側，a12グリッドに位置する，径42cm深度43cmを測る不整円形の小穴で，西半を側溝に切られる。遺物は土師質土器片，瓦器椀，須恵質土器貯蔵具（格子タタキ），白磁碗，鉄滓が出土。1897は白磁碗。口縁端部は短く外方に屈曲する。外面に釉とびを伴う。大宰府分類白磁碗Ⅴ～Ⅷ類に相当し，12世紀中葉～13世紀前半の年代が与えられる。

小穴192号（Ⅱ地区　SP10192）（第614図）

Ⅱ－4区北東隅，j6グリッドに位置する，径39cm深度37cmを測る円形の小穴。遺物は弥生土器甕，土師質土器片・鍋・貯蔵具（平行タタキ），瓦器椀が出土。1898は瓦器椀。口径15.7cmを測る。体部内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着はやや不良である。和泉型瓦器椀Ⅲ－1～2期に相当し，12世紀後葉～13世紀初頭の年代が与えられる。

小穴193号（Ⅱ地区　SP10193）（第615図）

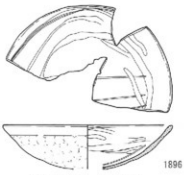
Ⅱ－4区北東隅，i6グリッドに位置する，径30cm深度22cmを測る円形の小穴。遺物は弥生土器片，土師質土器片・杯・皿（回転ヘラ切り）が出土。1899は土師質土器皿。回転台成形で，底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。遺構の年代は不明。

小穴199号（Ⅱ地区　SP10199）（第616図）

Ⅱ－4区東部北端，j6グリッドに位置する，径30cm深度25cmを測る円形の小穴。遺物は弥生土器片，須恵器甕，土師質土器片・杯・皿（回転ヘラ切り）・鍋，黒色土器椀（B類）が出土。1900は黒色土器B類椀。体部内外面に緻密な横位のヘラミガキを施す。高台は低い逆台形状で，径が大きい。炭素吸着は良好。遺構の年代は，出土遺物から概ね11～12世紀頃とみられる。

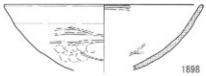
小穴202号（Ⅱ地区　SP10202）（第617図）

Ⅱ－4区東部北端，i5・6グリッドに位置する，径36cm深度26cmを測る不整方形の小穴。遺物は須恵器甕，土師質土器杯・鍋，黒色土器椀（A類）が出土。1901は黒色土器A類椀。底部外面に断面三角形状の高台を貼り付ける。内外面に密なヘラミガキを施す。内面の炭素吸着は良好。遺構の年代は，出土遺物から概ね11～12世紀頃とみられる。



第612図　Ⅱ地区
SP10027遺物実測図

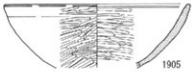
第613図　Ⅱ地区
SP10033遺物実測図



第614図　Ⅱ地区
SP10192遺物実測図

第616図　Ⅱ地区
SP10199遺物実測図

第619図　Ⅱ地区
SP10215遺物実測図

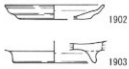


第620図　Ⅱ地区
SP10229遺物実測図

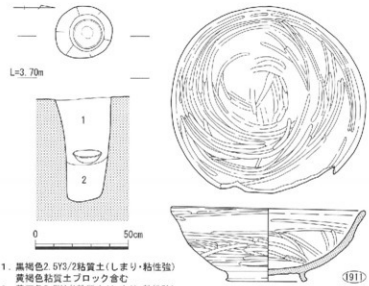
第621図　Ⅱ地区
SP10251遺物実測図

第615図　Ⅱ地区
SP10193遺物実測図

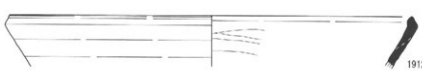
第617図　Ⅱ地区
SP10202遺物実測図



第618図　Ⅱ地区
SP10213遺物実測図



第622図　Ⅱ地区 SP10259遺構・遺物実測図



第623図　Ⅱ地区 SP10263遺物実測図

小穴213号（Ⅱ地区　SP10213）（第618図）

Ⅱ－4区東端部北側，ｉ6グリッドに位置する，径32cm 深度28cm を測る不整円形の小穴。遺物は弥生土器片，土師質土器片・皿，黒色土器椀が出土。1902は土師質土器皿。非回転台成形の可能性あり。底部外面はナデにより仕上げる。1903は黒色土器A類椀。三角形状の高台をもつ。底部内面に密なヘラミガキを施す。内面の炭素吸着は良好。遺構の年代は，出土遺物から概ね11～12世紀頃とみられる。

小穴215号（Ⅱ地区　SP10215）（第619図）

Ⅱ－4区東端部中央，ｉ6グリッドに位置する，径27cm 深度35cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器片・椀・高台付杯が出土。1904は土師質土器高台付杯。非回転台成形とみられる。胎土に石灰台とみられる白色の軟質鉱物を含む。遺構の年代は，出土遺物から古代末～中世初頭と考えられる。

小穴229号（Ⅱ地区　SP10229）（第620図）

Ⅱ－4区東部北側，ｉ6グリッドに位置する，径23cm 深度17cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器片・鍋，黒色土器椀（A類），瓦器椀が出土。1905は瓦器椀。口縁端部内側に1条の横線を引く。内外面に緻密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着はやや不良である。胎土に金雲母を含む。楠葉型瓦器椀のⅠ期とみられ，11世紀後半～12世紀初頭の年代が与えられる。

小穴251号（Ⅱ地区　SP10251）（第621図）

Ⅱ－4区東部北側，ｉ5グリッドに位置する，径26cm 深度34cm を測る円形の小穴。

遺物は土師質土器片・杯・皿（回転ヘラ切り），黒色土器椀（A類），須恵質土器貯蔵具（平行タタキ），鉄滓が出土。1906・1907は土師質土器皿。回転台成形で，1907は底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。1908・1909は土師質土器杯。回転台成形で，1909は底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。1908は胎土に結晶片岩を含む。1910は黒色土器A類椀。内面に密な縦位のヘラミガキを施す。内面は炭素吸着良好である。遺構の年代は，出土遺物から概ね11～12世紀頃とみられる。

小穴259号（Ⅱ地区　SP10259）（第622図）

Ⅱ－4区東部北側，ｉ5グリッドに位置する，径29cm 深度56cm を測る円形の小穴。断面は深いU字状で，埋土は2層に分層できる。遺物は土師質土器片・鍋，瓦器椀，鉄製品片，焼土ブロックが出土。1911は瓦器椀。埋土2層の直上で口縁を上に向けた状態で出土した。柱抜き取り後の埋納と考えられる。口径15.3cm 器高6.0cm を測る。炭素吸着は良好で，外面に重焼痕を残す。和泉型瓦器椀Ⅰ－2～Ⅱ－1期に相当し，11世紀後半～12世紀初頭の年代が与えられる。

小穴263号（Ⅱ地区　SP10263）（第623図）

Ⅱ－4区東部北側，ｉ6グリッドに位置する，径14cm 深度15cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器片・鍋，瓦器椀，須恵質土器捏鉢が出土。1912は東播系の須恵質土器捏鉢。重焼のため口縁外面に炭素付着。森田編年の第Ⅱ期第1段階に相当し，12世紀中葉～後半の年代が与えられる。

小穴269号（Ⅱ地区　SP10269）（第624図）

Ⅱ－４区東部北側，ｈ・ｉ６グリッドに位置する，径54cm 深度37cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器片・皿，黒色土器椀（Ａ類・Ｂ類），須恵質土器貯蔵具，鉄滓が出土。1913は土師質土器皿。回転台成形で，底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。1914は黒色土器Ｂ類椀。体内外に緻密な横位のヘラミガキを施し，底部内面に連結輪状ヘラミガキ暗文を施す。底部外面に断面三角形状の低い高台を貼り付ける。いわゆる楠葉型黒色土器椀で畿内系Ⅴ類のⅨ期とみられ，11世紀後半の年代が与えられる。

小穴292号（Ⅱ地区　SP10292）（第625図）

Ⅱ－４区東部北側，ｉ５グリッドに位置する，径34cm 深度20cm を測る不整円形の小穴。

遺物は土師質土器椀・杯・皿・鍋，黒色土器椀，須恵質土器椀が出土。1915は土師質土器皿で，底部外面に回転ヘラ切り痕のち板目痕を残す。1916は土師質土器椀。底部外面に断面方形の高台を貼り付け。底部内面にヘラミガキを施す。1917は黒色土器Ｂ類椀。体部内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着良好。1918は東播系の須恵質土器椀で，底部外面に回転糸切り痕を残す。森田編年第Ⅰ期，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。1919は土師質土器鍋。体部外面にタテハケ，内面にヨコハケを施す。胎土に金雲母を含む。吉備系で山本編年Ⅲ－１期に相当し，13世紀前葉の年代が与えられる。

遺構の年代は，出土遺物の主体が11～12世紀であるが，吉備系鍋の存在から13世紀に下る可能性あり。

小穴306号（Ⅱ地区　SP10306）（第626図）

Ⅱ－４区東部北側，ｈ５グリッドに位置する，径28cm 深度33cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器皿・鍋が出土。1920は土師質土器皿。回転台成形で，底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。遺構の年代は，出土遺物から古代末～中世初頭と考えられる。

小穴315号（Ⅱ地区　SP10315）（第627図）

Ⅱ－４区東部中央，ｈ５グリッドに位置する，径40cm 深度48cm を測る不整円形の小穴。断面は逆台形状で，中途に段を有する。埋土は３層。

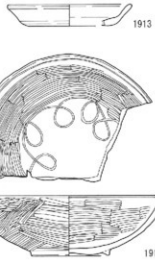
遺物は土師質土器杯（回転ヘラ切り）・鍋・土錘，黒色土器台付椀（Ｂ類か），サヌカイト製石鏃が出土。1921は黒色土器Ｂ類の台付椀。体部外面下位に鍔状の凸帯を貼り付け，底部外面に高台を貼り付ける。外面に密な横位のヘラミガキ，内面に密な縦位のヘラミガキを施す。炭素吸着は内面良好，外面やや不良で，外面の底部付近は酸化炎焼成。遺構の年代は，出土遺物から概ね11～12世紀頃とみられる。

小穴321号（Ⅱ地区　SP10321）（第628図）

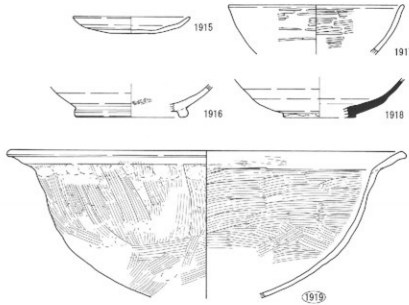
Ⅱ－４区東部北側，ｉ４グリッドに位置する，径28cm 深度13cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器片・皿，瓦器椀が出土。1922は土師質土器皿で，底部外面に回転糸切り痕を残す。遺構の年代は，出土遺物から概ね13世紀頃と考えられる。

小穴348号（Ⅱ地区　SP10348）（第629図）

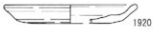
Ⅱ－４区東部北端，ｉ４グリッドに位置する，径45cm 深度30cm を測る不整方形の小穴。遺物は土師



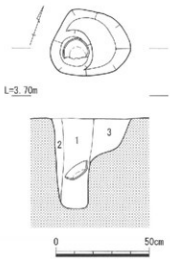
第624図　Ⅱ地区
SP10269遺物実測図



第625図　Ⅱ地区 SP10292遺物実測図



第626図　Ⅱ地区
SP10306遺物実測図

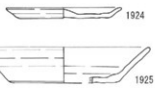


第627図　Ⅱ地区 SP10315遺構・遺物実測図

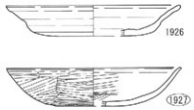
第628図　Ⅱ地区
SP10321遺物実測図

第629図　Ⅱ地区
SP10348遺物実測図

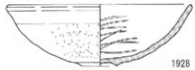
第632図　Ⅱ地区
SP10359遺物実測図



第630図　Ⅱ地区
SP10351遺物実測図



第631図　Ⅱ地区
SP10352遺物実測図



質土器杯・鍋・甕，瓦器椀が出土。1923は瓦器椀。口径12.7cm を測り，体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。重焼のため口縁内面～体部外面中位まで炭素吸着良好であるが，残りは吸着みられない。和泉型瓦器椀Ⅳ－２期とみられ，13世紀後葉の年代が与えられる。

小穴351号（Ⅱ地区　SP10351）（第630図）

Ⅱ－４区東部北端，ｉ４グリッドに位置する，径38cm 深度46cm を測る楕円形の小穴。遺物は土師質土器片・杯・皿が出土。1924は土師質土器皿，1925は土師質土器杯。ともに底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。遺構の年代は，出土遺物から概ね古代末～中世初頭であろう。

小穴352号（Ⅱ地区　SP10352）（第631図）

Ⅱ－４区東部北端，ｉ４グリッドに位置する，径39cm 深度15cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器杯・鍋，黒色土器椀・杯（B類）が出土。1926は土師質土器杯。回転台成形で，底部外面は切り離し痕をナデ消す。1927は黒色土器B類の杯。体部内外面に密な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好。胎土は精良で，結晶片岩を含む。遺構の年代は，出土遺物から概ね古代末～中世初頭と考えられる。

小穴359号（Ⅱ地区　SP10359）（第632図）

Ⅱ－４区中央部北側，ｉ４グリッドに位置する，径28cm 深度25cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器皿・鍋・土錘，瓦器椀，サヌカイト片が出土。1928は瓦器椀。口径14.9cm を測る。体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。底部内面に平行ヘラミガキ暗文は，方向がややばらつく。炭素吸着はやや不良。和泉型瓦器椀Ⅲ－３期に相当し，13世紀前葉の年代が与えられる。

小穴376号（Ⅱ地区　SP10376）（第633図）

Ⅱ－４区中央部，ｈ４グリッドに位置する，径46cm 深度34cm を測る不整円形の小穴。遺物は弥生土器壺，土師質土器皿・鍋，瓦器椀が出土。1929は土師質土器皿で，非回転台成形か。1930は瓦器椀。口径14.8cm を測る。体部外面に接合痕を残し，体部内面に横位のヘラミガキ，底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は良好。和泉型瓦器椀Ⅲ－３期に相当し，13世紀前葉の年代が与えられる。

小穴491号（Ⅱ地区　SP10491）（第634図）

Ⅱ－４区中央部北側，ｇ・ｈ２グリッドに位置する，径54cm 深度48cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器杯・鍋，瓦器椀が出土。1931は土師質土器杯で，底部外面に回転糸切り痕を残す。遺構の年代は，出土遺物から概ね12世紀後葉～13世紀代と考えられる。

小穴520号（Ⅱ地区　SP10520）（第635図）

Ⅱ－４区南東隅，ｇ７グリッドに位置する，径36cm 深度28cm を測る楕円形の小穴。遺物は１点のみで，1932は瓦器椀。口径13.7cm を測る。体部内面に粗い横位のヘラミガキ，底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は内面良好，外面やや不良。和泉型瓦器椀Ⅲ－３期に相当し，13世紀前葉の年代が与えられる。

小穴530号（Ⅱ地区　SP10530）（第636図）

Ⅱ－４区南東隅，ｇ６・７グリッドに位置する，径33cm 深度８cm を測る不整円形の小穴。

遺物は土師質土器片・杯（回転ヘラ切り）・鍋，黒色土器椀（Ａ類・Ｂ類），瓦器椀，梅とみられる種子が出土。1933は黒色土器Ａ類椀。体部内外面に横位のヘラミガキを施すが，外面はやや疎ら。内面の炭素吸着は良好である。胎土に金雲母を含む。1934は黒色土器Ｂ類椀。口縁端部内側に１条の沈線を引く。体部内外面にやや疎な横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は内面良好で外面やや不良。胎土に結晶片岩を含むことから在地産と考えられる。1935は瓦器椀。口径15.0cm を測るが，小片のため法量は不正確。体部内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は不良で，酸化炎焼成する。胎土に金雲母を含む。楠葉型瓦器椀Ⅱ期に相当すると考えられる。12世紀中葉～後葉の年代が与えられる。

小穴638号（Ⅱ地区　SP10638）（第637図）

Ⅱ－４区西端部北側，ｆ18グリッドに位置する，径36cm 深度11cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器片・鍋が出土。1936は土師質土器鍋。器壁は厚く，口縁端部を方形に作る。胎土は粗く，多量の結晶片岩や砂岩を含む。古代末に遡る可能性がある。遺構の年代は，出土遺物から概ね古代末～中世初頭と考えられる。

小穴654号（Ⅱ地区　SP10654）（第638図）

Ⅱ－４区西部中央，ｅ19グリッドに位置する，径30cm 深度14cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器片，凝灰岩製砥石が出土。1937は凝灰岩製砥石で，２面を使用する。遺構の年代は不明。

小穴682号（Ⅱ地区　SP10682）（第639図）

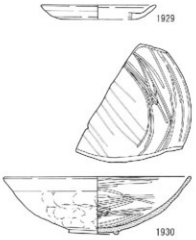
Ⅱ－４区東部南側，ｇ６グリッドに位置する，径47cm 深度36cm を測る隅丸方形の小穴。遺物は土師質土器椀・鍋・土錘，瓦器皿が出土。1938は瓦器皿。ヘラミガキは確認できない。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器のⅣ期併行と考えられる。遺構の年代は，出土遺物から概ね13世紀代と考えられる。

小穴684号（Ⅱ地区　SP10684）（第640図）

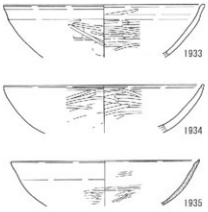
Ⅱ－４区東部中央，ｉ６グリッドに位置する，径32cm 深度35cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器片・杯・皿（回転ヘラ切り）・鍋・土錘，黒色土器椀（Ａ類・Ｂ類）が出土。1939は土師質土器皿。回転台成形で底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。1940は黒色土器Ａ類椀。体部外面に粗い横位のヘラミガキ，体部内面にやや密な縦位のヘラミガキを施す。内面の炭素吸着は良好。遺構の年代は，出土遺物から概ね11～12世紀頃とみられる。

小穴705号（Ⅱ地区　SP10705）（第641図）

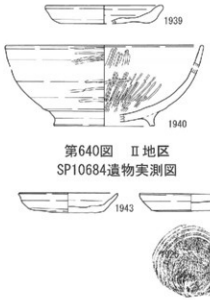
Ⅱ－４区中央部南端，ｄ１グリッドに位置する，径42cm 深度43cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器杯・鍋，瓦器椀，須恵質土器貯蔵具（格子タタキ）が出土。1941は土師質土器杯。非回転台成形で，底部外面に指頭圧痕を残す。京都系土師器皿Ｄタイプの模倣品とみられ，13世紀代の年代が与えられる。遺構の年代は，出土遺物から13世紀代と考えられる。



第633図　Ⅱ地区
SP10376遺物実測図



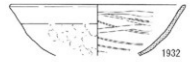
第636図　Ⅱ地区
SP10530遺物実測図



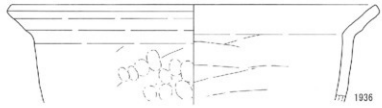
第640図　Ⅱ地区
SP10684遺物実測図

第643図　Ⅱ地区 SP10742遺物実測図

第634図　Ⅱ地区
SP10491遺物実測図



第635図　Ⅱ地区
SP10520遺物実測図



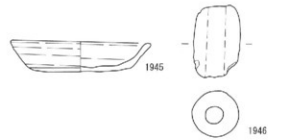
第637図　Ⅱ地区
SP10638遺物実測図

第638図　Ⅱ地区
SP10654遺物実測図

第639図　Ⅱ地区
SP10682遺物実測図

第641図　Ⅱ地区
SP10705遺物実測図

第642図　Ⅱ地区
SP10736遺物実測図



第644図　Ⅱ地区 SP10773遺物実測図

0　10cm

小穴736号（Ⅱ地区　SP10736）（第642図）

Ⅱ－４区中央部南側，ｃ・ｆ２グリッドに位置する，径33cm 深度25cm を測る不整形の小穴。遺物は土師質土器片・杯（回転糸切り），瓦器椀が出土。1942は土師質土器杯。回転台成形で，底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。遺構の年代は，出土遺物から12世紀後葉～13世紀代と考えられる。

小穴742号（Ⅱ地区　SP10742）（第643図）

Ⅱ－４区東部中央，ｅ１グリッドに位置する，径50cm 深度48cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器片・杯（回転糸切り）・皿，瓦器椀，須恵質土器貯蔵具，被熱砂岩礫が出土。1943・1944は土師質土器皿で，底部外面に回転糸切り痕を残す。1943は板目痕を伴う。1944は胎土に微細な金雲母をわずかに含む。遺構の年代は，出土遺物から12世紀後葉～13世紀代と考えられる。

小穴773号（Ⅱ地区　SP10773）（第644図）

Ⅱ－４区東部北側，ｉ４グリッドに位置する，径28cm 深度21cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器片・杯・土錘が出土。1945は土師質土器杯で，底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。胎土は粗い。1946は土師質管状土錘。径3.8cm の大型品である。胎土は粗く，結晶片岩を含む。遺構の年代は，出土遺物から概ね古代末～中世初頭と考えられる。

小穴832号（Ⅱ地区　SP10832）（第645図）

Ⅱ－５区東部南端，ｊ５グリッドに位置する，径31cm 深度26cm を測る円形の小穴。遺物は土師器羽釜，土師質土器皿・鍋・土錘，瓦器椀が出土。1947は瓦器椀とみられるが，黒色土器Ｂ類椀の可能性もある。内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好。和泉型瓦器椀のⅠ～Ⅲ－２期とみられ，11世紀後葉～13世紀初頭の年代が与えられる。1948は摂津Ｃ型の土師器羽釜。口縁に近接して断面台形の鍔部を貼り付ける。胎土は粗い。遺構の年代は，概ね11～12世紀代と考えられる。

小穴874号（Ⅱ地区　SP10874）（第646図）

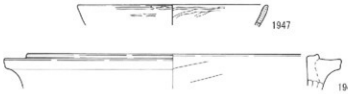
Ⅱ－５区東部北端，ｌ４・５グリッドに位置する，径32cm 深度23cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器皿・鍋が出土。1949は土師質土器皿で底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。遺構の年代は，出土遺物から概ね古代末～中世初頭と考えられる。

小穴1023号（Ⅱ地区　SP11023）（第647図）

Ⅱ－５区東部中央，ｊ３・４グリッドに位置する，径30cm 深度23cm を測る円形の小穴。断面は方形で，埋土は１層である。出土遺物は１点のみで，1950は須恵質土器壺。頸部外面に工具痕，体部外面に格子タタキ，体部内面に無文当具痕を残す。内面に粘土紐の接合痕がみられる。香川の十瓶山窯系須恵質土器壺とみられるが，同地の産であるかは不明である。佐藤編年のⅣ－２期に相当し，12世紀初頭前後の年代が与えられる。

小穴1028号（Ⅱ地区　SP11028）（第648図）

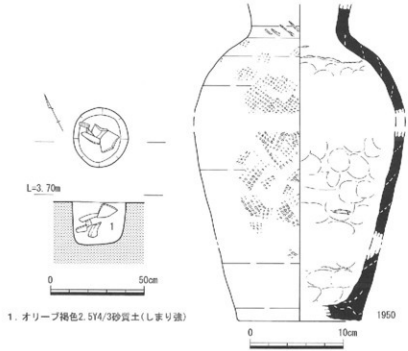
Ⅱ－５区東部北側，ｋ３グリッドに位置する，径46cm 深度53cm を測る形の不整円小穴。遺物は土師



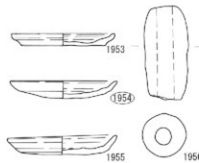
第645図　Ⅱ地区 SP10832遺物実測図

第646図　Ⅱ地区
SP10874遺物実測図

第649図　Ⅱ地区
SP11229遺物実測図

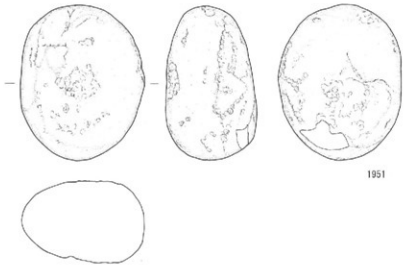


第647図　Ⅱ地区 SP11023 遺構・遺物実測図



第650図　Ⅱ地区
SP11240遺物実測図

第651図　Ⅱ地区
SP11357遺物実測図



第648図　Ⅱ地区 SP11028遺物実測図

第652図　Ⅱ地区
SP11471遺物実測図

質土器片・鍋・砂岩製叩石が出土。1951は砂岩製叩石。器面に敲打痕を残す。遺構の年代は不明。

小穴1229号（Ⅱ地区　SP11229）（第649図）

Ⅱ－5区東部北側，k3グリッドに位置する，径36cm 深度22cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器片，瓦器椀が出土。1952は瓦器椀。口径14.9cm を測る。炭素吸着は良好で，体部外面に重焼痕を残す。体部内外面に横位のヘラミガキを施す。和泉型瓦器椀Ⅲ－2期に相当し，12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。

小穴1240号（Ⅱ地区　SP11240）（第650図）

Ⅱ－5区東部南側，j4グリッドに位置する，径23cm 深度38cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器杯（回転糸切り）・皿（回転ヘラ切り）・土錘，鉄滓，桃種子か，が出土。1953～1955は土師質土器皿で，底部外面に回転ヘラ切り痕を残し，1954は板目痕を伴う。1954は成形後に底部を押し出し，底部内面に指頭圧痕を残す。1953は胎土が粗く，泥岩を含むとみられる。1954はチャート・泥岩を含む。1956は土師質管状土錘で，径3.6cm の大型品。遺構の年代は，出土遺物から12世紀前後と考えられる。

小穴1357号（Ⅱ地区　SP11357）（第651図）

Ⅱ－7区西部中央，l10グリッドに位置する，径40cm 深度25cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器皿・鍋，瓦器椀が出土。1957は回転台成形の土師質土器皿。口縁端部に粘土の継ぎ足しによる接合痕を残し，垂直な端面を作る。遺構の年代は不明。

小穴1471号（Ⅱ地区　SP11471）（第652図）

Ⅱ－7区東部南側，j13グリッドに位置する，径34cm 深度38cm を測る楕円形の小穴。遺物は土師質土器片，瓦器椀，須恵質土器貯蔵具（平行タタキ），鉄釘が出土。1958は鉄釘。端部を欠く。遺構の年代は，出土遺物から13世紀頃と考えられる。

小穴1480号（Ⅱ地区　SP11480）（第653図）

Ⅱ－7区東部南側，j・k13・14グリッドに位置する，径44cm 深度24cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器皿・鍋，瓦器椀が出土。1959は土師質土器皿。回転台成形で，底部外面は切り離し痕をナデ消す。胎土に金雲母を含む。遺構の年代は，出土遺物から12世紀後葉～13世紀代と考えられる。

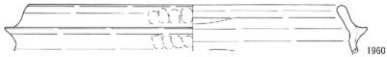
小穴1495号（Ⅱ地区　SP11495）（第654図）

Ⅱ－7区東部中央，l13グリッドに位置する，径34cm 深度39cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器片・鍋・羽釜が出土。1960は土師質土器羽釜。体部外面上位に断面三角形の鍔を貼り付ける。鍔貼り付け位置の体部内面側は，強いヨコナデにより凹線状を呈する。播磨型羽釜の長谷川編年Ⅴ期前後に相当するとみられ，15世紀前半の年代が与えられる。

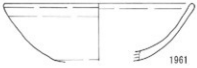
小穴1547号（Ⅱ地区　SP11547）（第655図）

Ⅱ－7区西端部中央，l8グリッドに位置する，径33cm 深度13cm を測る不整円形の小穴。出土遺物

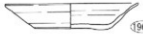
第653図　Ⅱ地区
SP11480遺物実測図



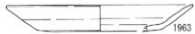
第654図　Ⅱ地区
SP11495遺物実測図



第655図　Ⅱ地区
SP11547遺物実測図

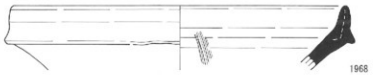


第656図　Ⅱ地区
SP11620遺物実測図



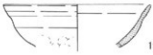
第657図　Ⅱ地区
SP11655遺物実測図

第658図　Ⅱ地区
SP11677遺物実測図

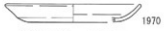


第660図　Ⅱ地区
SP11741遺物実測図

第659図　Ⅱ地区
SP11679遺物実測図

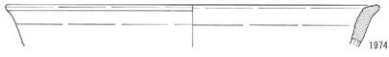


第661図　Ⅱ地区
SP11745遺物実測図

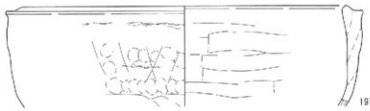


第662図　Ⅱ地区
SP11766遺物実測図

第663図　Ⅱ地区
SP11877遺物実測図



第664図　Ⅱ地区 SP11881遺物実測図



第665図　Ⅱ地区 SP11914遺物実測図

は１点のみで，1961は土師質土器椀。非回転台成形とみられ，体部内面は非常に滑らかでヘラミガキを施した可能性がある。胎土にチャートと石灰岩とみられる粒子を含む。遺構の年代は，出土遺物から概ね古代末～中世前半と考えられる。

小穴1620号（Ⅱ地区　SP11620）（第656図）

Ⅱ－７区北西隅，ｍ８グリッドに位置する，径21cm 深度36cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器片・皿が出土。1962は土師質土器皿。回転台成形で，底部外面に静止糸切り痕を残す。胎土に金雲母を含む。遺構の年代は，出土遺物から中世末期の可能性がある。

小穴1655号（Ⅱ地区　SP11655）（第657図）

Ⅱ－７区西部北側，ｍ10グリッドに位置する，径66cm 深度25cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器皿・羽釜（格子タタキ），黒色土器椀（Ｂ類），瓦器椀，備前陶器片，焼土ブロックが出土。1963は土師質土器皿。回転台成形とみられるが，底部外面の切り離し痕をナデ消す。遺構の年代は，出土遺物に時期幅があるが，羽釜や備前焼が出土することから中世後半期と考えられる。

小穴1677号（Ⅱ地区　SP11677）（第658図）

Ⅱ－７区西部北側，ｍ10グリッドに位置する，径40cm 深度32cm を測る不整方形の小穴。遺物は土師質土器片・鍋，瓦器椀・皿が出土。1964は瓦器皿。内面にヘラミガキを施す。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器のⅣ期併行期と考えられる。遺構の年代は，出土遺物から13世紀代と考えられる。

小穴1679号（Ⅱ地区　SP11679）（第659図）

Ⅱ－７区中央部北側，ｍ10グリッドに位置する，径44cm 深度18cm を測る円形の小穴。遺物は須恵器椀，土師質土器片，青磁皿が出土。1965は青磁皿。口縁は大きく外反する。釉の透明度高く，粗い貫入を伴う。胎土に微細な黒斑を含む。15世紀代とみられる。

小穴1741号（Ⅱ地区　SP11741）（第660図）

Ⅱ－７区中央部北側，ｎ11グリッドに位置する，径40cm 深度60cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器片・皿・杯（回転ヘラ切り）・羽釜（格子タタキ），瓦器椀，須恵質土器貯蔵具，備前焼陶器擂鉢・貯蔵具，焼土ブロックが出土。1966は土師質土器皿，1967は土師質土器の皿か杯とみられる。回転台成形であるが，底部外面は切り離し痕をナデ消す。1968は備前焼陶器擂鉢。口縁の形状から重根編年Ⅳ Ｂ－２期に相当するとみられ，15世紀後葉の年代が与えられる。

小穴1745号（Ⅱ地区　SP11745）（第661図）

Ⅱ－７区中央部北端，ｎ11グリッドに位置する，径26cm 深度17cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器杯・鍋，瓦器椀が出土。1969は瓦器椀。口径11.7cm を測る。ヘラミガキは確認できない。炭素吸着は内面不良，外面やや不良。胎土に細粒を多く含み，器面が粗い。和泉型瓦器椀Ⅳ－３期に相当し，13世紀末～14世紀初頭の年代が与えられる。

小穴1766号（Ⅱ地区　SP11766）（第662図）

Ⅱ－7区中央部北側，m12グリッドに位置する，径32cm 深度32cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器皿，鉄釘が出土。1970は土師質上器皿。回転台成形で，底部外面は切り離し痕をナデ消す。中世末期であろう。

小穴1877号（Ⅱ地区　SP11877）（第663図）

Ⅱ－7区中央部北側，m11グリッドに位置する，径41cm 深度34cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器皿・羽釜（格子タタキ）・上錘，瓦器椀，銭貨（北宋銭）が出土。1971は土師質土器皿で，底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。焼成堅緻。1972は銅銭で，皇宋通寶の真書体。北宋銭で，初鋳年は1039年。錆が固着し，銭文不鮮明。遺構の年代は，出土遺物から概ね12世紀前後と考えられる。

小穴1881号（Ⅱ地区　SP11881）（第664図）

Ⅱ－7区北西隅，m8グリッドに位置する，径38cm 深度42cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器片・杯・皿（回転ヘラ切り）・鍋・羽釜（格子タタキ），瓦器椀，瓦質土器鍋が出土。1973は土師質上器皿で，底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。胎土にチャートを含むとみられる。1974は瓦質土器鍋。炭素吸着やや不良。胎土は粗く，結晶片岩と泥岩を含む。遺構の年代は，概ね13世紀代と考えられる。

小穴1914号（Ⅱ地区　SP11914）（第665図）

Ⅱ－7区中央部北端，n11グリッドに位置する，径43cm 深度40cm を測る不整円形の小穴。

遺物は土師質土器片・杯（回転ヘラ切り）・皿・鍋・羽釜，瓦器椀，備前陶器片が出土。1975は土師質土器皿。回転台成形で，底部外面は切り離し痕をナデ消す。内面に煤や炭化物が厚く付着しており，灯明皿として使用されたと考えられる。1976は土師質土器羽釜。口縁と鍔部が近接し，鍔部の退化が著しい。底部外面には格子タタキがみられず，板ナデによって成形される。この成形技法は吉野川中流域の三好郡で多く用いられる技法である。吉野川下流域や県南域では底部外面を格子タタキによって成形する羽釜が主体であり，本遺物はきわめて稀であるといえる。15～16世紀代の年代が与えられる。

小穴1934号（Ⅱ地区　SP11934）（第666図）

Ⅱ－7区中央部北端，n11グリッドに位置する，径34cm 深度40cm を測る不整円形の小穴。遺物は弥生土器片，土師質上器片・杯・羽釜（平行タタキ）・鍋，白磁皿が出土。1977は土師質土器杯。回転台成形で，底部外面の回転ヘラ切り痕はナデ消す。1978は白磁皿の底部。割高台をもつ。釉は黄味がかり，貫入を伴う。残存部外面は露胎である。底部内面に2箇所の目痕を残し，計4箇所の存在が推測できる。森山分類の白磁皿D群に相当し，15世紀前半の年代が与えられる。

小穴1978号（Ⅱ地区　SP11978）（第667図）

Ⅱ－8区西部南端，n9・10グリッドに位置する，径48cm 深度24cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器椀・杯（回転糸切り）・土師質上器片，粘板岩製砥石が出土。1979は粘板岩製の砥石。3面を使用する。硯転用の可能性もある。遺構の年代は，出土遺物から概ね中世前半期と考えられる。

小穴2096号（Ⅱ地区　SP12096）（第668図）

Ⅱ－８区東部南側，o12グリッドに位置する，径64cm 深度44cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器片・羽釜（格子タタキ），瓦器椀，青磁碗が出土。1980は青磁碗。釉の透明度高く，粗い貫入を伴う。上田分類のD類に相当し，14世紀後半～15世紀初頭の年代が与えられる。

小穴2126号（Ⅱ地区　SP12126）（第669図）

Ⅱ－８区東部中央，p12グリッドに位置する，径47cm 深度42cm を測る不整形の小穴。遺物は弥生土器片，土師質土器片，瓦器椀，備前焼陶器擂鉢が出土。1981は備前焼陶器擂鉢。口縁外面に自然釉が付着する。胎土に花崗岩を含む。口縁の形状から重根編年ⅣA－２期に相当し，14世紀末～15世紀初頭の年代が与えられる。

小穴2240号（Ⅱ地区　SP12240）（第670図）

Ⅱ－９区南端部東側，k17グリッドに位置する，径46cm 深度35cm を測る不整形の小穴。遺物は土師質土器片・鍋，白磁片，鉄鏃が出土。1982は鉄鏃で，先端が二股に分かれる straight 鏃。全長11.3cm 重量45.8ｇを測る。遺構の年代は，概ね中世と考えられるが詳細時期は不明である。

小穴2274号（Ⅱ地区　SP12274）（第671図）

Ⅱ－９区中央部，m16グリッドに位置する，径54cm 深度23cm を測る不整形の小穴。出土遺物は１点のみで，1983は土師質土器鍋。体部外面に平行タタキ，体部内面はヨコハケによって調整する。播丹型鍋で，長谷川編年Ⅵ期に相当し，15世紀後半～16世紀初頭の年代が与えられる。

小穴2315号（Ⅱ地区　SP12315）（第672図）

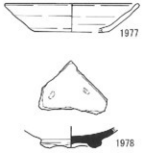
Ⅱ－９区中央部西側，m15グリッドに位置する，径30cm 深度10cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器皿・釜か・捏鉢か，が出土。1984は土師質土器の釜とみられる。鍔は確認できないが，鍔が退化した羽釜の可能性もある。体部外面上位はヘラケズリ，中位以下はタテハケ，内面は横位の板ナデによって調整する。胎土は粗く，金雲母を含む。搬入品と考えられる。遺構の年代は，出土遺物から概ね中世後半期と考えられる。

小穴2356号（Ⅱ地区　SP12356）（第673図）

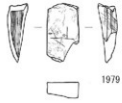
Ⅱ－９区北部中央，p16グリッドに位置する，径33cm 深度51cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器杯・鍋・羽釜が出土。1985は土師質土器羽釜。鍔は退化して口縁と近接し，間に低い段を作る。胎土に金雲母を含む。搬入品と考えられる。遺構の年代は，出土遺物から15～16世紀代と考えられる。

小穴2387号（Ⅱ地区　SP12387）（第674図）

Ⅱ－９区中央部，o16グリッドに位置する，径27cm 深度16cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器杯・鍋，瓦器皿が出土。1986は土師質土器杯。非回転台成形の可能性がある。焼成堅緻で，胎土に金雲母を含む。遺構の年代は，出土遺物から中世前半期と考えられる。



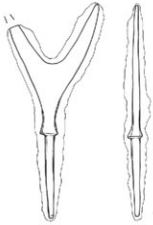
第666図　Ⅱ地区
SP11934遺物実測図



第667図　Ⅱ地区
SP11978遺物実測図

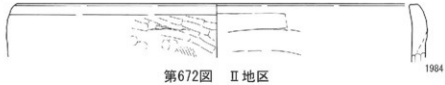
第668図　Ⅱ地区
SP12096遺物実測図

第669図　Ⅱ地区
SP12126遺物実測図



第670図　Ⅱ地区
SP12240遺物実測図

第671図　Ⅱ地区
SP12274遺物実測図



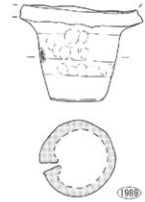
第672図　Ⅱ地区
SP12315遺物実測図

第673図　Ⅱ地区
SP12356遺物実測図

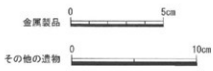
第674図　Ⅱ地区
SP12387遺物実測図

第675図　Ⅱ地区
SP12388遺物実測図

第676図　Ⅱ地区
SP12510遺物実測図



第677図　Ⅱ地区
SP12515遺物実測図



小穴2388号（Ⅱ地区　SP12388）（第675図）

Ⅱ－９区中央部，ｏ16グリッドに位置する，径44cm 深度16cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器片・杯か椀が出土。1987は土師質土器杯か椀。回転台成形とみられる。遺構の年代は，中世と考えられるが詳細時期は不明である。

小穴2510号（Ⅱ地区　SP12510）（第676図）

Ⅱ－９区北部東端，ｐ17グリッドに位置する，径48cm 深度37cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器片・鍋，黒色土器椀（Ｂ類），瓦器椀，鉄製品片が出土。1988は板状の鉄製品で，器種は不明。遺構の年代は，出土遺物から概ね12～13世紀代と考えられる。

小穴2515号（Ⅱ地区　SP12515）（第677図）

Ⅱ－９区北部東端，ｏ17グリッドに位置する，径30cm 深度41cm を測る不整円形の小穴。出土遺物は１点のみで，1989は瓦質土器円形火鉢の脚部。脚体部は中空で，中心を向く位置に外面からの穿孔が１カ所みられる。焼成時の破裂を防止するためか。炭素吸着は良好だが，わずかに酸化炎焼成気味。胎土は良好で，金雲母を多量に含む。遺構の年代は，出土遺物から中世後半期と考えられる。

小穴2532号（Ⅱ地区　SP12532）（第678図）

Ⅱ－９区北部東端，ｏ17グリッドに位置する，径34cm 深度38cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器片・杯，須恵質土器貯蔵具（平行タタキ），焼土ブロックが出土。1990は土師質土器杯。回転台成形で，底部外面の切り離し痕をナデ消したのち板目痕を残す。中世末期とみられる。

小穴2538号（Ⅱ地区　SP12538）（第679図）

Ⅱ－９区北部東端，ｏ17グリッドに位置する，径38cm 深度57cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器皿・鍋，瓦器椀が出土。1991は土師質土器皿で，底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。遺構の年代は，出土遺物から12世紀後葉～13世紀代と考えられる。

小穴2559号（Ⅱ地区　SP12559）（第680図）

Ⅱ－９区南部中央，Ｉ15グリッドに位置する，径39cm 深度34cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器片・羽釜が出土。1992は播磨型の土師質土器羽釜。体部外面に平行タタキ，体部内面に丁寧なヨコハケを施す。長谷川編年のⅣ～Ⅴ期に相当し，14世紀後半～15世紀後半の年代が与えられる。

小穴2629号（Ⅱ地区　SP12629）（第681図）

Ⅱ－９区中央部，m16グリッドに位置する，径30cm 深度20cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器片・杯・皿が出土。1993は土師質土器皿で，底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。遺構の年代は，出土遺物から概ね12世紀前後と考えられる。

小穴2647号（Ⅱ地区　SP12647）（第682図）

Ⅱ－９区中央部東側，m17グリッドに位置する，径40cm 深度32cm を測る楕円形の小穴。遺物は土師

質土器皿・鍋，瓦器椀，黒色土器（A類）が出土。1994は土師質土器皿で，底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。遺構の年代は，出土遺物から12～13世紀頃と考えられる。

小穴2668号（Ⅱ地区　SP12668）（第683図）

Ⅱ－9区南部東側，l17グリッドに位置する，径24cm 深度17cm を測る円形の小穴。出土遺物は1点のみで，1995は非回転台成形とみられる土師質土器高脚高台付皿。古代末～中世初頭と考えられる。

小穴2892号（Ⅱ地区　SP12892）（第684図）

Ⅱ－10区西部南端，q15･16グリッドに位置する，径50cm 深度62cm を測る隅丸方形の小穴で，南半を側溝に切られる。遺物は土師質土器椀・杯・鍋，瓦器椀，近世磁器皿が出土。1996は肥前系の磁器皿。薄い黄緑色の釉をかける。体部外面下端は釉厚が薄くなり，一部素地が見えるため露胎となるとみられる。わずかに釉とびがみられる。胎土に微細な黒斑を含む。17世紀前半の年代が与えられる。

小穴3085号（Ⅱ地区　SP13085）（第685図）

Ⅱ－11区中央部，o1グリッドに位置する，径40cm 深度21cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器皿・鍋，瓦器椀が出土。1997は土師質土器皿で，底部外面に回転糸切り痕を残す。遺構の年代は，出土遺物から12世紀後葉～13世紀代と考えられる。

小穴3108号（Ⅱ地区　SP13108）（第686図）

Ⅱ－11区東部北側，o･p1グリッドに位置する，径22cm 深度12cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器片・杯（回転ヘラ切り）・皿・羽釜，青磁碗か，白磁片，鉄製品片，砂岩製叩石が出土。1998は青磁碗としたが皿の可能性もある。口縁端部がわずかに外反。釉は厚い。型式不明，14世紀代以降か。1999は土師質土器羽釜。鍔部は折り曲げ技法でつくり，口縁と近接。胎土に金雲母を含む。搬入品とみられる。鍔部以下に煤と炭化物が付着。15世紀代と考えられる。

小穴3248号（Ⅱ地区　SP13248）（第687図）

Ⅱ－11区中央部南側，m1グリッドに位置する，径36cm 深度22cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土器片・杯（回転ヘラ切り）・鍋，瓦器椀，白磁片，被熱砂岩礫が出土。2000は瓦器椀。口径14.8cm を測る。体部内外面に横位のヘラミガキ，底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着はやや不良。和泉型瓦器椀Ⅲ－2期に相当し，12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。

小穴3268号（Ⅱ地区　SP13268）（第688図）

Ⅱ－11区中央部南側，l1グリッドに位置する，径32cm 深度9cm を測る円形の小穴。出土遺物は1点のみで，2001は土師器羽釜。摂津C型羽釜で，口縁端部外面に鍔部を貼り付ける。胎土は粗く，角閃石とみられる黒色粒子を含む。大阪湾岸からの搬入品である。11～12世紀代と考えられる。

小穴3299号（Ⅱ地区　SP13299）（第689図）

Ⅱ－11区西部南側，l19グリッドに位置する，径73cm 深度18cm を測る形の小穴。遺物は弥生土器片，

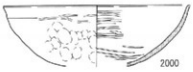
第678図　Ⅱ地区
SP12532遺物実測図

第679図　Ⅱ地区
SP12538遺物実測図

第681図　Ⅱ地区
SP12629遺物実測図

第684図　Ⅱ地区
SP12892遺物実測図

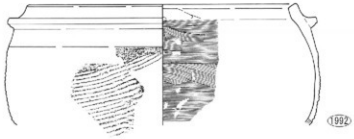
第685図　Ⅱ地区
SP13085遺物実測図



第687図　Ⅱ地区
SP13248遺物実測図

第689図　Ⅱ地区
SP13299遺物実測図

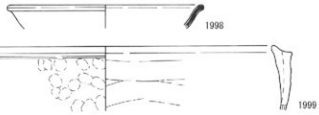
第691図　Ⅱ地区
SP13323遺物実測図



第680図　Ⅱ地区　SP12559遺物実測図

第682図　Ⅱ地区
SP12647遺物実測図

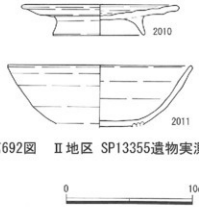
第683図　Ⅱ地区
SP12668遺物実測図



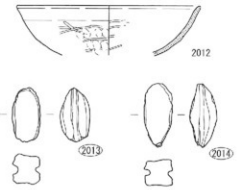
第686図　Ⅱ地区　SP13108遺物実測図

第688図　Ⅱ地区　SP13268遺物実測図

第690図　Ⅱ地区　SP13318遺物実測図



第692図　Ⅱ地区 SP13355遺物実測図



第693図　Ⅱ地区 SP13387遺物実測図

土師質土器片・杯（回転ヘラ切り）・皿・脚付皿，黒色土器椀（B類），瓦器椀が出土。2002は土師質土器皿，2003は土師質土器杯，2004は土師質土器高脚高台付杯か皿。ともに回転台成形で，2002は底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。遺構の年代は，出土遺物から12～13世紀頃と考えられる。

小穴3318号（Ⅱ地区　SP13318）（第690図）

Ⅱ－11区西部南側，m18グリッドに位置する，径28cm 深度36cm を測る不整円形の小穴。

遺物は土師質土器杯（回転ヘラ切り）・皿・鍋，瓦器椀・皿，須恵質土器貯蔵具，白磁碗・皿が出土。2005・2006は瓦器皿。ともにやや深身で，体部内外面に横位のヘラミガキを施し，2005は底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。2005は炭素吸着がみられず，2006はやや不良。和泉型瓦器Ⅲ－１～２期併行期とみられ，12世紀後葉～13世紀初頭の年代が与えられる。2007は瓦器とみられる椀であるが，酸化炎焼成で炭素吸着はみられない。口径15.4cm を測る。体部内面にヨコハケを施しヘラミガキは確認できない。器形は和泉型瓦器椀に近似する。2008は白磁皿。内面に櫛描花文を施す。釉に粗い貫入を伴い，高台は露胎。大宰府分類の白磁皿Ⅶ－１ｂ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。

小穴3323号（Ⅱ地区　SP13323）（第691図）

Ⅱ－11区西部南側，m18グリッドに位置する，径34cm 深度14cm を測る不整円形の小穴。遺物は土師質土器片・皿が出土。2009は土師質土器皿で，底部外面に回転ヘラ切り痕を残す。胎土にチャートとみられる粒子を含む。全体的に粗雑な作り。遺構の年代は，出土遺物から12世紀前後と考えられる。

小穴3355号（Ⅱ地区　SP13355）（第692図）

Ⅱ－11区西部南側，m18・19グリッドに位置する，径48cm 深度25cm を測る不整形の小穴。遺物は土師器脚付皿，黒色土器椀，が出土。2010は土師器高脚高台付皿。回転台成形とみられる。胎土に黒色粒を含む。2011は黒色土器とみられる椀。摩耗や剥離によって不鮮明であるが，内外面にヘラミガキの痕跡が確認できる。内面にわずかに炭素吸着する。遺構の年代は，出土遺物から11～12世紀頃と考えられる。

小穴3387号（Ⅱ地区　SP13387）（第693図）

Ⅱ－11区西部北側，o18グリッドに位置する，径40cm 深度20cm を測る円形の小穴。遺物は土師質土

器片・土錘，瓦器椀が出土。2012は瓦器椀。口径14.6cm を測る。体部内外面に横位のヘラミガキを施す。胎土に金雲母・花崗岩を含む。炭素吸着は内面良好，外面なし。酸化炎焼成気味である。非和泉型の可能性があり，和泉型瓦器のⅢ－１～２期併行とみられる。2013・2014は土師質の有溝土錘。紡錘形で表裏それぞれ長軸方向に１条ずつの溝を有する。胎土に金雲母を含み，2013は炭素付着。

〈Ⅱ－１～６区　第１包含層出土遺物〉(第694～697図)

2015は須恵器杯蓋。胎土に黒色粒を含む。2016は須恵器杯。ともに古墳時代後期とみられる。2017は高台付の須恵器杯。８世紀後半頃とみられる。

2018～2022は回転台成形の土師質土器皿。2020を除き底部外面に回転糸切り痕のち板目痕を残す。2023は非回転台成形とみられる土師質土器皿。2024は柱状高台付の土師質土器皿。回転台成形で底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土は精良で，焼成は不良である。2025は土師質土器高脚高台付の皿，2026は同杯。回転台成形とみられる。2027～2030は土師質土器杯。2027・2028は底部外面に回転糸切り痕を残し，2027は板目痕を伴う。2028は胎土が粗く，チャートとみられる粒子を含む。2029は非回転台成形の可能性がある。底部外面の切り離し技法は不明で，板目痕のみ残す。器形に歪みがみられる。2030は底部外面の回転ヘラ切り痕をナデ消す。

2031は黒色土器Ａ類椀。体部外面に横位のヘラミガキ，体部内面に横位・斜位のヘラミガキを施す。内面～口縁外面の炭素吸着は良好である。2032は黒色土器Ｂ類椀。内外面にやや粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好である。2033は黒色土器Ｂ類椀。体部内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は良好である。胎土に結晶片岩と絹雲母を含む。

2034・2035は瓦器皿。2034は器形の歪み大きく，ヘラミガキは確認できない。炭素吸着はやや不良で，胎土は粗い。非和泉型の可能性があるが，和泉型瓦器Ⅳ期併行とみられる。2035は体部内面に横位のヘラミガキ，底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は良好で，重焼痕を残す。和泉型瓦器のⅢ－３期併行と考えられる。

2036～2043は瓦器椀。2036は下半部で，底部外面に断面台形状の高い高台を貼り付ける。体部内外面に密な横位のヘラミガキ，底部内面に密な平行ヘラミガキをを施す。炭素吸着は良好である。和泉型瓦器椀Ⅰ－３～Ⅱ－１期とみられ，11世紀末～12世紀前葉の年代が与えられる。2037は外面に横位のヘラミガキ，口縁内面に横位のヘラミガキを施す。平行ヘラミガキ暗文が体部まで上がってきていることから，椀ではなく皿の可能性も考えられる。和泉型瓦器椀Ⅲ－２期，12世紀末～13世紀初頭とみられる。2038は口径15.4cm を測り，体部内外面に横位のヘラミガキ，底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。内外面の炭素吸着は良好で，外面に重焼痕を残す。和泉型瓦器椀Ⅱ－１期，12世紀初頭～前葉の年代が与えられる。2039は口径14.8cm を測り，体部内外面に横位のヘラミガキ，底部内面に格子状ヘラミガキ暗文を施す。炭素吸着は内面やや不良，口縁外面良好で以下不良である。重焼痕を残す。和泉型瓦器椀Ⅲ－１期に相当し12世紀後葉の年代が与えられる。2040は口径14.0cm を測り，体部内外面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は内面良好，外面やや不良で，外面に重焼痕を残す。和泉型瓦器椀Ⅲ－２期に相当し，12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。2041・2042は体部内面に粗い横位のヘラミガキ，底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。2041の平行ヘラミガキ暗文は口縁近くまで上がる。ともに炭素吸着やや不良である。和泉型瓦器椀Ⅲ－３期に相当し，13世紀前葉の年代が与えられる。2043は体部内面に横位・斜位のヘラミガキを施す。炭素吸着はみられず，酸化炎焼成する。胎土にチャー

トとみられる粒子を含む。形状は和泉型であるが，在地産の可能性が高い。和泉型瓦器Ⅲ－３期併行か。

2044は緑釉陶器碗。底部外面に回転糸切りのち断面台形状の高台を貼り付ける。内面～高台外側に施釉し，わずかに畳付や高台内側に付着する。全体的に釉の剥離激しい。近江産の可能性があり，10世紀後半の年代が与えられる。

2045～2052は白磁。2045は白磁皿。口縁端部を短く外反させる。釉に貫入を伴う。大宰府分類の白磁皿Ⅴ～Ⅶ類とみられ，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。2046は白磁碗の底部。釉に貫入を伴い，現存部の外面は露胎である。大宰府分類の白磁碗Ⅱ類とみられ，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。2047は白磁碗の上半部。口縁端部をごく小さな玉縁状に作る。大宰府分類の白磁碗Ⅱ類に相当する。2048～2050は口縁を玉縁状に作る白磁碗。2049は釉に貫入を伴い，釉とびがみられる。いずれも大宰府分類白磁碗Ⅳ類に相当し，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。2051は白磁碗底部。高台内側の削り出しが浅く，中途で終えているようである。体部外面下端以下露胎である。大宰府分類の白磁碗Ⅳ類とみられる。2052も白磁碗の底部で，内面に蛇ノ目釉剥ぎを施す。体部外面下端以下露胎である。大宰府分類の白磁碗Ⅷ－２類に相当し，12世紀中葉～13世紀前半の年代が与えられる。

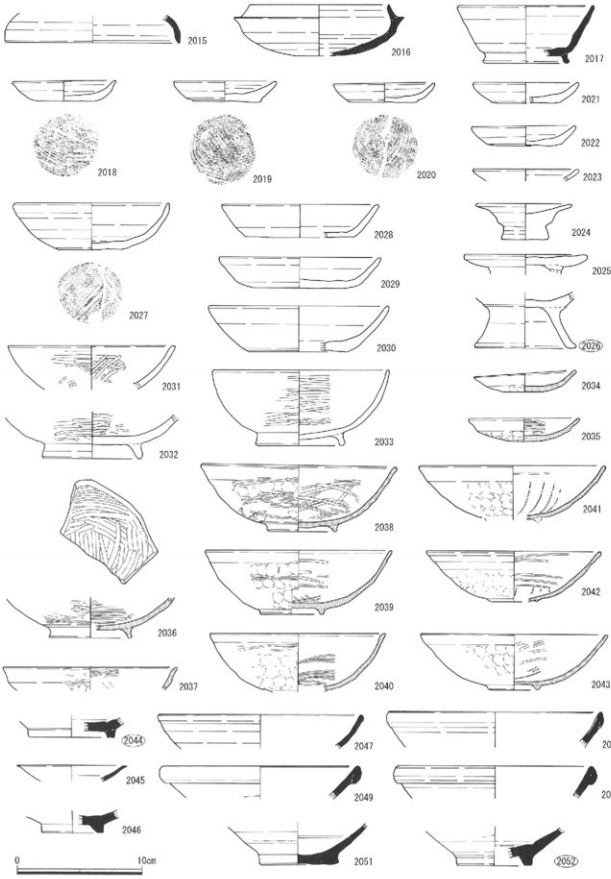
2053～2057は青磁。2053は青磁皿。釉にごく粗い貫入を伴い，体部外面下端～底部外面は露胎である。胎土に微細な黒斑を含む。14～15世紀代とみられる。2054～2056は青磁碗。2054は体部内面に櫛描文，底部内面にヘラ片彫による草花文を施文する。釉は透明度高く貫入を伴い，内面～高台外面途中まで施釉する。釉の一部は畳付を越えて高台内側に達するが，畳付部の釉は掻き取る。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－２類とみられ，12世紀中頃～後半の年代が与えられる。2055は体部外面にヘラ片彫による鏡蓮弁文を施文する。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５ｂ類に相当し，13世紀初頭～前半の年代が与えられる。2056は体部内面にヘラ先またはヘラ片彫により施文する。デザインは不明である。釉は荒れが目立つものの，透明度は高い。上田分類Ｄ類の一種か。14世紀代か。2057は青磁の盤とみられる。外面の高台と体部の境は不明瞭で，外底は碁笥底状を呈する。釉は厚めで貫入を伴い，畳付の一部が露胎であるほかは施釉する。年代等不詳であるが，中世後半期と考えられる。

2058は青白磁の碗か皿。底部内面にヘラ先によって蕨手状の文様を陰刻する。体部外面下位～底部外面は露胎である。釉の荒れが著しく，文様が不鮮明である。2059は青磁の合子蓋。外面は型押しで作る。天井部内外面に施釉し，口縁外面～体部内面は露胎である。2060は青白磁合子蓋の天井部。外面を型押しで作る。内外面に施釉し，釉に粗い貫入を伴う。

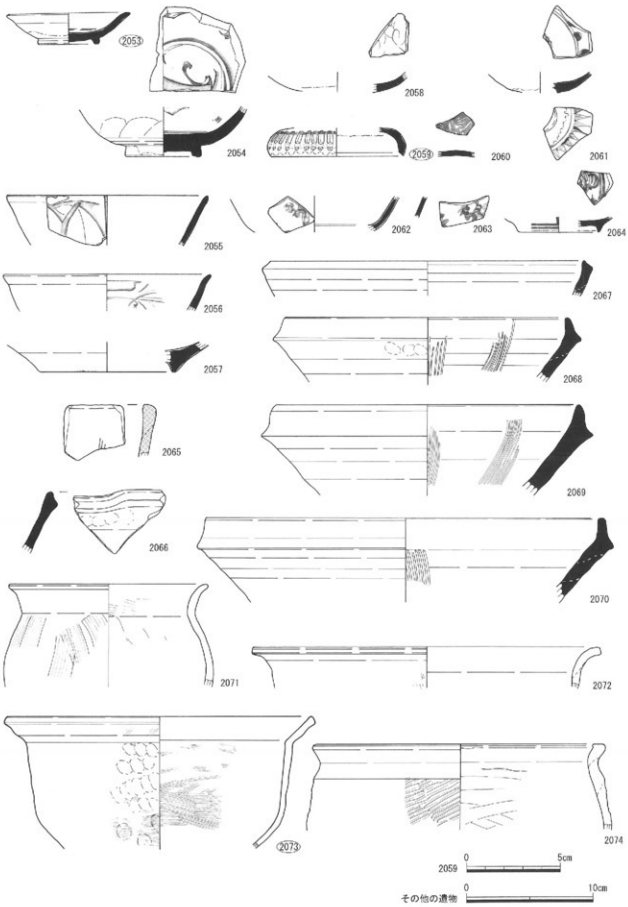
2061は染付皿。外面に芭蕉葉文，内面に花文を絵付けする。畳付部の釉は掻き取る。小野分類染付皿Ｃ群Ⅰ類に相当し，15世紀後葉～16世紀前半の年代が与えられる。2062・2063は染付碗で，外面にアラベスク文を絵付けする。小野分類染付碗Ｄ群Ⅳ類に相当し，15世紀後葉～16世紀前半の年代が与えられる。2064は染付皿で，内面に十字花文とみられる文様を絵付けする。畳付部の釉は掻き取る。小野分類染付皿Ｂ１群Ⅵ類とみられ，15世紀後葉～16世紀前半の年代が与えられる。

2065は瓦質土器擂鉢。口縁端部をわずかに肥厚させる。擂目は細い。胎土に結晶片岩と砂岩を含む。炭素吸着は不良である。2066・2067は東播系の須恵質土器捏鉢。森田編年第Ⅱ期第１段階に相当し，12世紀中葉～後半の年代が与えられる。2068～2070は備前焼の陶器擂鉢。口縁の形状から重根編年Ⅳ Ｂ期に相当し，15世紀代の年代が与えられる。

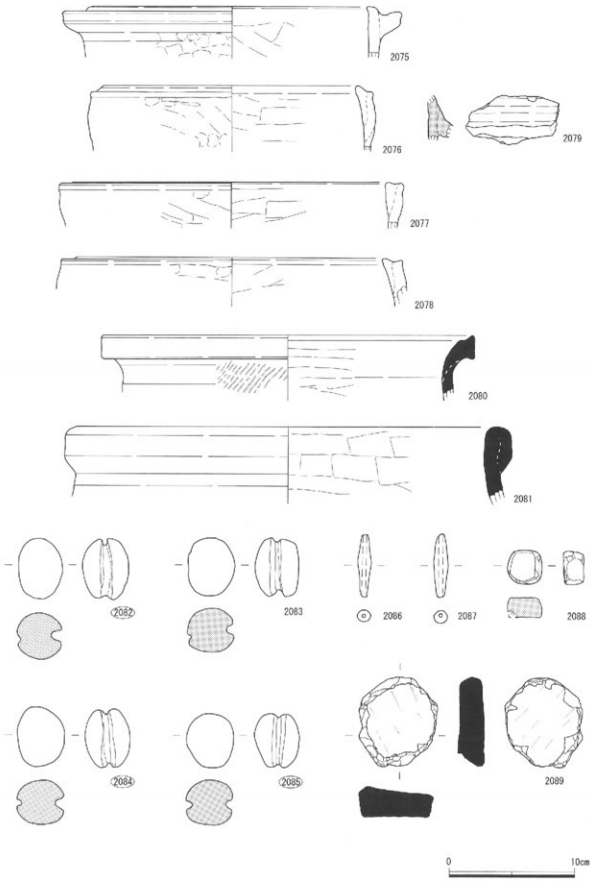
2071は土師器甕。体部外面にタテハケ，口縁内面にヨコハケを施す。胎土に結晶片岩を含む。2072～2074は土師質土器鍋。2072は体部外面にタテハケを施す。胎土に結晶片岩を含む。2073は頸部外面



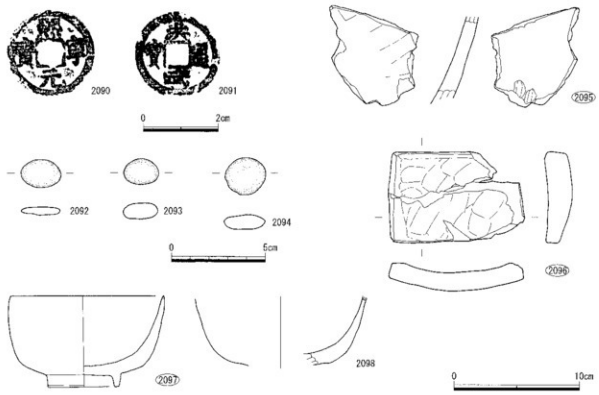
第694図　Ⅱ-1～6区 第１包含層遺物実測図（１）



第695図　Ⅱ-1～6区 第１包含層遺物実測図（２）



第696図　Ⅱ-1～6区 第１包含層遺物実測図（３）



第697図　Ⅱ-1～6区 第１包含層遺物実測図（４）

に斜位のハケ，体部外面上位に指頭圧痕を残し，下位に斜位または横位のハケを施す。体部内面はヨコハケを施す。胎土は精良で，金雲母と角閃石とみられる黒色粒を含む。瀬戸内沿岸～大阪湾岸からの搬入品。2074は，播丹型の鍋で，体部外面に平行タタキを施す。長谷川編年のⅥ期に相当し，15世紀後半～16世紀前葉の年代が与えられる。

2075は摂津Ｃ型の土師器羽釜。胎土は粗く，金雲母を含むことから搬入品と考えられる。古代末期に位置づけられる。2076～2078は土師質土器羽釜。口縁と鍔部は近接し，間に凹線状の浅い溝をつくる。胎土は粗く，金雲母を含む。15世紀後半～16世紀代と考えられる。2079は河内型の瓦質土器羽釜。鍔部上面から口縁にかけて多段状につくる。炭素吸着不良である。胎土に金雲母を含む。河内Ⅲ～Ⅴ型のいずれかに属し，15世紀代の年代が与えられる。

2080は東播系の須恵質土器甕。頸部外面に平行タタキを残す。12世紀代であろう。2081は備前焼の陶器甕。重根編年ⅣＢ期に相当し，15世紀代の年代が与えられる。

2082～2085は瓦質有溝土錘。重量は52.9～59.4ｇである。炭素吸着やや不良。2086・2087は土師質管状土錘。2088・2089は加工円盤。2088は瓦片の転用で，周囲を研削整形する。凹面の布目圧痕，凸面の板ナデ痕を残す。2089は須恵質土器甕の体部片を打ち欠いて作るが，研削整形の痕跡はみられない。

2090は銅銭で，熙寧元寶の真書体。北宋銭で，1068年初鋳。2091は銅銭で，明朝銭の洪武通寶。1368年初鋳。

2092は石英の自然礫で，白碁石とみられる。2093は泥岩，2094は砂岩の自然礫で黒碁石とみられる。いずれも径２㎝前後の扁平な円礫で，加工の痕跡はない。

2095は滑石製の石鍋。外面に炭化物が厚く付着する。外面下位に2条の縦位の凹みがみられる。二次使用による擦痕か。2096は滑石製石鍋の転用品。体部を方形に切断する。図の右側が厚く，本来の口縁にあたると考えられる。鍔部は削除する。元の石鍋は木戸分類Ⅲ－a類前後に相当するとみられ，12世紀代の年代が与えられる。

2097・2098は漆器椀で，ともにⅡ－6区の確認トレンチから出土している。近世の攪乱土層から出土したとみられる。2097は外面黒漆塗り，内面赤漆塗りである。2098は内外面赤漆塗りである。

〈Ⅱ－7～11区　第1包含層出土遺物〉(第698～700図)

2099～2102は須恵器杯。口縁の高いものから掲載している。古墳時代後期と考えられる。

2103～2115は土師質土器皿。回転台成形で，2103・2106は底部外面に回転糸切り痕，2108・2110・2112～2115は回転ヘラ切り痕を残す。2114は板目痕を残す。2111は底部外面の切り離し痕をナデ消す。2116は回転台成形の土師質土器杯。

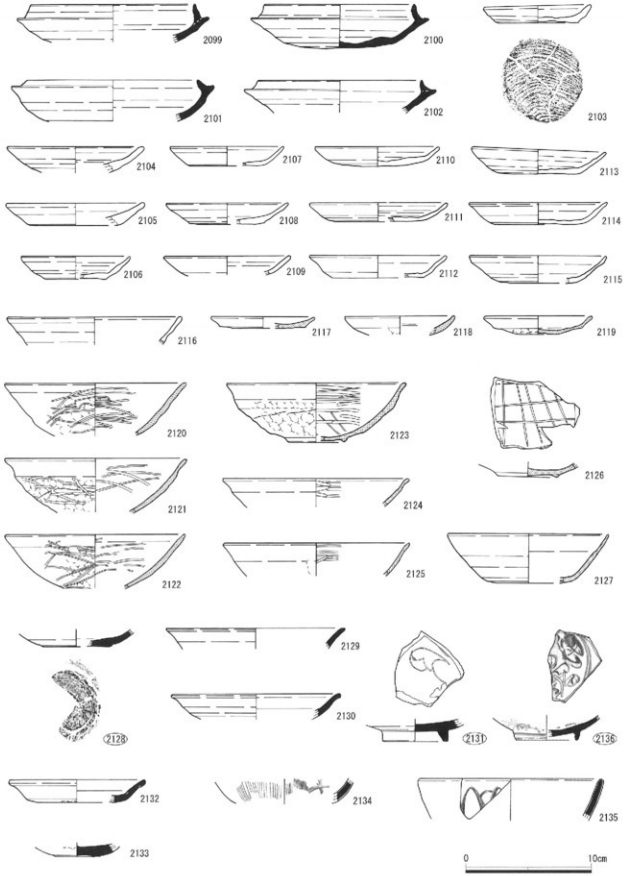
2117～2119は瓦器皿。2117の器高はきわめて低い。底部内面にヘラミガキを施すとみられるが，不明瞭である。胎土に細粒を多く含む。炭素吸着は不良で，非和泉型の可能性がある。2118は体部内面に粗い横位のヘラミガキを施す。炭素吸着はやや不良である。2119は磨耗によりヘラミガキが確認できない。炭素吸着は良好である。いずれも和泉型瓦器のⅣ期に併行か。

2120～2126は瓦器椀。2120～2122は口径13.9～14.5cmを測り，体部内外面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は2120・2122が良好，2121は内面のみ炭素吸着良好で，外面はみられない。2121は体部外面に接合痕を残す。ともに和泉型瓦器椀Ⅲ－2期に相当し12世紀末～13世紀初頭の年代が与えられる。2123は口径14.2cmを測り，体部内面に横位のヘラミガキ，底部内面に平行ヘラミガキ暗文を施す。体部外面に接合痕を残す。炭素吸着やや不良で，酸化炎焼成気味である。和泉型瓦器椀Ⅲ－3期に相当し，13世紀前葉の年代が与えられる。2124・2125は口径14.9cm前後で，体部内面に横位のヘラミガキを施す。2124は炭素吸着不良で，2124は良好である。ともに和泉型瓦器椀Ⅲ－3期とみられる。2126は底部片で，外面に断面三角形状の低い高台を貼り付ける。内面は彫りの深い沈線状の斜格子状ヘラミガキ暗文を施す。和泉型瓦器椀Ⅲ－2～3期か。2127は瓦質土器の杯とみられる。回転台成形で，底部外面の切り離し技法は不明であるが，板目痕を残す。炭素吸着やや不良で，口縁内外面に重焼痕を残す。胎土も黒色化する。

2128は須恵質土器の椀で，底部外面に回転糸切り痕を残す。胎土は精良で，軟質焼成。東播系須恵質土器椀とみられるが，備前焼陶器碗の可能性もある。12世紀後半～13世紀代と考えられる。2129は灰釉陶器碗。型式・時期等は不明である。

2130は白磁皿。内面の底体部境に弱い段をもつ。口縁端部は端反りである。胎土に黒斑を含む。大宰府分類の白磁皿Ⅲ類（12世紀中葉～13世紀前半）またはⅣ－1類（11世紀後半～12世紀前半）とみられる。2131は白磁碗。底部内面にヘラ先による毛彫り文を施す。内面に釉荒れがみられ，文様は部分的に見えない。現存部の外面は露胎である。大宰府分類の白磁碗Ⅴ類またはⅥ類に相当するとみられ，11世紀後半～12世紀前半の年代が与えられる。

2132は青磁皿。化粧土は施さず，底部外面は露胎である。大宰府分類の同安窯系青磁皿Ⅰ類とみられ，12世紀中頃～後半の年代が与えられる。2133は青磁皿の底部である。底部外面の削り残しがわずかな段となる。外面の体部下位～底部は露胎である。大宰府分類の龍泉窯系青磁Ⅲ・Ⅰ類に相当し，12世紀中



第698図　Ⅱ-7～11区 第１包含層遺物実測図（１）

頃～後半の年代が与えられる。2134・2135は青磁碗。2134は体部外面にヘラ片彫の蓮弁文のち縦位の櫛描文を施文し，体部内面ヘラ片彫文と櫛描文を施文する。釉の透明度は高い。大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅰ－6類に相当し，12世紀中頃～後半の年代が与えられる。2135は体部外面にヘラ片彫による蓮弁文を施文する。上田分類Ａ－Ⅰ類に相当し，13世紀後葉～14世紀前葉の年代が与えられる。

2136は染付碗。体部外面に連結輪状の蓮弁帯，底部内面に花弁文を描く。釉表面に黒褐色の小斑をわずかに伴う。畳付部は露胎。小野分類染付碗Ｃ群Ⅴ類，15世紀後半～16世紀前半の年代が与えられる。

2137・2138は東播系の須恵質土器捏鉢。ともに口縁端部を上方に拡張。2137は口縁端部外面に重焼による炭素付着。胎土に泥岩とみられる粒子を含む。ともに森田編年の第Ⅱ期に相当し，12世紀中葉～13世紀初頭の年代が与えられる。

2139・2140は備前焼の陶器擂鉢。2139は中世備前焼で，重根編年ⅣＡ－2期に相当し，14世紀末～15世紀初頭の年代が与えられる。2140は近世備前焼とみられ，乗岡編年近世Ⅰ－Ｃ期とみられ，17世紀初頭の年代が与えられる。2141・2142は備前焼の陶器甕。2141は重根編年ⅣＢ期で，15世紀代に位置付けられる。2142はⅣＢ～ＶＡ期に相当し，15～16世紀前半の年代が与えられる。

2143は土師器甕。体部外面にタテハケ，内面にヨコハケを施す。胎土に結晶片岩を含む。

2144・2145は土師質土器鍋。2144は厚い器壁をもち，口縁端部を方形に作る。口縁外面にヨコハケ，頸部外面以下にタテハケを施す。胎土は粗い。古代末～中世初頭と考えられる。2145は器高が低い浅い鍋に復元できる。胎土は粗く金雲母と花崗岩を含む。

2146・2147は摂津Ｃ型の土師器羽釜。2146は口縁と鍔の端部が丸みを帯びる。体部外面はタテハケ，底部外面は横位の板ナデによって調整する。胎土は粗く花崗岩を含む。2147は口縁と鍔の端部を方形に作る。胎土は粗く金雲母を含む。ともに10～11世紀代とみられる。

2148～2150は土師質土器羽釜。鍔部は退化し，口縁と近接して間に弱い段または浅い溝を有するのみ。いずれも胎土に金雲母を含み，2149は花崗岩を含むため，搬入品である。16世紀代とみられる。

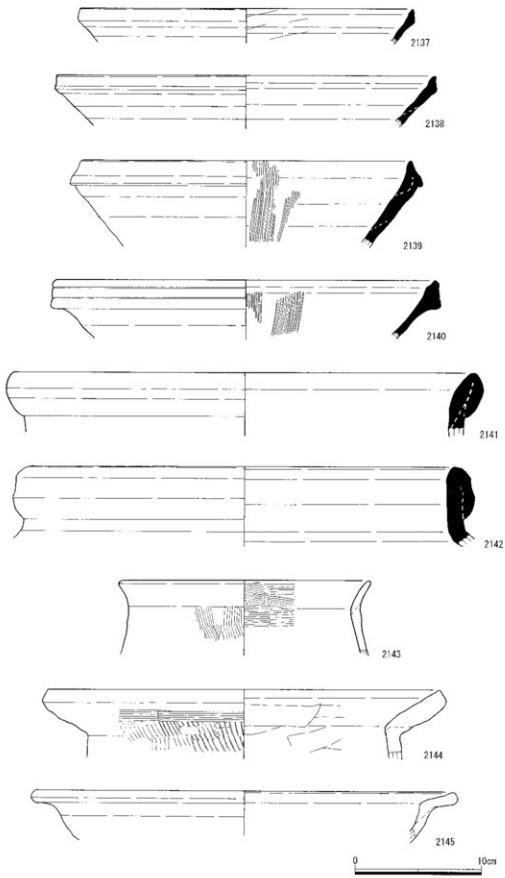
2151は土師質土器円形火鉢の脚部。外側はユビナデによって縦方向の浅い凹線を２条つくり，脚の基部に９個の刺突文を施す。獣足を意識したデザインとも受け取れる。胎土に金雲母を含むことから搬入品と考えられる。2152は瓦質土器の蓋。浅く丸みを帯びた天井部をもち，内面は丁寧なハケののち，断面三角形の低いかえり部を貼り付ける。炭素吸着は良好で，胎土は精良である。経筒または経筒外容器の蓋である可能性があり，奈良の春日大社遺跡に類例がある（菅原1989）。

2153は土師質管状土錘。2154は瓦製加工円盤で，側面を研削整形する。

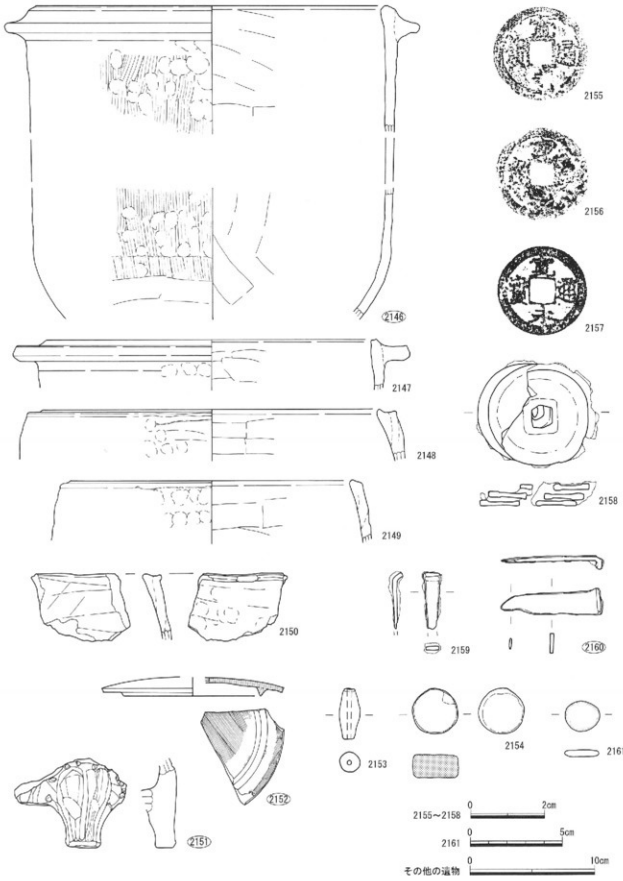
2155～2157は銅銭の寛永通寶。字体から古寛永と考えられる。2155は建仁寺銭で1653年初鋳。2156は鋳造地不明で，1636～1656年の初鋳である。2157は岡山銭（1639年初鋳）に近似するが断定はできない。2158は３点の銭貨が固着している。上は鉄銭，中・下は銅銭である。鉄銭の表面に別の銭が密着した痕跡が残る。鉄錆によって固着しており銭種は不明である。

2159は鉄製の鏃とみられる。頂部を折り曲げて頭部を作る。2160は鉄鎌とみられる。基部を折り曲げ先端部に短い刃を付ける。

2161は黒碁石とみられる。幅1.9㎝の不整円形を呈する扁平な自然砂岩礫で，加工痕はみられない。



第699図　Ⅱ-7～11区 第１包含層遺物実測図（２）

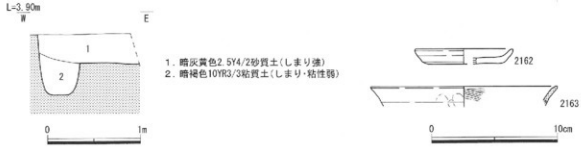


第700図　Ⅱ-7～11区 第１包含層遺物実測図（３）

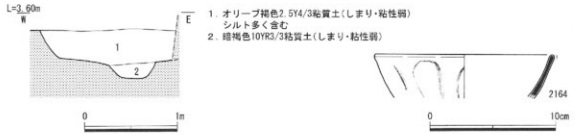
〈Ⅲ地区　第１遺構面〉(第701図)

Ⅲ地区は宮ノ本遺跡Ⅱ地区東端から北東約320mに位置する調査区である。東西6.0m南北3.1mで極めて狭小であるにもかかわらず，遺構は土坑（SK）10基・溝（SD）１条・小穴（SP）44基が密集した状況で検出された。出土遺物は中世を主体とする。

第701図　Ⅲ地区 第１遺構面 遺構配置図



第702図　Ⅲ地区 SK1006遺構・遺物実測図



第703図　Ⅲ地区 SD1001遺構・遺物実測図

第704図　Ⅲ地区 SP1024遺物実測図

土坑６号（Ⅲ地区 SK1006）（第702図）

Ⅲ地区中央部，ｆ20グリッドに位置する，残存長軸96cm 短軸57cm 深度64cm を測る，東西主軸をもつ長方形プランの土坑で，東側は試掘トレンチによって切られる。断面は方形を呈し，西端に不整形の掘り込みをもつ。

遺物は土師質土器片・皿・杯，瓦器椀，白磁片が出土。2162は土師質土器皿。底部外面はナデが施され，切り離し技法は不明である。胎土にチャートとみられる粒子を含む。2163は瓦器椀の口縁部。内面に横位のヘラミガキを施す。炭素吸着は内外面ともやや不良である。和泉型瓦器椀Ⅲ－３期に相当し，13世紀前葉の年代が与えられる。

溝１号（Ⅲ地区 SD1001）（第703図）

Ⅲ地区東端部，ｆ20グリッドに位置する南北主軸の溝で，遺構の南北と東側は調査区外に延びる。検出長3.15m検出最大幅122cm 深度53cm を測り，主軸はＮ４°Ｅを向く。断面は梯形で，検出面から30cm下で東側幅60cm 西側幅30cm 以上の段を有する。土層は２層に分層できる。

遺物は須恵器片，土師質土器片・貯蔵具，瓦器椀，瓦質貯蔵具，備前陶器片，青磁碗，近世陶磁器碗（肥前系）が出土。また埋土下位から人頭大の角礫が４点出土している。2164は青磁碗。外面にヘラ片彫によって鎬を省略した幅広の蓮弁文を施す。上田分類B-Ⅱ類に相当し，14世紀後葉～15世紀前葉の年代が与えられる

小穴20号（Ⅲ地区 SP1024）（第704図）

Ⅲ地区中央部，ｆ20グリッドに位置する．径48㎝ 深度48㎝，不整楕円形の小穴で，南端をSK1006に切られる。

遺物は須恵器蓋，土師質土器片，瓦器皿・椀，肥前系陶磁器皿が出土。2165・2166は須恵器杯蓋。2165は丸みをおびた天井部をもち，口縁部は緩く屈曲して下方に短く延びる。口縁端部は尖り気味に仕上げる。2166は扁平な天井部をもち，口縁部は直角に近い角度で屈曲し下方に延びる。天井部外面に自然釉が厚く付着し，釉には微細な貫入がみられる。2167は肥前系陶器の皿。大きく外方に広がる体部をもち，口縁は短く外反する浅い皿である。化粧土の塗布によるものか，器表面は白色化する。肥前系陶器皿Ⅰ～Ⅱ期に相当するとみられ，16世紀末～17世紀前半の年代が与えられる。2167は小片のため混入の可能性が高いこと，中世遺物を主体とするSK1006に切られることから遺構の時期は古代～中世前半期と考えられる。

参考文献

平安学園考古学クラブ 1986『陶邑古窯址群Ⅰ』
田川 憲 2004「大柿遺跡出土の土師器の編年について」『大柿遺跡Ⅱ』
菅原正明 1979「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集

3．宮ノ本遺跡のまとめ

〈縄文時代の様相〉

本遺跡の縄文時代遺構・遺物は，第4遺構面及び第3遺構面に限定される。弥生時代前期の第2遺構面から約50㎝の深さに第3遺構面，さらに約50㎝下に第4遺構面が存在し，断絶期間の長短は別として隔絶する各時期の遺構群が確認できる。本遺跡の縄文時代の遺構・遺物をまとめてみたい。

出土土器の様相

最も古い遺物は第4包含層出土の後期前葉の磨消縄文土器(14)である。横長の渦巻文をもち，中津式の新しい段階ないしは福田k2式に相当するものと考えられる。しかし単独の出土であり，生活の痕跡は不明である。

主体をなすのは，縄文時代晩期の遺構と遺物である。晩期中葉後半の特色をもつものと，後葉～末の凸帯文土器が出土している。

中葉の土器は，第4遺構面の各遺構と包含層，一部第3遺構面の遺構中に混在しているが，出土量は少ない。深鉢の口縁端部には刻目が施され，口頸部は緩やかに外反し，肩部を器面調整の違いや連続刺突文で表現する。胴部は削りが片立つ。一部二枚貝条痕をもつものもある。浅鉢は磨研土器で口縁端部にリボン状突起をもつものである。家根祥多氏が提唱する中葉後半の篠原式（家根1994）のうち新段階に併行するとみられる。県内では庄遺跡大蔵団地地点（湯浅文1997ほか）や稲荷遺跡（湯浅利1993）などに同時期の類例がある。同遺構面出土の石器は石庖丁状石器などとも称される打製収穫具(中村2003)や五角形鏃（湯浅利1992）といった晩期に通有の特色あるものが出土した。

後葉から末の凸帯文土器は中葉に比較すればやや多い出土量だが十分とは言えない。深鉢で2条凸帯が

確実なSB3001，SB3002，SX3001，SK3004，口縁部凸帯だけのSX3003，SK3018，SK3021，図化可能なものが浅鉢だけのSB3004．SB3005，SB3006があり，SX3004出土の深鉢尻部には爪形文がある(65)。遺構の切り合いから前後関係からみると，検討可能なSB3002→SX3001→SB3001の関係からは土器様相に差異を見いだすのは困難である。口縁部凸帯だけの破片から1条凸帯が主たる段階の存在を主張するのは難しいが，深鉢65の出土したSX3004の土器の検討から前池式段階の可能性を指摘しておきたい。浅鉢には中葉につながる要素がほとんどみられないことから，土器型式的には晩期後葉から末までの間で，特に後半を中心として集落が展開したものと考えておきたい。

徳島県域における凸帯文土器の位置づけは，まとまった出土のある三谷遺跡と名東遺跡（勝浦1994ほか，中村2002ほか）を中心に検討され，最近中村豊氏(2008)が凸帯文期全体をまとめた。勝浦康守氏の分析を中村氏は追認している。勝浦氏の分析は，三谷遺跡等の凸帯文土器を，口縁端部の刻目と口縁部凸帯の位置に着目して，口縁部刻目の施文率が上がり，口縁部凸帯の位置が下がるほど新相を呈するとする。この傾向は蓬賀川式土器を共伴する三谷遺跡に特徴的で，伴出しない名東遺跡ではその傾向は弱まるとされる。一方，大阪湾周辺の凸帯文土器は，船橋式から2条凸帯を巡らし，末期の長原式では，胴部のくびれの形態が変化することはもとより，口縁部凸帯の位置が，よりせり上がり，口縁部に接する位置にことに特徴があるという逆の現象がみられるのである。中村氏も指摘するように(中村2008ほか)凸帯文土器の地域性を抽出すべき段階となっている。

そのような中で宮ノ本遺跡の2条凸帯文土器は，口縁部凸帯の多くが口縁部に接する位置にあり，県内の凸帯文出土状況に比してより長原式的な位置関係にある。しかし全体のプロポーションは，船橋式や三谷遺跡・名東遺跡と同様に口頸部が内湾してくびれる形状がほとんどで，口頸部が直線的に窄まる典型的な長原式は極一部(70)に限られる。地域様相的には吉野川下流域や大阪湾とは異なり，むしろ紀伊水道を挟んだ和歌山沿岸域との類縁性を検討する必要があろう。

ほかに注目すべき土器として孔列土器（59）がある。凸帯下に3孔確認できる。焼成前に外面から内側に向けて穿孔・貫通されたものである。孔列（文）土器は九州地方や山陰地方に縄文時代晩期中葉から出現して分布し，凸帯文期まで系譜が追える。瀬戸内では南溝手遺跡（岡山県）で凸帯文土器2例に確認できる。起源については主に朝鮮半島無文土器との影響関係のなかで論じられている。孔は本遺跡のように貫通する場合と非貫通の場合があるが，北部九州域や南溝手遺跡は内から外に貫通させ，山陰地方は内面非貫通の例が多い。南部九州域は貫通・非貫通にかかわらず，大半の例が外面から作業している（光永1995，千2008）。

遺構

①住居遺構の様相

西日本の縄文時代の集落研究は，近年盛んに集成等が行われているが，徳島県域の縄文時代の住居遺構は，管見の限りでは本遺跡を除き51箇所を数える。この中には岩陰遺跡や洞窟遺跡を含み，調査・整理の段階で住居跡との認定を躊躇した不明遺構(SX)のなかで規模や出土遺物，埋土の状況などから住居遺構と見なしたものも含まれる。これは中四国地方の縄文時代住居遺構の特色等を考慮してのことである（山田2002ほか）。時期別にみると早期2，前期2，中期3，後期45，晩期3である。後期に集中して多いのは矢野遺跡（徳島市）における後期初頭の遺構面に屋外炉が多く，適切な規模の竪穴遺構を多く住居遺構と見なしたからである。

本遺跡の竪穴住居跡は第3遺構面の8軒である。先に述べた観点から第4遺構面の不明遺構3軒，第3遺構

面の不明遺構6軒のうち，住居遺構として捉えることが可能なのは第4遺構面のSX4003，第3遺構面のSX3001・3005と現段階では考えている。これは炉，柱穴といった屋内施設を具備した竪穴住居跡8軒と比較すれば見劣りするが，炉なり柱穴の可能性をもつ3軒はより住居に近い位置づけが出来ると考えられるからである。何れの住居遺構も4～5本柱が認定ないしは想定でき，SB3004は周壁溝も確認されるなど，弥生時代の竪穴住居と比しても遜色ない構造である。長期的な居住を意図するものと捉えることができる。

また，中四国近畿の縄文時代集落の特色を大野薫氏は①集落が少なく規模が小さい②山地から海浜部，平野部への立地の拡大化③環状集落が認められないとした上で1～2軒ないしは3～4軒が1時期の集落を構成すると一般化した（大野2001）。その指摘は徳島県域でも矢野遺跡第6遺構面を除いて首肯できる。宮ノ本遺跡の第3遺構面も住居遺構が集中した状況である。しかし切り合いが少なく，出土土器検討の結果，晩期後葉～末のうち後半期を中心に展開したとの想定であるが，一般的な縄文集落の状況よりも，定着性の高い住居遺構が調査区外も含めて同時存在を推定できると考えられる。

②本遺跡の位置づけなど

住居遺構の出土遺物で，触れておくべきなのはSB3004で出土したコメと疑われる炭化遺物である。床面近くの埋土洗浄で出土したとはいえ，たった1点であり，しかも確実なものとは言い難いため(註1)，積極的な位置付けができるものではないが，可能性としての縄文文化的生活様式から弥生文化的生活様式の変遷について考えてみたい。

県域の晩期に属する遺跡は28遺跡である。中葉の遺物が出土しているのは庄遺跡（徳島市），稲持遺跡・大柿遺跡（東みよし町）等8遺跡，後葉は亀浦遺跡・光勝院寺内遺跡（鳴門市），名東遺跡（徳島市），三谷遺跡（徳島市）等16遺跡である。弥生時代前期の遺跡は15遺跡(近藤2001)で，このうち前半の遺構・遺物が出土しているのは眉山北西麓に展開する三谷遺跡と南庄，庄遺跡などの庄遺跡群だけである。それに続く前期後半ないし末の出土遺物がある遺跡で凸帯文土器が出土しているのは，名東，黒谷川郡頃，大柿遺跡と本遺跡である。近畿地方も長原式に後続するのは弥生時代前期中葉といった地域が多くある。徳島県域においても凸帯文期は弥生時代前期前半と重なる部分がかなりあるのではないか。三谷遺跡は最終末の凸帯文土器をはじめ縄文文化の石器などと同時に弥生時代前期前半の土器や籾圧痕が出土し，庄遺跡群の弥生文化集団の隣で縄文文化集団が暮らしていたと考えられている。磨製石庖丁に代表される大陸系石器も眉山北西麓を中心とする地域に限られる(註2)。

凸帯文期のコメ自体は，九州や瀬戸内でも発見されており，取り立てて珍しいものではない。宮ノ本遺跡では，縄文文化的生活様式に固執した三谷遺跡の場合と異なり，凸帯文土器を使用しながら稲作技術は取り入れ，生活を安定化させた上で，弥生前期末段階で弥生土器文化を受容したのではないかと想像を逞しくするところである。吉野川流域の黒谷川郡頃遺跡や大柿遺跡については稲作技術自体の導入時期は別としても，土器文化については同じような事が考えられるのではないか。そうすれば，打製石庖丁を代表とする縄文系石器のいわゆる「復活」も，「連続」としてスムーズに理解できるのではないだろうか。根拠には未だ乏しいが，そのような枠組みの仮説を補強する資料の増加に期待したい。

（湯浅）

註1　徳島県立博物館主任学芸員の茨木靖氏によると，観察の結果は積極的にコメとは言い難いが，よく似たイネ科植物と比較すると消去法でコメになるという。それで「コメと疑われる炭化遺物」と表現することとした。

註2　吉野川上流域の大柿遺跡（旧三好町）や旧三加茂町域で，磨製石庖丁の出土が知られる（原2002）が，庄遺跡群における出土状況とは異なり，客体的なものと考えている。

参考文献

泉 拓良 1990「西日本凸帯文土器の編年」『文化財学報』第8集，奈良大学文学部文化財学科

大野 薫 2001「近畿・中国・四国地方における集落変遷の画期と研究の現状」『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会

勝浦康守 1994「徳島市三谷遺跡-徳島の縄文晩期突帯文土器の終焉」『文化財学論集』

1997『三谷遺跡―徳島市佐古配水場施設増設工事に伴う発掘調査』徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会

2000「徳島の突帯文土器と遠賀川式土器－三谷遺跡・名東遺跡資料の検討－」「突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会

栗林誠治他 2002『大柿遺跡Ⅰ』（財）徳島県埋蔵文化財センター

近藤 玲 1999「徳島の弥生時代－縄文時代から古墳時代へ」『眞朱』第3号 （財）徳島県埋蔵文化財センター

千 羨幸 2008「西日本の孔列土器」『日本考古学』第25号 有限責任中間法人日本考古学協会

徳島大学埋蔵文化財調査室編 1998『庄・蔵本遺跡1―徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査―』

中村 豊 2000「阿波地域における弥生時代前期の土器編年」『突帯文と遠賀川』土器持寄会

2001「西日本における縄文時代農耕について 四国瀬戸内側」古代学協会四国支部第15回大会発表資料

2001「四国地方における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会

2002「縄文から弥生へ―眉山北麓遺跡群の分析から―」『論集徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会

2003「結晶片岩製収穫具と打製石斧」『古代文化』55-12 （財）古代学協会

2006「四国地域の亀ヶ岡式土器」『考古学ジャーナル』第549号 ニュー・サイエンス社

2008「東部瀬戸内・紀伊水道沿岸地域における凸帯文土器―徳島地域を中心に―」『古代文化』60-3 （財）古代学協会

原多賀子 2002「徳島県出土の磨製石庖丁について」『論集徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会

前川直江編 1998『庄遺跡Ⅱ―大蔵省蔵本団地宿舎新営工事(第２期工事)関連埋蔵文化財発掘調査報告―』（財）徳島県埋蔵文化財センター

光永真一 1995「「孔列文土器」について」『南溝手遺跡Ⅰ』岡山県教育委員会

湯浅利彦 1992「五角形鏃小考―西日本における縄文時代晩期を中心とした打製石鏃の素描―」『眞朱』創刊号（財）徳島県埋蔵文化財センター

1993「阿波の縄文人―稲持遺跡を素材にして」『鳴門史学』7

2002「縄文時代」『論集徳島の考古学』徳島考古学論集刊行会

湯浅文則他 1997『庄遺跡Ⅰ―大蔵省蔵本団地宿舎新営工事(第１期工事)関連埋蔵文化財発掘調査報告―』（財）徳島県埋蔵文化財センター

家根祥多 1981「近畿地方の土器」『縄文文化の研究4縄文土器Ⅱ』雄山閣

1984「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所

1994「篠原式の提唱」『縄紋晩期前葉―中葉の広域編年』平成４年度科学研究費補助（総合A）研究成果報告書

山田康弘 2001「中国地方における縄文時代集落の諸様相」『列島における縄文時代集落の諸様相』縄文時代文化研究会
2002「中国地方の縄文集落」『島根考古学会誌』19島根県考古学会

〈弥生時代の様相〉

宮ノ本遺跡出土の弥生土器は，形態や文様などの特徴から概ね前期から中期にまたがる時期の遺物と考えられる。

前期のグループは，頸部から体部上位にヘラ描平行沈線や刻目凸帯をもつ広口壺，頸部から体部上半にヘラ描平行沈線をもち口縁が外反する甕，逆L字形の口縁をもつ甕，紀伊型甕が出土する。壺・甕を問わずヘラ描き沈線が多条化すること（117・216），削り出し凸帯が消滅し代わって貼付凸帯が出現していること（116・262），逆L字形口縁の甕が出土していること（264）などから，前期でも最終末段階に位置づけられる資料である。広口壺のうち117と261の口縁は上方への開きが小さいが，遺跡全体では232や361のように大きく開く口縁をもつ個体が多い。貼り付け凸帯を施す土器は少ないが，116や214のように体部に付けるものが多く，232や262のように頸部に貼付けたものは少ない。紀伊型甕（120）は，体部外面に横位または斜位のヘラケズリを加え，頸体部の境ににぶい稜をもつ前期末のもので，他の遺物の時期とほぼ対応する。SB2004・2007，SK2018・2048・2078・2104・2105・2107が前期末に含まれる遺構である。また大型の甕の破片や完形のミニチュア壺が出土した土器溜まりSX2020もこの時期に含めてよいだろう。

一方，中期のグループは直線文や波状文を中心とする櫛描文の中に簾状文や疑似流水文（111），扇状文が存在することや，体部が長胴化した甕（245）が出現すること，供伴する紀伊型甕（162・163）の特徴が前期末段階と大きく変化していないなどの点から，これら中期の一群は前期末の土器群に続く中期初頭の畿内第Ⅱ様式の併行期に位置づけられると考える。184や242の広口壺は，前期の系譜を概ね受け継ぐ。口縁端部を平坦に仕上げた広口壺（110・189）は，先行する時期にも存在（261）するが，中期初頭に増大するとみられSK2031・2035・2092やSP2225から出土している。SK2035から出土した229は，この中では唯一全形が復元できる個体である。甕と同様に体部が長胴化して紡錘状（卵形）を呈し，頸部は短い。この時期に属する遺構は，SB2005・2006・2011，SX2004・2013・2018・2019，SK2031・2034・2080・2091・2092がある。またSX2012も175の甕の形態から中期初頭のこの時期に下る可能性がある。上述した以外のSB2008・2009・2010，SX2005・2006・2010など，詳細時期を特定できる遺物を欠く遺構についても，時期的には前期末から中期初頭の範囲の中にすべて収まると思われる。

これに対して，包含層出土の遺物のなかには明らかに中期初頭より時期が下るものが含まれる。その一つがサヌカイト製の打製石鏃である。図示した21点の石鏃の中に平基式や凹基式に混じって有茎式が6点含まれているが，この形態の石鏃は徳島県下では少なくとも第Ⅲ様式以降でなければ出現しない。土器では口縁端部が肥厚または上方に拡張し大きく開く壺（294・295）や，口縁が水平に近い角度で外方にのび端部を上方に拡張した甕（320）などは明らかにⅣ様式期の土器である。

今回の調査で検出した遺構は前期末から中期初頭までに限定されるが，下層では縄文時代晩期に遡る遺構群が検出されていること，1km 上流の大原遺跡で弥生時代末から古墳時代の遺構・遺物を検出したことなどを考慮すると，宮ノ本遺跡の弥生時代が前期から中期初頭までで終息したのではなく，時間の

経過とともに地点を変えながら周辺の沖積地上に存続した可能性が高いと考えられる。（久保脇）

参考文献

定森秀夫他 2005『庄（庄・蔵本）遺跡 ―徳島大学蔵本団地体育館建設に伴う発掘調査報告書―』
徳島大学埋蔵文化財調査室
中村　豊　2000「阿波地域における弥生時代前期の土器編年」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会
林田真典 2006『芝遺跡 ―海部小学校体育館・校舎建設に伴う発掘調査報告書―』海部町教育委員会
北条芳隆編 1998『庄・蔵本遺跡1 ―徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査―』徳島大学埋蔵文化財調査室

〈古墳時代・古代・中世・近世の様相〉（第705図）

宮ノ本遺跡の古墳時代および古代・中世・近世の各時代の遺構は，すべて第１遺構面で検出されたことから，様相をまとめるにあたり時期を６期に分けて記述する。

第１期（古墳時代後期）

古墳時代後期を第１期とする。第１期の遺構数はきわめて少ない。確実に古墳時代に遡る遺構は，Ⅰ－７区中央部南側とⅡ－１区東部南端で各１棟ずつ検出された竈を伴う方形の竪穴住居のみで，時期は６世紀後半～７世紀前半である。ともに桑野川寄りの遺跡南辺にあり，それぞれ約100m離れて位置する。検出面の標高は3.2～3.4mで，弥生時代に相当する第２遺構面が標高3.5m前後であることと比較しても低い。住居の周囲や標高が高い遺跡北側で第１期の遺構が検出されていないが，その要因のひとつとして後世の遺構面削平の可能性が考えられる。当該期の遺物が散見されることからも，ある程度の遺構が存在したことが窺えるものの，2棟の住居が約100mの間隔をおいて位置し，それぞれ周囲に同時期の遺構を伴わない状況からみると，住居が密集する集落景観であったとは考えられない。Ⅰ地区の住居は床面直上から羽口や鍛造剥片，粒状滓・棒状切片が出土していることから，鍛冶工房であった可能性が濃厚である。Ⅱ地区の住居ではそのような工房的性格を裏付ける遺物の出土はみられないが，ともに特殊な性格を帯びていた可能性は高い。

第２期（奈良～平安時代前半期）

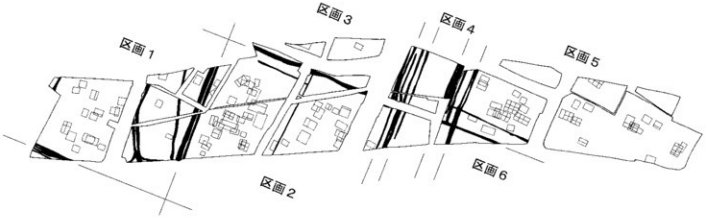
奈良時代～平安時代前半期まで遺構遺物ともに少なく，この時期を第2期とする。Ⅰ地区ではⅠ－8区SK1384・1385では須恵器杯蓋や放射状暗文を伴う土師器杯が出土している。この遺構は東西に7基並ぶ長方形土坑の一部で，土壙墓の可能性をもつ。このほか，SK1385・1413・1494がこの時期に収まる可能性があり，Ⅰ地区でも北東寄りに位置する傾向が窺える。Ⅱ地区では本期に所属する遺構は確認できない。

第３期（平安時代後～末期）

黒色土器を伴う12世紀前後を第3期とする。本時期は遺物・遺構が増加し始める時期で，底部外面に回転ヘラ切り痕を残す土師器の杯や高脚高台付皿・杯，黒色土器椀（A・B類とも）・台付椀（1921），灰釉陶器，摂津C型羽釜，東播系の椀・捏鉢・甕，十瓶山系須恵質土器貯蔵具などの遺物がみられる。

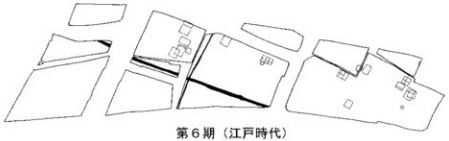
第3期の遺構は単純に出土遺物から検索すると多く挙げることができるが，中世遺物を共伴する事例が多いことから確実視されるものは少ない。建物・柵列・溝のうち，Ⅱ地区西半部のSA1009・1012・1014・1017・SG1007・SD1024，東半部のSA1029・1030・1038・1061などが第3期の可能性をもつ。なかでもSA1009は，東西5間，南北4間，床面積92.0㎡（庇部を含め106.9㎡）を測る大型の総柱建

第３期（平安時代後～末期）



第４期（鎌倉時代）

第５期（室町時代）



第６期（江戸時代）

第705図　宮ノ本遺跡 古代～近世 遺構変遷図

0　100m

物で，本遺跡最大の建物である。Ⅰ地区ではこの時期と考えられる建物は確認できなかった。このことから，本遺跡における古代以降の本格的な開発はⅡ地区を中心に始まり，SA1009はその規模から開発の中心的施設であったと考えられる。

本地域一帯は竹原牧のち竹原荘城にあたる。関白太政大臣藤原忠実の日記である『殿暦』には，竹原牧は忠実が藤原師実から受け継いだ所領で，1118（元永元）年阿波国司藤原尹経により押領されたとある。また竹原荘は，1157（保元 ）年までは左大臣藤原頼長領であった（三好他2000）。以上の史料から，立荘時期は不明ながら12世紀初頭には荘園としての体を成していたことが窺える。第3期は文献に現れる荘園の時期とリンクしており，開発の開始期が考古・文献両面から窺える例として注目される。

第4期（鎌倉時代）

第4期はⅢ～Ⅳ期の和泉型瓦器椀を伴う時期で，12世紀後葉～13世紀代を中心とする。爆発的に遺構・遺物が増加し，遺構は遺跡西側へも大きく拡がる。

遺構としては，東西あるいは南北に走る区画溝が開削され，方形区画の屋敷地を形成する。第4期として確認できる区画溝のうち，Ⅰ地区のSD1001～1004・1011・1027・1028・1055・1056・1059，Ⅱ地区のSD1002・1004～1007・1009・1012～1015・1033・1034・1036・1053・1059・1062は，主軸が正方位～西10°の間に収まり直線的に延びる。この中でⅠ地区SD1001～1004・1033・1034・1036・1027・1028・1056，Ⅱ地区SD1002・1005・1007・1009は比較的規模が大きく，メインの区画（以下，大区画と呼称）を形成するものと考えられる。Ⅰ地区では南北90m東西95mの方形区画が復元できる。

Ⅱ地区では泉八幡神社の正南で，複数の南北溝によって東西を画した幅20～35mの区画が復元できる。区画溝に顕著な時期差は認められない。区画内部では第4期の遺構は疎らで，建物は17世紀まで設置されないことから，3世紀以上におよぶ強い規制の存在が窺われ，単なる屋敷地区画とは言い難い。泉八幡神社の起源は棟札によって1533年の再興までしか辿れず明らかでないが，参道あるいは道路であった可能性も考えられる。Ⅱ地区では，東半部のⅡ－7～11区で規模の大きな区画溝は検出されておらず，Ⅰ地区のような大区画は看取できない。

大区画内部を分割する溝としては，Ⅰ地区SD1011・1055・1057・1059，Ⅱ地区SD1053・1059・1062など幅1m未満の溝が想定される。これら区画溝と建物の配置から，屋敷地4区画と神社前1区画の計5区画が想定でき，屋敷地区画2と4は複数に分割できる。

このほか，Ⅰ－3～5区に位置するSD1024・1025・1038は主軸方位がN32°W，SD1029はN18°Wであり，大区画とは異なる方位をもつ。SD1025とSD1038は南端部で東西方向に屈曲することから，区画を目的とした溝と考えられる。本溝の年代は出土遺物から概ね13世紀代で，大区画の溝と顕著な時期差がみられないが，遺構の切り合い関係および第1遺構面を若干掘り下げて検出したという経緯から，大区画直前に設けられた一段階古い区画の可能性がある。このように方形区画屋敷地が連続または隣り合う集落景観は，本県では黒谷川宮ノ前遺跡（板野町）・町口遺跡（阿波市）などで確認されている。四国では高知県田村遺跡・香川県空港跡地遺跡・愛媛県久枝遺跡などのほか，佐賀県本村遺跡，山口県下右田遺跡，大阪府日置荘遺跡，奈良県法貴寺遺跡，滋賀県西田井遺跡・横江遺跡，愛知県

第2表　第4期の建物規模

	Ⅰ地区		Ⅱ地区	
最大建物	56.7㎡		41.6㎡	
建物規模	棟数	%	棟数	%
50㎡台	2	3.3	0	0.0
40㎡台	3	4.9	2	6.7
30㎡台	1	1.6	3	10.0
20㎡台	12	19.7	7	23.3
10㎡台以下	43	68.9	18	60.0
合　計	61	—	30	—

※面積は庇部含む

阿弥陀寺遺跡・室遺跡など多くの事例を見つけることができ，概ね13～16世紀における西日本～中部日本の沖積平野では普遍的な集落景観であるといえる（島田2008）。黒谷川宮ノ前遺跡・町口遺跡は15～16世紀代の方形区画屋敷地であり，13世紀前後まで遡る本遺跡の方形区画屋敷地は県下で最も古く位置付けられ，他地域と比較しても最も早い時期に属するものといえる。

本遺跡ではⅠ地区で73棟，Ⅱ地区で61棟の掘立柱建物が確認されたが，第４期に属するとみられる建物はⅠ地区で61棟，Ⅱ地区で30棟を数える。Ⅱ地区で数が少ないのは，遺構密度が高く混入が多いこと，弥生時代から近世まで時期幅が広く，時期の特定が困難なことによる。建物主軸は正方位より西10°前後に傾くものが主体であるが，Ⅰ地区SA1038・1040・1044のように東23～42°振る一群もある。建物主軸や構造からグルーピングや時期の細分が可能であろう。

Ⅰ・Ⅱ地区の建物規模を比較すると（第２表），Ⅰ地区で床面積（庇部含む）50㎡台超の建物２棟あるが，30・40㎡台の割合はⅡ地区が優勢である。10㎡台以下の小規模建物は両地区ともに過半数を占める。建物規模からはⅠ・Ⅱ地区で顕著な差は見いだせず，政所や荘官の館などの中心的施設があるとすればⅡ地区北の微高地部分であろうと推測する。

出土遺物としては，供膳具では底部回転糸切りの土師質土器杯・皿，京都系土師器皿の模倣品，和泉型瓦器椀・皿，紀伊型瓦器椀，青磁碗・皿，煮炊具では京都山城地域産の瓦質羽釜，河内型須恵釜，紀伊型鍔付鍋，調理具では東播系擂鉢，貯蔵具では亀山焼甕，東播系甕，常滑焼甕，などが出土する。また吉備系土師質土器椀（1219・1346），備前焼碗（866・1475，1025と2128は可能性あり）が出土している。これらの出土遺物から第4期の中心年代は概ね13世紀とみられる。

以上のことから，少なくとも4区画の屋敷地をもち，延べ90棟を超える建物群が営まれたこと，豊富な搬入土器があること，ステイタスを示す京都系土師器皿（模倣品）が出土することから，本遺跡が竹原荘において政経の中心的な集落であったことを示唆している。

さて第４期の終期であるが，14世紀代の遺物としてⅣ－４期以降の和泉型瓦器椀，重根編年ⅡB～Ⅲ期の備前焼，森田編年第Ⅲ期第２段階以降の東播系擂鉢などが指標となるが，いずれも出土量が僅少であるか皆無であるため，14世紀には集落は一時衰退したと考えられる。

竹原荘関連文書では，1163（長寛元）年に二品家が当荘鎮守である八枠神社に貢納船の安全などを祈願しており，遺構・遺物が増加する第4期直前の記事として注目される。また，1209（承元三）年の記事により，当荘は後白河院から院第二皇子である前御室門跡守覚法親王ののち院第八皇子尊性法親王に伝領されたとみられる。1302（乾元元）年昭訓門院院庁年預に補任された葉室長隆が，料所として当荘を与えられる。1306（嘉元四）年には，室町院領内の安楽光院領から宗尊親王・亀山院のち西園寺実氏孫の遊義門院領となり，預所は葉室長隆，領家は西園寺実氏妻の今林准后とある。1351年には細川頼春が本荘の本郷地頭職を紀伊の安宅須佐美一族に安堵していることから，14世紀後半には本家である皇室は当荘の支配権を喪失していたとみられる（三好他2000）が，考古学的なデータからは14世紀前半の動きはきわめて低調であるといえ，史料に見えるより早く院伝領地としての実態を失っていた可能性がある。

第５期（室町時代）

室町時代になるとⅠ・Ⅱ地区とも遺構・遺物数を減らす。とくにⅠ地区では本期以降の遺構は皆無に近く，徐々に水田化したものと考えられる。

Ⅱ地区では，Ⅱ－8～10区でL字に屈曲する区画溝SD1067が検出された。幅約3.8m深度1.7mを測る大規模な溝で，かつL字に屈曲し流水の痕跡はないことから屋敷地の区画溝と考えられる。屋敷地規模

は，泉八幡神社が鎮座する丘陵を西限と考えると一辺70m規模の方形区画が復元できる。屋敷地は神社がある丘陵を除いて本遺跡では最高所を占める。

SD1067から出土した，重根編年ⅣA期の備前焼甕・擂鉢，上田分類C・D類の青磁碗，長谷川編年Ⅳ期の播磨型羽釜などから，遺構の開始期は14世紀後半頃と考えられる。溝の埋土観察から少なくとも1回の再掘削が認められる。終期は，備前焼ⅣB－3期の擂鉢やⅤ期の甕，細蓮弁文を伴う青磁碗，鍔部が退化した土師質土器羽釜などから，15世紀後半～16世紀代にかけて埋没したものと考えられる。

本屋敷地の性格であるが，溝の規模や立地から当該期における集落における有力者の屋敷地であると考えられる。15世紀前後は，荘官もしくは地頭が在地領主化する時期であるが，これらの館は平地城館であり，規模の大きな堀や土塁で囲繞する。本屋敷地の区画溝の規模は，黒谷川宮ノ前遺跡や町口遺跡と同規模であることから，名主クラスの屋敷地と考えられる。文献資料では，細川頼春が本郷地頭職を紀伊の安宅須佐美氏に安堵した時期が，区画溝開削時期と重なる。15世紀または16世紀には清原氏が本遺跡の北東500mにある本庄城に入る。築城年代は不明であるが，室町後期の政綵の中心は本庄城であり，本遺跡は領内に点在する一集落であったと推測できる。

第5期に属する可能性が高い建物は，出土遺物からⅡ地区SA1023・1025・1026・1033・1037・1055が挙げられる。いずれも方形区画屋敷地に近いⅡ地区の東半部に位置し，主軸は正方位～西8°の間に収まる。屋敷地内で第5期の建物は検出していない。

第6期（江戸時代）

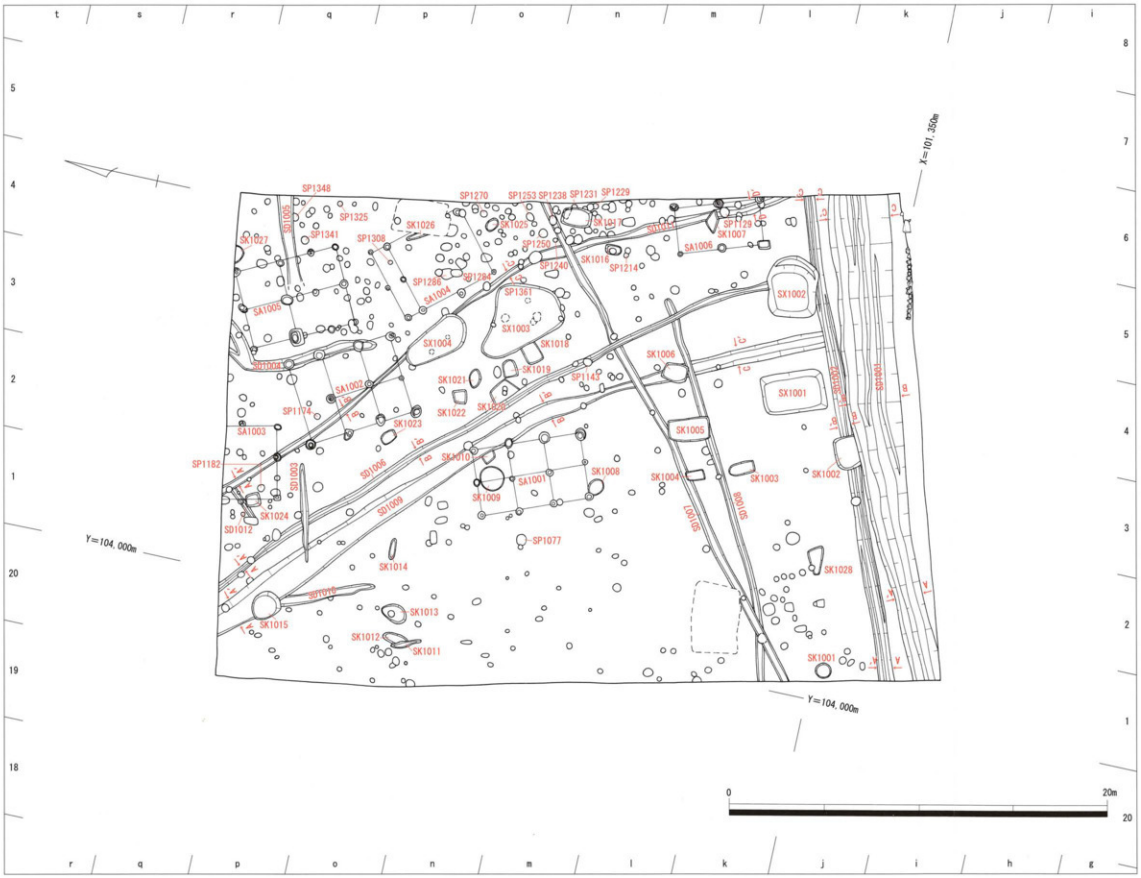
中世末になると第5期の屋敷地区画溝は埋没し，近世にかけてⅡ地区を中心に少数の掘立柱建物と溝・土坑が営まれる。溝はⅡ－2・4区を東西に貫くSD1001があり，西への延長線上はⅠ－10区SD1060に繋がる。開始期は染付碗や備前焼から15世紀代に遡る可能性があるが，埋没時期は出土銭や陶磁器の年代から17世紀中葉と考えられる。第4期の溝SD1002とほぼ同方位で，約3m北に位置することから，第4期の地割を踏襲しているものと考えられる。本地割は現在Ⅱ－1・2区間およびⅠ－8・11区間に生活道路として継承されている。またⅡ－4・5区SD1035，Ⅱ－7区SD1063も本期の溝で，正方位を指向する。

建物は，これまで遺構分布が疎であった泉八幡神社前のⅡ－3区で，SA1002～1006の5棟が集中して建てられる。このほかSA1016・1024・1028・1039・1041・1042・1046・1059が出土遺物から第6期の可能性をもつ。これらは正方位の主軸をもつものが多く，SA1016・1042を除いて正方位±3°の範囲に収まる。建物配置は，前述のSA1002～1006が一群として捉えられるほか，Ⅱ地区東端部のSA1039・1041・1042・1059の4棟が集中し，他は距離を置いて散在する傾向にある。

第6期の溝や建物から出土した遺物に，輸入磁器の青磁碗や染付，鍔部が退化した土師質土器羽釜などがみられることから，本期の開始を中世末期と考えることができる。SD1002および上記の建物から出土した近世遺物は17世紀代が主体であり，概ね18世紀には衰微する。近世後半期にはⅡ地区西半部以西は水田化するが，対照的にⅡ地区東半部は近世遺物を含む掘り込み（SX1013など一部の遺構を除き撹乱として取り扱い）が多くみられることから，現代に至るまで居住域として利用されたものと考えられる。（島田）

参考文献

島田豊彰 2008 「吉野川流域における中世集落の様相」『真朱』第7号 （財）徳島県埋蔵文化財センター
三好昭一郎他 2000 『日本歴史地名大系37巻 徳島県の地名』平凡社



第706図　1区 第1遺構面 遺構配置図

第Ⅳ章　大原遺跡の調査成果

1. 基本層序（第７図）

大原遺跡は宮ノ本遺跡の700m西に位置する。桑野川が北西から北東に流れを変える屈曲部にあたり，三日月湖がみられ，北東には後背湿地が形成される。旧状はほぼ水田で，周辺に宅地が散見される。

１区は三日月湖の南約150mに位置し，現地盤高約3.7mを測る。耕作土直下が第１遺構面で標高約3.5mを測り，黄褐色2.5Y5/3砂質土をベースとする。遺構埋土は暗オリーブ褐色砂質土などの暗色土層である。調査時には２面を検出したが，検討の結果１面に整理した。遺構面ベース層以下はオリーブ褐色・にぶい黄褐色の砂質土が堆積し，標高約2.8mで非常に硬くしまる黒褐色砂質土層に達する。これは宮ノ本遺跡でも確認された黒色土層と同質とみられ，付近一帯に一様に堆積する土層と考えられる。

三日月湖内側に位置する２区の現地盤高は約3.1mである。耕作土・床土層の直下が第１遺構面で，標高3.0m付近に位置し，にぶい黄褐色粘質土をベースとする。水田面で，柱穴等は検出していない。以下の土層は，第４層が褐色砂層，第５・６層がにぶい黄褐色砂質土層，標高2.3m以下が第７層で脆弱な褐色砂層である。

１・２区とも地下水位が高く，遺構底部から水が滲出する状況であったが，有機物に対しては適した環境であったとみえ，木質遺物の遺存状況は良好である。

2．遺構と遺物

〈1区　第1遺構面〉（第706図）

遺構数は，掘立柱建物（SA）６棟，土坑（SK）27基，溝（SD）12条，不明遺構（SX）４基，小穴（SP）368基に上る。

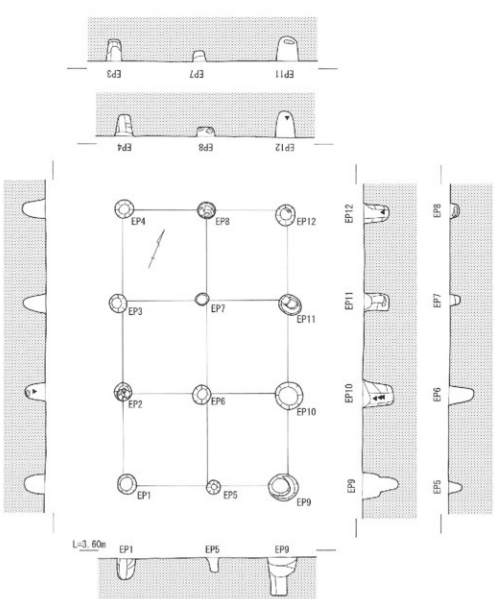
掘立柱建物1号（1区　SA1001）（第707図）

１区中央部，m～o２・３グリッドに位置する。東西２間（3.4m）南北３間（5.8m）床面積19.7㎡，12基の柱穴をもつ総柱建物で，建物主軸はN22°Wを向く。柱穴は円形を呈し，径30～64cm，深度20～80cmを測る。EP２・５・８・11では根石を検出した。遺物は弥生土器片，土師質土器片・鍋・羽釜，近世陶磁器片，染付片，近世瓦片などが出土しているが，いずれも小片のため実測できなかった。出土遺物から近世の遺構と考えられる。

掘立柱建物２号（１区　SA1002）（第708図）

１区北側，o～q２・３グリッドに位置する。東西２間（4.3m）南北３間（5.8m）床面積24.9㎡，11基の柱穴をもつ掘立柱建物で，建物主軸はN29°Wを向く。柱穴は円形または不整円形を呈し，径28～66cm，深度20～68cmを測る。EP11で根石を検出した。

遺物は弥生土器片，土師質土器羽釜・供膳具，白磁皿，近世陶磁器片（肥前系ほか），焼土ブロック，



第707図　1区 SA1001遺構実測図

木片などが出土。1は白磁の皿。体部外面の下端および口縁は露胎である，いわゆる口禿の皿である。釉には微細な貫入がある。胎土はわずかに黄味を帯び，微細な黒色粒を含む。森田分類白磁皿のD群に相当し，15世紀代の年代が与えられる。出土遺物から近世の遺構と考えられる。

掘立柱建物3号（1区　SA1003）(第709図)

1区北端，p・q 1・2グリッドに位置する。北側は調査区外に延びる。東西2間（3.8m）南北2間以上（2.9m以上）床面積11.0㎡以上，5基の柱穴が検出された側柱建物で，建物現存部長軸方位はN13°